

奇譚クラス

東京に現存する奇譚



「宇宙のどこかで」奇譚三十九夜物語

5月号

奇譚クラス

KITAN CLUB

5

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisy

Osaka Japan



定価 二五円

救いの女神





奇譚クラブ 五月号 目次

目次裏「風流いろは歌留多」……三十九夜同人作・滝れい子・画
幻想画「救いの女神」……南村 俊平

絵頭巻

晴姿後手高手小手釣り……………滝 れい子
焚 火(たきび)……………四馬 孝
庭先の晒物……………四馬 孝
姐御と三人のドレイ……………春川ナミオ
駕馬に跨がる……………春川ナミオ
やくざのランチ……………黒川不二男
豊土俊芸者相撲……………雪崎 京人
スキー服スタイルの切腹……………滝 れい子

ラビヤ・フォト

悦座の表情と調のアップ……………絹川 文代
私のよろこび……………竹野ひろ子
さるぐつわの表情美……………梨花悠紀子
破れた下着の幻想……………大塚 啓子
Mフォト「屈伏への序曲」「完全なる屈伏」
飼い馴された愛犬……………絹川 文代
脚下のドレイ……………梨花悠紀子

グ

女体自刃疑態とそのアップ……………大塚 啓子
オシメカパーとゴムの感触……………大塚 啓子
海老しばりのひとこま……………梨花悠紀子

女体淫泊記 身悶えるあけみ……………近藤 一……………36
告白婚誓 女人紅記……………須藤 律夫……………46
情動告白 舌は知っていた……………沢井 和雄……………50
奇譚三十九夜物語……………辻村 隆……………58
フィクション 女性の潜在意識……………早川 達……………72
麻生保氏の生活と意見……………麻生 保……………78
創作 妻の座への階段……………東町 二郎……………88
告白 私の女装人生記……………美島 弥生……………97
長篇連載 宇宙のどこかで……………佐治 麻造……………100

奇クサロン……………115

四月号を讀みて ガソ作・マニヤのノート……………115
対話社長と女秘書 美女博りの希望……………M 早見 華仕の断片……………116
ドレイ・ボーイへの手紙……………M 早見 華仕の断片……………116
ゴム製因衣の魅力……………連作「少女」・人質……………117
僕の大好きな大塚さん……………絶倫画がぞえうた……………118
白い乗足で マゾ画を望む……………119
まぞ川 凝脂の水……………M画「モノの味覚加法」……………120
連作 斎藤栄子さんへ……………幻想画アケロと白足袋……………121
アメリカ製の生理帯……………休 崎真昼の格闘……………122
連作「少女」……………尾 布 輝……………123
サロン通信——編集長へ……………まぞ川 柳自註(追加)……………124
審議会の勧告を讀に……………本誌最近号誌目次……………125

女子美術巻 「決戦」……………雪崎 京人……………131
ある告白 もう一人の私……………内海 昇……………132
最近の映画残断シーン……………東山 映史……………140
告白小説 悪の半生記……………日影狂太郎……………142
足についての文献と記録(三)……………木村 清……………150
マゾヒズム天国……………田沼 龍男……………156
奴隷市場の女たち(夢の国)……………雪崎 京人……………160
ある俳優の最期「衰蝶」……………奥田 夜枝……………172
マニヤの主要 私の洗腸観……………栗瀬 長……………182
幻想 切腹となればデニム……………草原 折夫……………185
フィクション 速水君の妻……………那須 智彦……………188
読者通信……………197

風流いろは歌留多

三十九夜同人作
淹れい子画

ら

欄間が

焼う吊し煮め

む

無理な

折檻

けがのもと

う

浮気の

罰

亭主

犬になり

の

過れば
のどもと

痛き
忘れ

お

屏

れた
男

女の手を
廻し

く

井戸責めの

お茶菜

缺血

る

苦あれ

洗腸の

しお

あり



晴姿後手高手小手縛り

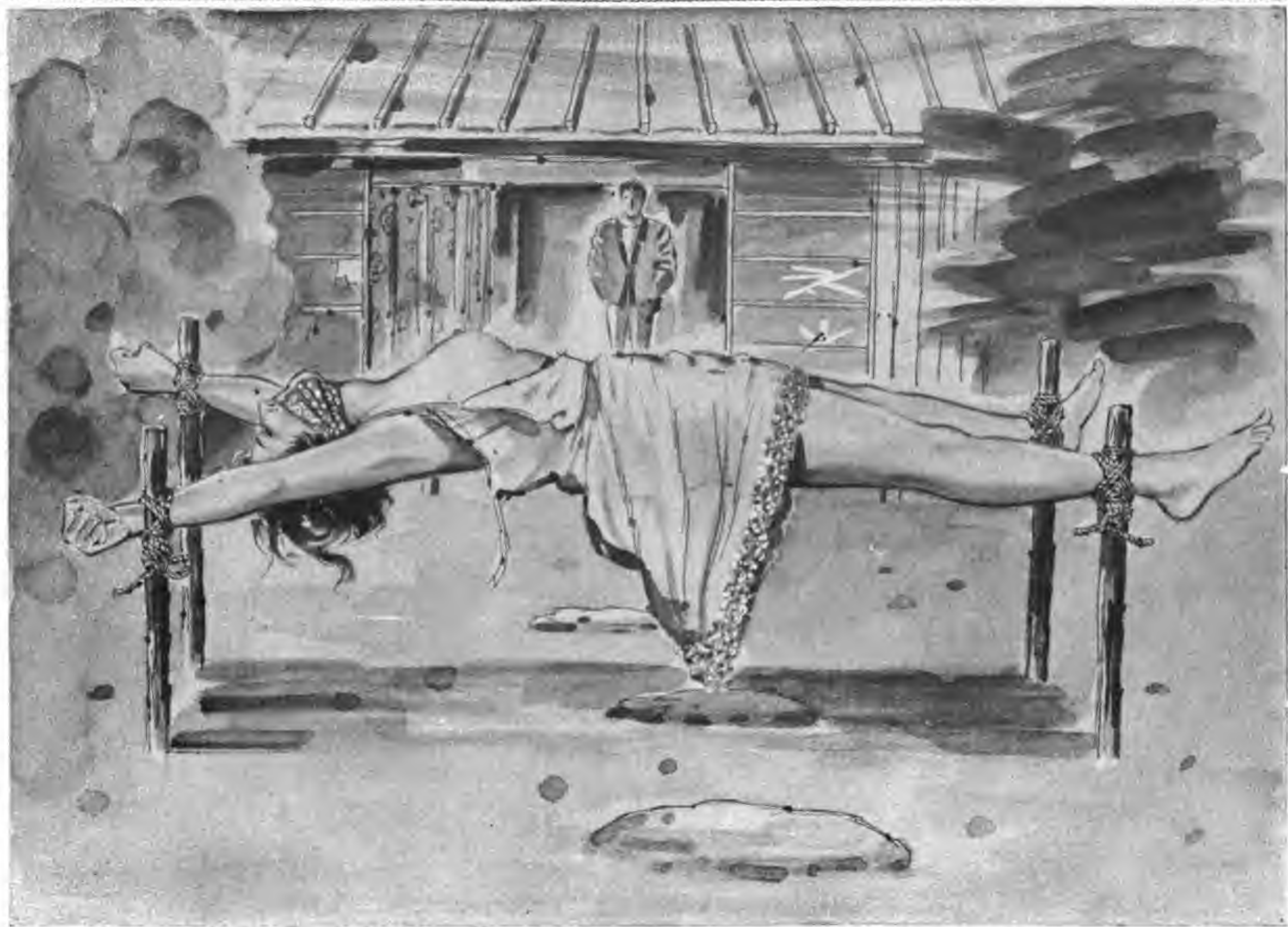
(瀬 れい子 面)

焚火（たきび）

（四馬孝画）



庭先の晒物





姐御と三人のドレイ

(春川 ナミオ 画)



鴛馬に跨がる

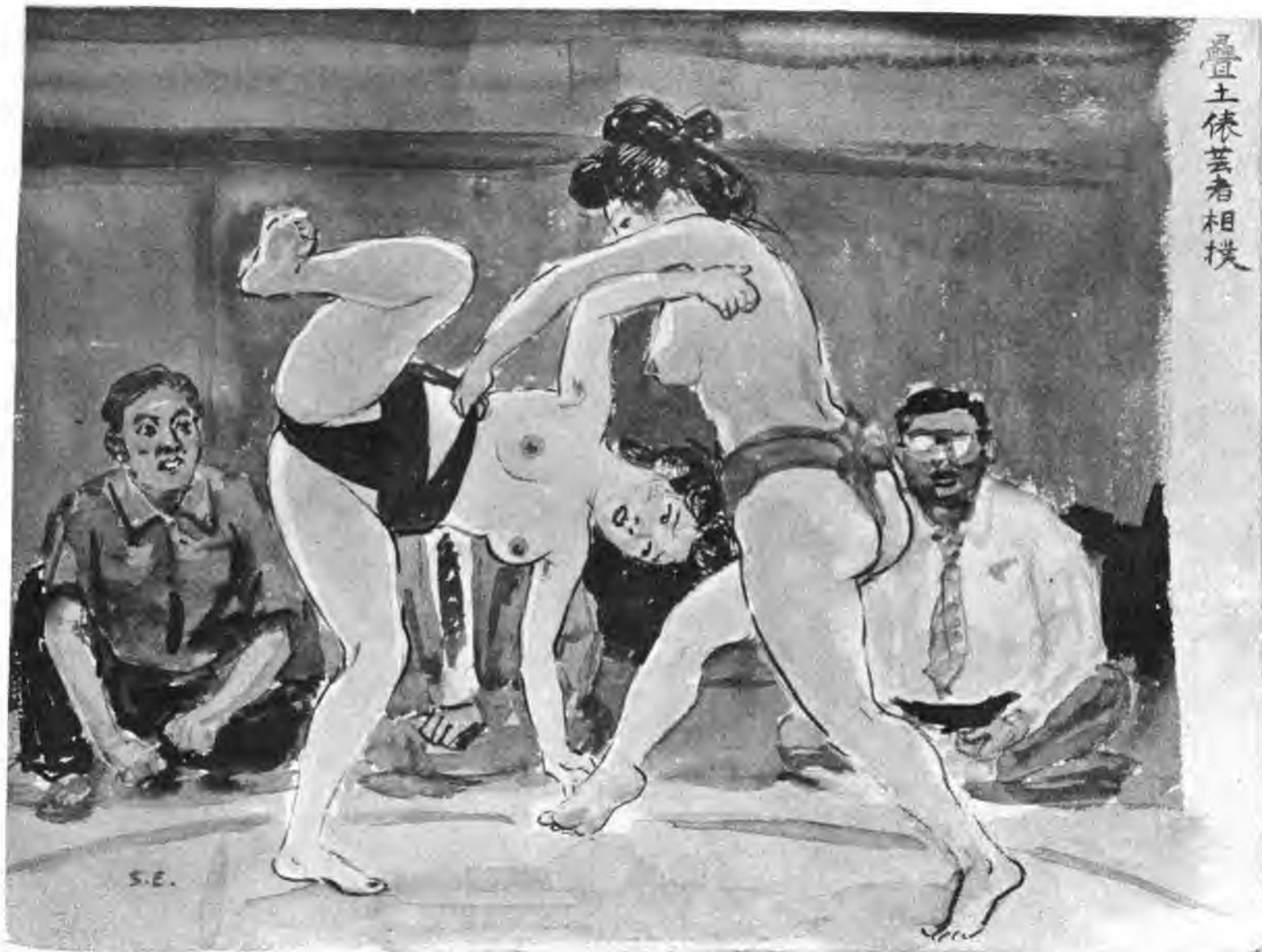
(春川 ナミオ 画)



やくざのリンチ

(黒川 不二男 画)

疊土俵芸者相撲



疊土俵芸者相撲

(雪崎 京人提供)



スキー服スタイルの切腹

(瀧 れい子 画)

悦虐の表情と縄のアップ



モデル・絹川文代



私のよろこび

竹野ひろ子







さるぐつわの表情美



梨花悠紀子



破れた下着の幻想



大塚啓子



屈伏への序曲



完全なる屈伏



飼
い
馴
れ
た
愛
犬





梨花悠紀子

脚
下
の
ド
レ
イ





女体自刃擬態とそのアップ



大塚啓子





オシメカバーとゴムの感触





海老しばりのひとこま

梨花悠紀子



新しい風俗文献研究誌

奇譚クラブ

五月特大号



1962年 5月号

(第16卷 第5号 通刊第165号)

身悶えるあけみ

近藤

一

「ウウウツ、く、くるしいーっ！」

「苦しい？ よしなヨ。そんなこたア、お前みてエな悪党の吐く台詞じゃねえ！ ここまでシラア切り通して、お上の手を煩わしたお前だ。序でのことに、もうちっと俺の吟味を味わってみな。何も彼も申し上げてみた所で、どの途お前は死罪極門。お上のお慈悲なんかありっこねエ」

「知、知らない！ あたしは、何も」

「よしな！ 俺の睨んだ眼に狂いはねえ。お前は誰よりもホシらしくねえ。だから、一番臭いことになるんだよう。いい加減に観念して、縄の味でも噛しめてみな！」

「ウツ！ウウツ！ ヒーッ！」

薄暗い番屋の土間で荒席に引据えられ、容赦ない責め問いにかけ

られているのは、質、両替渡世大判屋の女主人お栄。

大判屋の主人金兵衛が急死して世間に妙な噂が流れ始めた。四十二とはいえ頑丈そのもので金に目の無い金兵衛がコロツと死ぬなど凡そ予想外だったのだ。しかも大判屋では、三年前に先妻のお良が三十五の若さに卒中で亡くなっていた。その一周忌も済まぬうちに妾のお栄が本妻に直り、そして去年の春、お良の生んだ長男金太郎が食当りで死んだ。入代りのようにお栄が男の子を生んで栄吉と名づけたのが去年の春。そして今度は金兵衛の急死。世間の疑惑は大判屋に注がれたのだ。

折も折、後妻のお栄の食事に毒が仕込まれた。幸い匂いを怪しんだお栄は食べなかったが、代りに食べさせた飼犬のクロが血を吐いて死んだという。

耳よりな話だと乗込んだのが御用聞、武蔵屋藤兵衛。人呼んでゲジゲジの親分。怪しくても怪しくなくても、眼についた奴なら片っ端からフン縛って、一応はしょっぱいてビシビシひっぱたこうという根性は、誰にもひけを取らない男だ。番頭の佐平、手代の彦一、用心棒兼居候の浪人者松林三十郎、先妻のお良の娘お千代とお喜美、女中のおとし、おたみまで珠数繋ぎに曳っぱって行つて、毎日々々身の毛もよだつ責め折檻。

大判屋の店は、すっかり者のお栄が残った丁稚と婆やを相手に続けているのだが、余り気の毒な話だと、下っ引の三太から話を聞かされた捕物上手と噂の高い越前屋惣助が腕を組んで考え込んだ。丁度駆込んだ丁稚の長松に取組まれたのは、人気絶頂の若親分。半次郎。十手を懐ろに大判屋へ急ぐ。

越前屋親子一流の信念というか、むづかしい事件では犯人は一番疑われそうもない奴、入組んだ事件では必らず女が大きな役割を占めているから、鍵はいい女をひっぱたいて締上げること、と考えていて、今まで一度の外れもない。若親分の半次郎は若々しくキリリとした男前だが、若い女を何の容赦もなくキリキリ責めつける所がひどく魅力で、娘達の間で滅法人気があり、半次郎の手で縛られてみたいという娘泥棒まで忍んで来る有様だった。惣助と半次郎が縛ったのは、毒を盛られた本人のお栄。しっかきで滅法美人でイキのいい大判屋の後妻のお栄だった。

長襦袢姿に剥がれたお栄。流石に大店を切廻すだけに、二十五、六の若さだが威も品もあり、上品な色気が溢れている。水色の長襦袢に扱帯の緑が鮮かなコントラストを見せ、高手小手に捻上げられ

た両腕が、繻袢の袖口から二の腕まで大きく露わしてしまふ。柔らかな扱帯が思いきり女の胸を絞り上げると、形良く發育した胸が尚一層豊かな張りを増す。胸に廻した縄目へ十手をこじ入れてこね上げると悲痛な呻きが突上げられ、顔を歪め、ふり立てる。

十手が抜かれる途端、ホッと吐息が洩れ、女は慌だしく切なげに喘ぐ。六尺の檜の棒が女の肩口を挺の支えにして後手の下へ差込まれ、ジワリジワリ持上げられると、縛られた女の上体が捻倒されて、遂には胸が膝に押付けられるばかり。背筋に高々と括られた白い指が白魚の跳ねるように屈伸しヒクヒク顫える。しなやかな上体が悶え抜き、捻曲げた顔に充血した眼が瞋り、鬨がガクリと傾き、ほつれ毛を噛んで、拷問に耐える若いお栄。女が佳いだけに凄艶というか、背筋がゾクリと来るような光景。

責められる女お栄は私、つまり梅原あけみ。

純然たるドサ廻りでもなく、梅村幸三郎一座という看板をかけて常打ちの小屋の一つも持続けようという私達にとって、女の責めは欠かせない生活源なのだ。女の責めは必らず当る。どんな大一座でも、水枯れの二、八月には責め場のある芝居を出す位。まして私達の一座でお客を集めるのには、評判になるくらいのだギツイ責め場、それも美しい女が悲鳴を上げてのたうち廻る見せ場の一つや二つは演り通さなければ駄目なのだ。

お栄の役がそれだ。勿論見せ場はお栄の責め場、それも夫殺しの下手人だから白状するまで思い切った拷問ができる。(何て悪い奴だ、女の癖に何て強情な奴だ)と観客の正義感に訴えて憎悪を湧かせておいて、一方では美しく粧った気品の高い女に仕立てて観客の

嫉妬を煽り、美女の苦悶と絶叫を期待させるのだ。
だが、観る方は良くても責められ役は楽ではない。普通の芝居では本当に縛られる役が少い。役者も人の子、やはり商売とはいえ、



縛られて小突かれる浅間しい姿を人に見られたくはない。稀には早替りの必要もあるけれど、そうでなくても嫌だから、背中で廻された縄尻を持っていて、歩く時には後手の辺りを抑えて隠して貰うものだ。

私は女だ。自分では人一倍女らしい感情の持主だと思っている。それだけに私は舞台上で縛られて歩かなければならない時、恥ずかしさに眼を明けていられない。其の場にヘタヘタと坐り込んでしまいたい程膝が震える。私のそんな癖を一座の人達はよく呑み込んでいてくれて、優しく庇ってくれる。

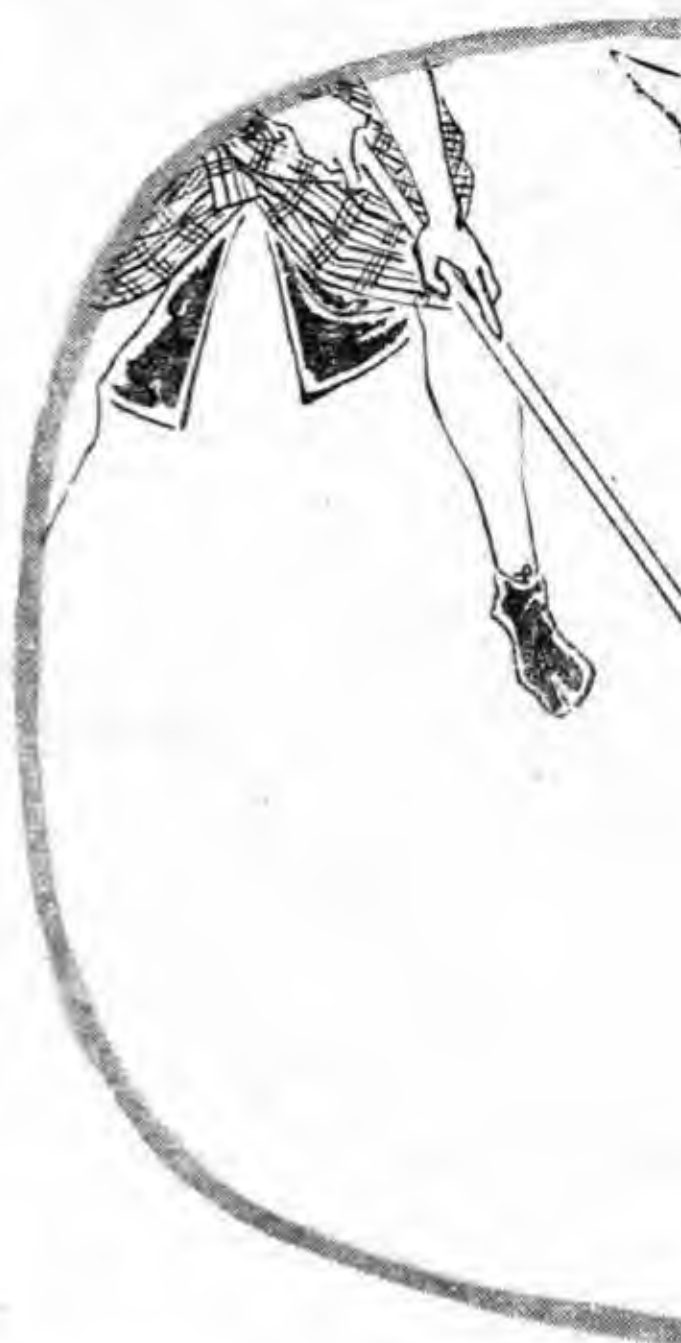
私は今二十六。縛られ役、責められる女として人気が出た。もう十年以上になる筈。私は殆どの演し物で縛られた。私が縛られないで芝居をしたのは幾つもありはしない。お客様は私の縛られた姿を見て、私の責められっぷりに息をのんで、満足して下さるのだ。

私は容易に白状しない女になった。というより、芝居の台本が私の素直な服罪を許さないのだ。私が悪人に責められる時、お客様は私が善人を裏切らないように期待する筈だ。私が善人から責められる時、お客様は正義感に酔って私を赦さない。お茶の役も、結局包みきれずに白状するけれど、それは責め苦に負けたのではなく、拷問疲れの神経を若槻分半次郎の仕組んだワナにかけられて、自分から犯した罪を口走ってしまふことにして悪女ぶりに凄みを利かしている。晒し場で薄化粧をして貰い、刑場へ曳き立てられる所で幕

が降り、私は観客の注視の中で、うつ向き加減に花道を歩かせられるのだ。

私は今の一座に、特に名指しで買われて来た。親方の幸三郎さんが、偶然に私の舞台を観て、私の責められっぷりに惚れ込んだのだそう。その以前から親方はお客を集めるために女の責めを考えていて、いろいろと自分でも本を書いたりしていたのだけれど、肝心の責められ役がいなくて、帯に短かし襷に長し、固定した人気を持てる女優を血眼で探していたのだそう。そして、私が眼鏡に叶ったという訳。つまり私は前の劇団でも縛られたり鞭で撻ねられたりしていた女優だったのだ。

私がその劇団へ入ったのは、マネージャーに誘われたせいもあるけれど待遇が割に良かったからだ。食べて寝る以外に、お喋りと踊



りくらいしか能のない女の子の暮せる処といったら、そうある筈がない。バーやキャバレーに行つて着物や靴や化粧品で借金をふやすよりは、のん気に唱つたり踊つたり芝居をしたりする方が、私の性に合っているらしい。

「劇団ピンクローズ」の名前の通り、若い女のストリップが売物の劇団で、一年の殆どを田舎の町廻りで過ごしたのだが、ここで、私は芝居のできるストリッパーとして扱われてきた。それと云うのも、女のヌードが売物だけに、余程体の具合が悪くなければ女は皆舞台に出てハダカを晒さなければならないから、集められる女達は演技力よりも膚の色艶やヴォリュームが必要とされる。新制中学さえ碌々行かなかった頭の弱い女の子で、体ばかり一人前という雌豚では、まるで木偶人形のように突立ったまま台詞を棒読みにするだけ。男の団員達が悪ふざけで客を沸かせる間、女達はモタモタオドオドするばかりなのだ。欲張ったアブが看板で、サド・マゾ・フェチその他いろいろな傾向の見せ物を、思いきりグロテスクに演じて行く。その中で学歴はともかく、小才の利く私が重宝がられたのは自然かも知れない。ヒロインには、マネージャーのいい人と云われていた美原さゆりが扮している。中央の劇場でも割に知られていた綺麗な人だけれど、特に引抜かれたピカ一だけに、演技も貫禄も勿体ないくらい。私のことを随分可愛がってくれたし、私に可憐な娘役を割振って引立ててくれたのも美原さゆりだった。

私は彼女にだけは恩というものを感じた。舞台のことから日常の

細かなことまで何くれとなく私を庇ってくれる彼女に、私は尊敬と親しみを感じていた。私がうっかりマネージャーの誘いに乗った夜、泣きながら詫びに行った私を赦してくれた。以後、心の中で私はさゆりに誓ったとおり、マネージャーを用心深く警戒した。その結果は残酷な報復だった。舞台の上で、私はさゆりを軽侮し、反抗し、徹底的に侮辱を加えなければならなかったし、さゆりは芝居の中で嫉妬に狂い、残忍なリンチを愉しむ女にされて行った。さゆりを責める芝居には心が痛んだけれど、自分が責められる場合はいつの間にか現実が混り込んで来て、私の心を安らげたのかも知れない。

「あんだ、可愛いワ、憎らしいくらい」

さゆりは私にそう云った。私は責められる女が板についたとも云われたし、縛られたり撻たれたりする姿が、とても美しいとさえ云われた。

私に梅村一座から話が起ったとき、さゆりは私のために飲んでくれた。私はさゆりと一緒にいてもっと苛められたいと希ったけれど、さゆりに酷く叱られた。その代りに、私が「ピンクローズ」をやめる前の晩、私はさゆりの手で半殺しの目に遭わされた。誰も止められなかった。さゆりの瞳はキラキラ輝やいて顔色は思いつめたように蒼白だったし、私は全身が小刻みにブルブルふるえ続けて、口に詰込まれたハンカチを一生懸命噛みしめているばかりだった。

「ピンクローズ」の専属になる前の私は、東京では三流のバーレスク劇場のアルバイトダンサーだった。中学二年の時だった。勝気な性分だったからクラスの姐御気取で相当な無茶をやっていた。三年生の通称エミちゃんが私に目をかけて、いろんなことを教えてくれ

た。盛り場のジャズ喫茶で馬鹿騒ぎを憶えたり、スケートやパチンコやボーリングも知った。友達も大勢できた。家から貰う小使いは何にもならなかったけど、学校をサボっての仕業だったから、父ちゃんや母ちゃんには話をしないで自分でお金を作ったかった。話に聞いたし見様見真似で男の人を誘うことも知っていたけど、私はやっぱりお嫁に行けなくなるのが心配だったし、エミちゃんも止めてくれた。そして、その代りに劇場のアルバイトダンサーの口を探して来た。バラックみたいな小屋だった。エミちゃんの子分の冴子と三人一組で二、三分の踊りが三種類だった。エミちゃんがエミ、私がルミ、冴子がユミ、「スリー・エンジェルズ」と呼ばれて、生まれて初めてのドーラン化粧でライトを浴びるのは結構楽しい。お客が拍手してくれたり、声をかけてくれたり、時には手を伸ばして来ることもあった。一寸した小使いだし御機嫌な暇潰しだから私達は滅多にサボらなかった。

ある時、女護ヶ島騒動みたいなショウをやることになって、女の子が足りないからって狩り出された。私達三人とも面白半分に舞台へ出た。絶海の女ばかりの孤島に二人の男が漂流して辿り着く。忽ち女達の奴隷にされるが一人が逃出してしまい、残りの一人は女のリンチを一身に受けて苦悶する。苦悶する男には一座の二枚目若森八郎が扮した。私達の台詞なんかいい加減で、八郎を取囲んでワァワァ云いながら寄ってたかって騷ればいいのだ。エミちゃんなんか八郎の鼻をつまんだり。頭を踏んだりした。三日目からショウの筋が変わって、逃出した男の急報で女護ヶ島が攻撃され、女達は全部捕虜になってしまい、女王以下が男達の奴隷にされてしまうことになった。勿論捕虜にされた女達は珠数繋ぎで、私達三人も両手を背中

に廻して、お腹と手首に縄を巻きつけられ、一列になってゾロゾロ歩かされた。ショウの筋がそんな風に変ったのは私達にとっていやだったし、若林八郎という人が年令よりもずっと若々しくてお兄さんみたいに親しみの持てる人だったので、私は奴隷になった八郎を随分いじめた。どうせ最後には私の方が捕えられてロープで縛られて奴隷にされちゃうのだから幾らいじめても足りない気持だった。手首と足首を括られているだけに、大の男の八郎が私達のような女の子の足許でビクンビクン顫え、奇妙な呻き声を上げて若しむ。

「今日って今日は赦せねえナ。何でエ、人が優しくしてやりゃ図に乗りやがって。オイ、ルミ！ お前、覚悟はいいンだろうナ」

私達三人は舞台で結わかれたまま、楽屋でもロープを解いて貰えなかった。八郎は私に一番腹を立てているらしく、私も自分が調子に乗り過ぎたと思っていたから、素直に怒られる儘になっていた。

私は若森八郎から色々の事を教えられた。八郎は私をショウの中で使うようになった。三人組の中で私だけが、アルバイトよりプロに近くなっちゃったから、エミちゃんや冴子は私を敬遠するようになり、私は一人だけ劇団の専属にして貰った。

専属になった私には誰も遠慮をしない。稽古もビシビシやるし、それよりも一番新しい女の子だから掃除からお茶汲み、幹部の洗濯や使い走りまで押しつけられた。私は随分頭に来た。やがて分った所では、八郎が私達に示した好意は単なる興味でしか無かったのだ。私なんかよりもっともっと女っぽい海千山千の立人達が、八郎を争って泣き喚くのを見せつけられて、私はすっかり嫌気がさしていた。もともと私などを大して気にかけていなかった八郎だから、私のお熱がさめると、もう口もきいてくれなかった。それでも舞台の上

では私が必要だったから、唄や踊りだけでなく、芝居の中でも端役につけてくれた。「女のくせに」とか「女なんか」とか云われて、馬鹿呼ばわりされながら私は縄の味を覚えて行ったのだ。女狩りの獲物とか、惨殺される若い女奴隷とかは、八郎が好んで私に割振ったパートだった。

パレースク劇場の薄汚れた楽屋の隅っこで私は腐りきっていた。そんな私を拾い上げてくれた「ピンクローズ」のマネージャーにしても慈善家ではなく、ビジネスとして私を、それもロープで本当に縛ることのできる女を、お金で買っただけの話だ。だから私が新しい劇団に移って最初に貰った役も、ストーリーを盛上げるために残酷な拷問を受けるだけの若い女だった。

美原さゆり扮する密輸の女王の経営するキャバレーに私が流れ込む。取引が失敗し、さゆりは警察の手が伸びたことを知る。スパイは誰？ 身許不明で流れ者のダンサーの私が怪しいと云われ、縛り上げられて地下の拷問室へ曳立てられる。おとなしくついて行った私も恐ろしい道具立を見て必死に迷廻り、抵抗し、暴れた。両手を頭の上で吊られながら踊りで鍛えた脚で蹴りつけた。まわりの中から鞭で撲りつけられてぐったりした。それでも白状しないからと云うので拷問台に大の字に磔けられて気が狂ってしまう。最後は警官隊との拳銃の撃ち合いに密輸団の弾除けにされて死んでしまう。それがピンクローズでの初役だった。

前のパレースク劇場より筋のある芝居をやるせいか私には居心地がよかったし、ピカ一の美原さゆりは、余りヌードを売物にしないで女王然と収まっていた、私を引立ててくれた。新加入の私を売出

すための次の出し物は「鞭に哭く女」と題した香港への女の密輸ものだった。さゆりは密輸の女ボスで、私は拐わかされた女、幾度も逃亡を図って捕えられてはリンチを受け、足を鎖で繋がれ、肌に奴隷の烙印を押され、最後には救出されるが、恋人の腕の中で死んでしまう女なのだ。

私は美原さゆりが冷い美貌に似合わず気さくで世話好きらしいと感じた。主役とは云え悪役では気の毒な気がして、直接さゆりに話してみた。その結果「麻薬に魅入られた女」では阿片密売団を捜査する婦人警官がさゆりで私がその妹。姉の苦勞を見兼ねて協力するうちに、私は密売団の一味に

紛れ込み、やがて姉に手柄を立てさせた時には、自分も麻薬患者として姉の手で捕縛され、浅間しく苦悶する女になってしまふ。

私の今日を或る意味で決定したと云えるのは「地下牢にのたうつ女」だった。私は大金持の娘。さゆりは私の父の御主人の娘。父が御主人を謀殺して財産を奪ったのだが、さゆりは父への復讐に、まず私を捕えて隠れ家の地下牢に繋ぎ日夜拷問する。遂にさゆりは父を射殺し警官隊に捕え



られるが、その眼の前で気が狂った私が受けた拷問を再現して怖えてみせるのだ。この一作で縛られ責められて悶える女、そして拷問の果に気違いになる女は私のはまり役になってしまった。さゆりの一字を貰った千原あけみという私の名が、ドギツイ絵看板に太字で書かれるようになった。

ピンクローズに移ってから半年位いして、さゆりが酷い熱に悩まされた事があった。ヌードショウの劇団がピカ一女優に休まれては痛手だった。背に腹は代えられず、切羽詰ったマネージャーの考え

たのが、千原あけみ主演の「火焙りの狂女」だった。

私もさゆりと約束した手前いやとは云わなかったが、あんまり酷い芝居だった。

始めから終りまで私は気違いなのだ。その癖白痴美というか、顔は可愛く、男と見れば寄って行く色気違い。初めての時代物というのに長襦袢に扱帯をしどけなく締めた恰好は残酷すぎる晒し者だと思う。その気違い女が幕府のキリシタン狩りの犠牲にされ火焙り台で焼殺されるという話だっ

た。

私は体当りで熱演した。

「極楽といういい所へ行けるようにやるのだ」と役人が云う言葉を信じ抜いて、見せしめの拷問も火焙りの極刑も嬉々として受ける哀れな女を私は一心に勤めた。

「氣違いと申す者は余り痛みを感じないものとか。こやつも氣違い、しかも女盛りだけに責め甲斐があるというものだ」

見せしめのために群衆を集め、竹矢来の中での拷問を、私は身をくねらせて受けていた。ヒイヒイという泣き声や悲鳴もなるべく間伸びした調子で、虚ろな心の女を表現したつもりだった。悪役人に欺

されて曳かれる時も、高手小手に厳しく縛られながら、まるで欲しい物を貰いでもしたように嬉しがってみせた。太くて頑丈な火刑柱の前へ進むと自ら寄りかかるように背中を凭れさせて、両腕を背後に廻して柱を抱く。火焙り狂女が苦しみ悶えても解けたりしないように充分な縛り方をするから痺れてズキズキ疼いたり、手首に痕が



残るのも止むを得ない。

「助けてエー！ こわいよウ！」

「騒ぐな！ いいか、お前は切支丹だ。もうじき極楽という、そりゃアいい所へ行けるのだ。楽しみに待たうがいいゾ」

足許に山と積まれた薪に火が点じられる。

「うわっ、あつ。あつ、熱い！ 熱いよウ！」

私の姿が真赤に照らされる。薪の束に仕掛けた赤い豆電球が全部つくと実際に火で焙られるように見えるだろう。

「う、ううっ、うー」

私はひっきりなしに藻掻く。太い柱に後手縛りの身を悶えて、顔を歪め、灼熱の責苦に獣のような呻きを絞り出す。ライトが私の悶えに当てられ、悪役人の哄笑のうちに私へのスポットを残して暗転、私の焼かれる狂女だけが闇の中に真赤に浮き上り、厳しい縄目の下で全身をくねらせる。

私が苦悶の演技を止める迄に十分という時間が用意されていた。

だが初めの三分で私は観客の眼を奪い、呼吸さえ自由にさせなかった。私がガックリと首を垂れ、身動きを止めて幕が下りると、観客の思い出したような溜息が、柱に緊縛された私を襲う。

私は緊縛を望む。初めのパースクで懲りたからだ。緊縛を嫌って緩い縛しめのまま吊責めにされた時、危うく息が止まる所だったし、いい加減の縛りを受けていて骨がはずれたことがあった。それ以来縄目には細心の注意を払い、要所々々をきっちりと厳重に縛るよう注文をつける。そのことと氣違い役が多いことから私は変態女優と綽名されるようになってしまった。

「火焙り狂女」を予定通り打上げて、上々の入りにほっとしたものの、さゆりの恢復は完全ではなかった。まだ元気な舞台を期待するのは無理だったし、といって美原さゆりの名を看板から落す訳にも行かず、結局前作と同様、私を売物にしたキリシタン殉教史「はりつけ小町」を出すことになった。

さゆりは珍らしく男役で前髪姿の若衆になり、熱心なキリシタンで、私がその恋人お雪だった。

お雪は別に切支丹ではなく一途に恋人を慕う純情な乙女なのだ。宗門改めの日、隠れていた雪が怪しまれ、引立てられて意地悪い訊問の挙句、踏絵を強いられる。自分の特に信じた神ではないが、恋人の信奉する聖画を足に掛けられず、雪は切支丹信者として捕縛される。転宗を強制する拷問の内で、思わず恋人の名を呼んだことから、信者の中心人物として探索されている恋人の隠れ家を白状せよと責められる。

恋人のために死を決意して耐える乙女に怒った代官は町に高札を立て、雪の処刑を囑に恋人を捕えようとする。恋人を引寄せるために雪は本縄にかけられて、町の中を散々に曳廻された上、町外れの竹矢来の中で磔柱に架けられる。恋人が現われないまま、雪は一思いに処刑されず、永く苦悶するようにわざと急所を外して槍で突かれて呻く。

雪が絶命する直前に駆けつけた恋人が役人を斬伏せ、乙女の屍を抱いて哭く、さゆりの美剣士ぶりも見せ場には違いないが、観客は私の苦悶する姿に息をのむ。それまでの私は抵抗して暴れたり、苦痛にのたうち廻ったり、割に楽に演技したけれど、切支丹は別。何しろどんな場合にも抵抗が許されないし、常につつましく、どんなに烈しい責苦にもものたうつような真似ができない。

「異教を信じると心まで異国にかぶれるのか！日本の女なら生きてはおれまいが！」

晒し者になっても、唇を噛んで役人の責めるままになり、じっとして舌を噛み切って死ぬこともできず、呻くだけなのだ。何と云っても本当に緊縛されていて、動けなくては苦痛が紛れないし、体も心も本当の拷問を受けている感じがしていた。

私にとって新しい責められ方を拓いた「はりつけ小町」が梅村幸三郎さんの心を捉えたのだそうだ。「火焙り狂女」を偶然に観て興味を持ち、雪の舞台を観て私を欲しくなったという。

舞台があまりキツかった。観客の呼吸までが私の苦悶に合っているの、私はつい精魂つくした演技をしてしまう。幕が下りてホッとして私も溜息をつく。そんな気の緩みにマネージャーがつけ入っ

たのだろう。

ショウが変ってから数週間というものの、私の舞台はガラリと変わった。

それまでのような唯苛められてばかりいる可憐な娘役でなく、アプレというかドライというか、自分の欲望のために平気で他人を陥れるような若い女にされた。

その典型が「女殺人犯」だ。さゆりは貞淑な人妻で、私はその夫の二号。

私は夫をたぶらかして骨抜きにする。夫の家へ入込んでさゆりの目の前で傍若無人に振舞い、さゆりを侮辱し、虐待する。さゆりを牛馬のようにこき使い、果はさゆりを縛り上げ、夫に手伝わせて鬨り者にする。それでもじっと耐えているさゆりを売飛ばせと夫を唆かし、哀願する妻に夫は冷然と別離を宣告する。その夜更け、夫と私はさゆりに絞^{くび}り殺されて醜い屍を曝し、さゆりは殺人犯として曳かれて行く。

指をつめる代りに半殺しのヤキ入れを喰ってヤクザ仲間と縁を切ったさゆりが、今は平和な家と家庭の主婦として前歴を秘しているのを嗅ぎつけた私が、酷くゆすっていたぶる。

思い余ったさゆりは私を殺して自分も胸を突き、夫に抱かれて深い愛情に哭く物語。

演劇界の女王と云われたさゆりが、私の流した中傷の噂で築き上げたスターの座を逐われ、苦勞の末に女流プロデューサーとして復

讐に乗出し、体を張って獲得した私のスターの座を、一挙に崩してしまふ物語。

とにかくマネージャーの書く台本では、主役はさゆりなのだ。それもさゆりに対しては随分と皮肉なヒロインばかり。苛められ、縛られたり私刑されたりさえするのだ。

私はなお悪い。軽薄で小才の利く悪党で、余り可愛くない、憎まれ嘲笑される役なのだ。事毎に私とさゆりは舞台の上で憎み合い、傷つけ合った。

役柄とは逆に私とさゆりは親密になって行って、私はさゆりの召使いとして奉仕にあけ暮れたし、さゆりは私を縛り上げ、お仕置の鞭を振るい、女王として君臨したのだ。女同志の奇妙な生活が全く純粋なものだっただけに、私には美原さゆりが忘れられぬ人になったし、いつまでも愉しい思い出として残るだろう。

最後の晩、猿轡を噛んだ私が、殺される！と覚悟した程烈しく私を責めながら、さゆりは両眼に涙を一杯溜めていた。本当に淋しそうなあの夜の美女の涙顔を私は忘れられない。

私が辞めて、マネージャーとさゆりがどうなったか私は知らない。もしかしたら、あけみというオダリスクを失ったさゆりは、舞台上でも私生活でも、マネージャーの飽くなき嗜虐に曝されて、喘ぎ続けているかも知れない。

可哀想なさゆり姉さん！

私はそっと呟いてみる。

告 白 的 随 筆

女 人 紅 記

— 会 津 の 女 —

須 藤 律 夫

三十六年の暮、寒い夜であった。

下谷御徒町のうら通りを歩いていたら私は、いつか並んで歩いている妙令の女に気付いたのである。何を話しかける訳でもなく、勿論私の知り合いの女でもない。上野駅迄の数町

を尾いて来るのだが、最初は一寸気味悪くすら感じるのであった。上野山下の、K銀行の角を曲ると、其処は余り人通りもなく、薄暗い街路灯の下まで来た時、

「どうかしたの？」と、私は立ち止って覗き込むように尋ねてみた。

「いいえ……散歩がしたくて……」

女は消え入るような声を出したが、その眼には何かを訴えるような妙な輝きがあったの

だ。黒っぽいオーバーの襟を立てていたし、髪もカールが乱れて、夜目には顔も定かではなかったのだが、娼婦とはどこか違った感じである。

もうその頃は、忘年会の酔も殆んど醒め果てていた私は、通りかかった店でウイスキーの一壺を求めると、彼女を促してT旅館の方に歩き出していた。

私と砂塚いと子との初対面は、そうした朱枯しの夜、全くひょんな出会いだったのであるが、散歩は寒いから、旅館でお話ししようと言った私の心の底には、「冬の夜のアバンチュールを楽しみ度い」と言った、卑屈

な欲求のあった事は否めない。

きれいに磨き上げられた階段を上ると、二階は四間程あり、一番奥まった四畳半の部屋に通された。螢光灯のもとに改めて見直すと、上背こそ無かったが仲々ボリウムのある軀つきをしている。私はさっき「妙令」と書いたが、歳は三十五、六でもあろうか、唇のやや大きいのが難点だったが、濃い眉毛やもみあげ等がよく調和して、何処か女優のKを偲ばせる俤があった。

正月用であろう、かけたばかりのパーマもよく似合っていたが、前の方は風に乱れて何処か楚々とした感じである。話の糸口をつか

む可く、私はウイスキーを取り出すと彼女にもすすめてみた。

「下さるの？でも余り戴けないのよ」

グラスを取る可く差し出された手は余り荒れてもいず、むしろすんなりとした指先はペンを執る手でもあろうか。その薬指にはめられたフランス・ダイヤ（らしい）の二かけが、傍らの電気ストーブに照らされて、光りは赤く屈折して輝いていた。

——ダイヤも石炭も同じ元素である——とそんなことなどから話の糸口は急速にほぐれて、いと子も次第に多弁になって行った。尤もそれには酒の酔も大いに手伝っていたのかも知れない。何故なら「余りいけない」と言った彼女は、差されたら絶対辞せず、「相当にいける口」だったのである。サイダーにウイスキーを割ったのを飲み乍ら、間わず語りに彼女の話し出した事からは、それ迄の私の想像とは又少し違っていた。別にいと子の戸籍調べをしてみても今更始まった事ではないのだが、東京の、いや江戸ッ児とばかり思っていた彼女の生れは、福島県の東山温泉であったのだ。

福島市の高女を卒えて間もなく結婚、然し不幸な事に、もう終戦も程近くなつてその夫は戦死して仕舞つたのである。その後地元の鉱山事務所に勤め乍ら再婚の機を掴んだものの、二度目の夫とも二年前に死別して仕舞つた。止むなく二児を連れて上京、現在では千住、汐入の近く、或る石炭会社に勤めているとか言っていた。

「バスが上野駅前で止るでしょ。だから会社の帰りに、時々散歩するの」

私は二年前に別れたと言う、その夫との生活が、相当に苛烈なものであった事を想像した。何故なら彼女の言う「散歩」なるものが、月数回行われる事を聞かされたからである。赤羽の都営住宅に住みつき、残された五才と八才（共に男児）の遺児を育くみ乍らも、時としては舗道に亡夫の幻を追う女、然し街娼と違って、好きなタイプでなければ絶対に近づくかなかったと言う。

或る時は都電の安全地帯にたたずみ、又或る時は御徒町駅の階段下に立った事もあると言うが、亡き夫のイメージにびったりの男に

のみ声をかけるといふのは、せめてもの亡夫に対する、否、彼女自身の良心への償いなのであろうか。享樂が若し美德であつたとしたら、それは果して肯定される事なのであろうか。

× × × × × × ×

「お客さん、若し何かお食事の御注文がありましたら……」と、その時女中が袂越しに声をかけた。時計を見ると、もう十時半を過ぎている。結局、彼女は好きだと言うとんかつを、私はビールの追加を注文して、話の穂をついだ。

「時にいとさん（彼女は「いと」と呼び捨てにして呉れと言つたが）貴女は東山の生れだつたね？　じゃあ、会津若松も近いね？」

「そうね、東山は若松の東の方なの。北の方には羽黒山があるわ。あの辺では鶴ヶ城や飯盛山が有名ね」

彼女が飯盛山を語り出したので、私はささず質問の二矢を放った。

「飯盛山と言えば、戊辰の役の白虎隊ね。いとさんは知っている？」

「ええ知っているわ、だって地元ですもの。弁天山と言う丘の上にお墓があり、その近く

に白虎隊の記念館もあるのよ」
郷里の話ともなれば熱心に語り出すのは誰

しも同じかも知れない。彼女も勿論例外では
なく、東山温泉の旅館街や湯川の清流、そし



て土地の芸妓の剣舞などに就て得意気に語り出したが、中でも白虎隊の壮挙に就ては強くこれを讃美して、

「白虎隊の人達って壮烈ね、僅か十五、六でお腹を切ったんですもの」

と、軽く唇を嚙んで私を見上げた眸は得意気だった。

「若し、いとさんだったらどうする？ 若し貴女も隊員だったらさ。やっ張りお腹を切つて死ぬかい」

「私だったら？ そうね……その時になって見なければ判んないわ」

と、これはやや期待はずれの返答。

「その時になって、仮りに死ぬとしてさ。いとさん、貴女知ってるかい、切腹の仕方」

「切腹の仕方？ 詳しくは知らないわ。だってあれ、むづかしい作法があるんでしょ」

彼女は事もなげに言い放ったが、その時は却って、救われた様な気がしたのも不思議である。

× × × × × ×

午前0時近く、東北線の下り列車であろうか、近くの上野の杜をかすめて汽笛の音の聞えて来る。何の縁もゆかりもなく、それもつ

い数時間前にふと出合っただけの二人が、寒い木枯しの吹き荒ぶ夜、互いに旧知の如く語り合っている——男女の契機なんて全く不思議なものだ。

彼女は十四貫近くもあるのであろう、腰から腹部にかけての線は特に豊かで、——こんな女に若し腹を切らせてみたら——と、そんなサデイスチックな妄想がむらむらと湧いて来るのだった。凄艶と言うか、哀切と言うか、私のイメージは白虎隊を踊る会津芸妓の上に、いつかオーバーラップされていたのである。そしてその妄想が愈々極点に達した時、「ねえ、いとさん、お腹切ってみない？」私は思いきって言った。

「え？ あたし？ あたしがお腹切るの？」
「いや、さっき聞いた白虎隊の切腹ね。あの真似をして見せて呉れないか」

口の中がばさばさに渴いて、我乍らつまらぬ事を言ったと思った。

「切腹の真似？ 白虎隊の剣舞は四、五回見た事あるけど、でも出来るかしら」
「出来るさ。見た通りでいいんだよ」
「解ったわ。貴男は切腹に興味をお持ちなのネ、いいわ」

彼女は気軽に承諾した。部屋中を見廻していたが、片隅に寄せられた食卓からとんかつのミートナイフを取り上げた。クルクルと器用に紙ナプキンを巻きつけると逆手に握り、左手で胸もとを充分に寛げる。いつか女体割腹のムードも盛り上がり、私が電気スタンドを近付けて見守るうち、彼女はナイフを左脇腹に当てた。

「じゃあ、やってみるわ。見ててね」

静かにナイフは腹皮の上を滑って行く。尖先（と言っても洋食のナイフであるが）は、深く突刺さっているように見えたが、動きにつれて又表皮に顔を出して右脇へと滑って行った。一文字腹の仕様が終ると、

「これでいいんですよ。でも切腹ってすぐいたいものネ」

いと子はいたずらっこのようにお腹を押え乍らいった。

× × × × × ×

その夜、どうしても家を明けられぬ野暮用のあった私は、いと子の不審げと恨めしげの入り混じった眸を、振り切るようにして帰途についた。

タクシーの窓をよぎる夜の家並を見るとも

なく見ながら、私は別れぎわに囁いた彼女の言葉を反響していた。

「貴男が女のあたしに切腹をさせたいっていう意味が解ったわ」

× × × × × ×

——彼女は少し感違いをしている。——

彼女に切腹憧憬の傾向があるのなら、その言葉もうなずけないことはない。だが、あの凝態からはどうしてもそれはうかがえない。

どう解ったのか知らないが、意味があつて切腹の真似をさせたいと思ひこんでいる彼女。なるほど意味はあるだろう。だが——人間の、いや、俺の心理は、もっともっと複雑なものなんだ！——

私はそんなことを自答しながら、かろやかな車の震動に身を委せていた。

× × × × × ×

砂塚いと子とはその後一回しか会ってはいない。私が耽溺の時を避けたが為めか、振り向いた女は、再び振り返る事もなく去って行った。私はそれでいいような気がする。つまり私の側には、年令と言うブレイキと、寂しい諦観とがあつたのである。



「舌は知つてんだ」

沢井
和雄

を被虐の淵に沈ませ続けずにはおかぬ始末である。

(一)

「一週間ほどお邪魔します、家に居ても面白くないし、こないだ義姉さんと云いあいをしてから、何かと気まづいのでウサ晴らしをさせて下さい。大阪へ公演に行く都築さんと一緒にいきます。土曜の晩に義兄さんにごドライブをサービスして頂く様にお願ひします。勿論こちらでもアベックですから姉さんもつきあって頂下さい。何だかこの頃とても幸せな感じがするの。厭な事だってそりゃあるけれど、すっかり自信がついて来たつもりよ。いづれお会いしたら又ゆっくり。

お迎えはなくても行けるからいいことよ」

との由利の葉書がはじまりである。

「何だいこりゃ。夜のドライブとは、若い娘は人の苦勞を知らないんで困るね」

「今の娘は他人のお金で遊ぼうとばかりするんだから、ちゃっかりしてるわね」

「都築とか云うのは恋人かな」

「アベックってあるから、そうでしょ。それ

こんなものを発表すれば、何かの折に義妹や都築の眼にも触れないともいえず、そうなれば今よりも一層、それらの人々から責められてられる結果になろうし、うっかり現実を踏み外すほどの深みに陥ってしまいかねないのだが、それも期待といえはいえるので、以下は実名のまま書き流してみることにする。

私達は、つい単調に流れがちの中年の生活に、密かな灯りをともし続けていた。勿論私

がMでのプレイだが、子無しの世帯の気楽さで興が趣けば幾日も連続する。そんな数年のうち、今では妻の久江もひとかどのS振りを發揮する様になっていた。

ここ屢らくは仕事の忙しさに紛れて、プレイからやや遠のいて静かな日が続いていた所へ、義妹の由利の来阪から、ふたたびこのプレイ熱がたかまりはじめ、当の由利の帰京して既に月余も経た今でさえ、そのつめ跡が私

に、いやにウキウキした文句じゃないの」

「そうすると、おれに車を転がせといて、男とよろしくやろうって寸法か。まさかおれだけってわけにも行かないから、久江にもつき合えと云うわけだな」

「そうよ。でも」

と久江は悪戯っぽく笑って

「あなたそう云う事、好きじゃないの」

と云った。私が黙っていると

「もしよければ、あたしは行かないわよ。どうせあなたの懐が目当なんだし、あたしはバカバカしいわ。それに、あなた一人の方が都合がいいんじゃない？ あなたって、男のいる女に使われるのが好きなんだから」

「そりゃ、まあ、ね」

と言葉を濁しながらも私は、ひょっとすると又新しい刺戟に廻り合えるかも知れない期待に、いつもの癖でMプレイの姿の様々がうかび、つい口もとをゆるませてしまった。

「何よ。又、変な事考えてるンでしょ」

久江は、もう私の素ぶりだけで、そんな自分の動きを充分に掴む事が出来る様になっていて、わざと強い目つきで、私の肩を抓ったりして、そうしたムードをつくり始めた。

そもそも、私と久江との結婚が、いささかMがかったている。

若い頃、懸命に追いまわしたが、結局久江は他の男と結婚し、容易に諦めない私を、その頃なりに利用したものだ。

二年ほどで、その男とそりが合わずさっさと別れてしまったが、今度こそと意気込む私を利用するばかりで、久江はまだ色々と夫を代えてみたりしたのだが、そのうち世の中も知る年になり、一番熱心だった私で手を打つたものらしい。

つまり私は、念願を果すまでに十年以上も掛けてしまったわけだが、いわば私が拾われた形だったのである。はたから見れば、さも私の純愛の様な話だが、そこはその道で、夫のいた頃の久江の方が、私に張りもあつたし、生来の性癖に適^{かな}っていたものと思う。

世帯を持ってからも、私は時折真顔で、別れた男たちとの行き来をすすめてはみるのだが、妻もそこまでの興はないらしく、浮気ばなしはいつも話だけで終わってしまう。

併し、あんななんか好きで一緒になったのではないと云われるだけでも、若い頃の焰をそっと燃やしつづける思いがして、嬉しい気になる私なのである。

由利は久江とはほぼ一廻り違う妹だが、義妹とはよいもので、容姿からは妻の若い日の面影が漂うし、又私がそんな風だから、性格もアプレが板についた由利の方が、私の内面を操る要素に満ちて居り、私は私で、両手に花の積りでいた。

由利の仕事はバレエ教師で偶にはテレビの端役ぐらいはつく事もあったが、そこはアレらしくプリマの望みもさりと捨てて、商売として割り切れている様で、舞台人らしさは、派手好みの面に残っている程度で、私とも口の利きやすい仲であった。

バーへ誘ってキスを仕掛けた時は、勿論したたかに打たれた揚句、久江に遂一報告されてしまい、久江からは、さんざんプレイの理由にされた事があつた。しかも妻も妻で、プレイの模様を由利に聞かせ、二人して腹を抱えて大笑いした事であった。

そんなせいか久江は、私に対して全く安心して切っている様で、たとえ私が由利をどうこう思おうと、由利の方で玩具程度にしか扱うまいとの自信もあり、由利はもとより、そんな情けない私を、優越がって眺めている風だった。

そんな由利の葉書から私の妄想しそうな事

は、久江にはすぐにピンと来るわけで、それを理由に、又その夜のプレイは取りわけ酷しく、かなりのS振り様であった。

(二)

「こんにちは、お世話になるわね」

と立ったままの由利の挨拶が、心待ちしていただに、私には眩しく映った。

「遊ぶんならひとりで遊びなさいな。大人に迷惑掛けるもんじゃないわよ」

と久江は口だけは邪魔そうに云ったが、そこは姉妹である。

ボストンやスーツケースを仕舞い込むと、由利は茶の間にべったりと腰を据えて、スラックスの膝をさっさと崩しながら、もう姉とたて続けにしゃべりまくっている。女姉妹とは仕方のないもので、とんとんと話は弾み、私の一寸つけ込む余地がなくなっている。由利の恋人を連れてのドライブにお供をするに云うはなしに、今入るか今入るかと期待している私にはお構いなく、流行のデザインがどうとかこうとかで、仲々話の仲間に割り込めず、私は私で、せいせいインスタント・コーヒーでもサービスする方に廻らざるを得ない。

由利が、コーヒーに手をやった時を掴まえて、ごく自然に

「由利ちゃん、ドライブに連れて行けって書いてあったね」

と切り出すと

「そうそう。お願いする積りなのよ、明日の晩。いいでしょ？。姉さんもどう。夜の大阪みせて頂だいよ」

「バカバカしいわ、あんたのお供なんか。それよりうちの人と車賃して上げるから好きなところで遊んでらっしゃい。だけど、ちゃんとあたしに払うのよ」

「ええ、払うわよ、そんなにケチケチ云わなかつた。でも姉さん、今度の踊り手、一寸スマートよ。みともいいじゃない」

「どうせ端役でしょ。面倒臭いわ」

「そう。それじゃ姉さんにはケーキか何か、奢るとして」

「冗談じゃないわ。運転手付きで貸すんだから最低三千円よ」

「まあ高い」

と、またも話はそのまま姉妹に奪われて了うが、どうも私付きの車の貸し料の取り引きの様な調子になった。

一しきり眠やかな食事も済み、入浴も終え

た後、ネグリジエを引っかけたまま髪の手入れをしていた由利が

「義兄さん、私、浮気しようと思うの」とぼつんといった。

「もうお嫁に行くらしいから遊んどくの」

「いいさ、それも。どうせ男の出来る女は、何人でも出来るんだし、出来ないのは出来ないんだから、あんた位なら何べん結婚したいいいんだし。いざとなれば、姉さんみたいに女に甘い事主を持ちゃ済むんだから」

「でも義兄さんは少しへんなんだもの」

「それが又いいらしいよ」

とちょっと久江の方を見ると久江も、
「浮気でも何でもおしよ。好きな様にやればいいのよ。でも何もひとに一々相談しないでひとりで責任とりなさいよ。ほんとに今の娘と来たら、遊ぶのは勝手に遊んで、後始末は大人にさせようってんだから図々しいわね」

「でも姉さん、順繰りよ。大人にならないとお金がないんだもの」

「ちゃっかりしてるわね。あたし達の頃は、恋愛もひとりで勝手にやったけど、苦労だつてひとりでしたのよ」

「でもサ、頼もしいお義兄さまがいらっしゃるんだもの」

わざと丁寧な口調で、私の方に流し目をしてみせる由利のポーズは、中年に入った私の胸を騒がせずにはおかぬ女の香があふれきっていた。而も若い頃夢中になって追い廻していくどか苦い思いをさせられた若い頃の久江の眼に似て、女の力強さ、残酷さを底に淀ませた魔の淵のような妖しい魅力だった。

由利にはソファベッドを提供し、私たちは隣の部屋のダブルを用いた。由利は飾り棚の子熊を枕もとに置いた。何かペットを置いて寝るのが趣味との事であった。

「あなた、熊の代りに枕元に侍らせてもらったら？」

と久江は私の妄想に目ざとく気づいて、由利の前で悠々と私をからかった。

(三)

翌日の夕方、私と由利はセドリックで外出した。久江はテレビでカバレリア・ルスチカーナを見ると云って、あっさり二人にしてくれた。彼女は、平素の私の扱い方から優越感が身にしみついているので、私が所詮由利の敵でないと思いきっているらしく、やきもちのやの字も現わさないのは、私の普段の努力ではあるものの、大変有難いことであった。

私は日が暮れるまで由利に北を見せ、公演中の都築をフェスティバルまで迎えに行き、その後、南で二三カ所廻り、適当に二人だけにしてやる予定をたてていた。

最初は形通りコーヒー屋に入り、由利と向い合った。

女にはいつもそうなのだが、由利とも二人になると思いきった文句ではめたたえ、真正面からうっとり眺めた。男に媚びる女の姿が丁度正反対になった心理から、私は自分の心を、洗いざらい相手にさらけ出してしまうのだ。

こうしてうっとり眺めて、こちらを隠だらけにしていると、女の表情に、この男は私にまいてる、利用してやろう。と云う氣持がありありと現われて、その女の一挙一動にまで美しさに對する自信があふれてくる。

由利も勿論そうであった。

「いいなあ、若い女性。由利ちゃんみたいな奇麗な人の奴隷になりたいよ。まったくありきたりの讃辞でよいわけである。」

「いつもそうねえ。義兄さんと話してると感化されちゃうのかしら。まるであたしがピューと口笛を吹くと、ハイッて飛んで来る人の様な氣がするのよ、義兄さんって人は」

「それでいて、女は誰も好きにはなってくれないらしいよ」

「好く人もいるんでしょうけど、それだと義兄さんが厭になっちゃうのよ。贅沢ね。まあ、お金があるんだからいいけど。でも贅沢って高いわよ。いい？」

「由利ちゃんにたかられるのは覚悟しているんだよ。女性の為に汗水たらしているんだもの。いいさ。僕の資本家は美しい女性だ。そのひと自身は要りもしない、捨ててしまうようなものの一雫が、僕の何カ月もの労働でさへ購いきれないって事になるんだからね」

「そろそろ例の話に入るんじゃない？。待ってね。今コーヒー飲んでから聞いたげる」
由利は私の心を全く見透かしているのか、悪戯っぽく笑った。

「ねえ。浮気は初めて？」

「へえ。義兄さん、そんな事興味あるの？」

「いいや、ただ聞いただけさ。興味を持つ資格なんかないと心底思ってるよ。貴女は私の主人になるべき人なのだから」

「また奴隷？。ほんとに奴隷にしてあげようか。義兄さん」

「頼むよ。ねえ、貴女の事なら何だって」

「でもねえ。そう云う奴隷ってのは昔のこと

でしょ。それにそんな奴隷じゃ義兄さんが面白がるばかりであたしには詰らないことだわ。あたしがほんとに奴隷にしたいのはね。一応はスーパーマンでなければいけないの。世間からみると頼もしいパトロンのような感じ、それでいてあたしの邪魔な時はポイと消えていくくれるの。義兄さんじゃちょっと足りないけど、今日はそう云うスレーブにしたげる。だからね。今日彼に会ったらうんと鷹揚にしてね。頼もしげにね」

「むつかしい奴隷だね」

「現代の奴隷の資格はそうなのよ。奴隷ごっここのサービスなんか、あたしはしてやらないわ。今日はあたしの浮気。浮気のムードを作るのに、一応社会的には立派な男に、これだけサービスさせてるってとこを彼に見せる方がいいのよ。だから義兄さんはあたしとの関係は奴隷でも、彼には立派に見せるのよ」

「ますますむつかしいんだな。けれど何か御褒美くれるの？」

「そうねえ」

由利はくりくりと瞳をめぐらして、ちょっと考えるふりをしてから

「そう。彼から渡してあげるわ」

と云い捨てて、呵々と笑いながらトイレに

立った。

実際、今までに由利にはプレイらしいプレイはさせてもらった事がないのだが、何か由利の言葉のはしはしは、私の心を疼かせて、そのくせ、お預けのままに放っておかれるみたい、その疼きはいく日も続いて私の心を苛み楽ませてくれるのである。

煙草の息が重苦しくなりかかった所へ、席に戻って来た由利が、

「義兄さん。そのお冷、ちょっとかけてよ。あたし二回手を洗わないと気が済まないの」

と私を促した。由利の云うままにシーツの隅でコップの水をしなやかな指に伝わらせると、水のしづくは花卉のひとひらづつのようににはらはらと零れた。

「はいもういいわ。あと義兄さんにあげる」

と云われて、私は思わずコップに残った水をそっと唇にあてた。由利はうす笑いをうかべ、私はまたまた胸が痛くなる思いがした。

そのあと、由利は車を阪神ビルに廻らせて二三の装飾品を求めた。そして最後に下着売場に行く様に私を促した。

ハダ色のストッキング、透ける様なうすい色もののブラジャー、ちかちか光る流行のスキヤンテイーとやら。色さまざまの肌着たち

は、艶やかにマネキン人形を飾っていた。

それは、いままで、由利にあしらわれていた私に、一段と重圧を加えることになった。

下着売場に男女で訪れれば、周囲は何と認めるだろう。もちろん何も無いに拘らず、平然と私を伴う気になれるのは、由利が私に安心させているのか、それとも眼中にないかだろう。それとも又、由利のそうした行為が緻密に計算されての上とすれば、その計算が常に反射的に行われ、而も正確に私が反応する以上、やはり彼女も男を惹きつける異常な天分に恵まれているのだろう。

「ねえ、今日の。どんなのがいいか知ら」

パンテイー売場に佇んだ由利の声は、遠くの世界を慕う様な幻影を彫りかけていた私をふっと現実に戻した。

「え、ああ」

ため息の様な生返事をした私に

「ねえ、見てよ」

と催促して、女店員の前でわざと私に振舞ったが、結局は自分で、縫い取りのある切れこみの鋭い夷人じみたものに決めた。

「さあて。これですっかり準備OKと。あ、そのお釣頂だい。大がいが彼がホテル代は出すと思うけど、万一恥をかくといやでしょ」

極めて当り前のように由利に云われると「どうぞ」

と私も光榮な義務の様な気持で恭しく差し出した。

こんな事をしていううちに、フェスティバルで都築に会う前から、私の劣位的な気持はすっかり身についていた。若しかするとという唯一のたのしみで、せめて彼が若く美しい男性であることを、私は願っていた。

(四)

フェスティバル・ホールでは丁度最終の幕合いで案内ガール達も既に引き取った後で、入口は人の行き来で混み合っていた。由利は私を待たせて都築の楽屋の方に廻った。

睡じげな男女の幾むれを眺めていると、その人々はどのペアも対等に楽んでいる様に見えて、何かしみじみと自分の気持がいじらしくなってしまう、廻りの人達と同じ様にきちんと立っているのがおぞましく思われて、私は石の壁の隅にしゃがみ込んでみた。

男女のまどいやアベックの談笑は、下から眺めた方がずっと美しく、よりフアンタジイなものである。それも実際視線を低くして、丁度自分の頭の高さを、彼女達の足の位置に

まで下げてみると、その味わいが深くなる。出来れば床にねそべって、人々の行き来を眺めたいものだが、そこまでは行い兼ねるので、私はマゾずいたわびしみを散らせた時は、逆にしゃがみ込んでその気持にひたることにしている。

五分ばかりで由利が姿を現わした。私は立派に見せる様に命ぜられているのをはっと思いついて、由利に見つからぬうちに、慌てて立ち上り、いすまいを正した。

都築は、果して美青年だった。私より二まわりも大きく、目鼻の輪郭の濃いモダンな男だった。それに若さが、額や頬の色づきに現われ由利と充分に釣りあえる男なので、私は心底ほっとした。

「初めまして。由利さんから、いいお義兄さんがいらっしゃると兼々伺ってます」

「やっぱり芸術をなさる方は身のこなしにそつがありませんね。由利ちゃんも随分素敵な人を知ってるんだね」

とほめ合っていると、由利が「バレエをやる人としては、この程度は限界なのよ」と口を挟んだ。

「やれやれ。最低か」

などと都築は笑いかけた。

都築は公演も多いらしく、あちこちを旅行しているそうで、実際大阪にも私などより遙かに明るかったので、以後は都築の案内で南へ飲みに行くことにした。

道頓堀の入り組んだ横丁のバーで、三人は寛いだ。由利を中に挟んではいたものの、都築も私もあるべく話しかけ合って、いかにも紳士的な調子だった。

「芸術をやる人を見ると、どうも私は、昔、ふられただけにあこがれるんですね。もうちょっと若い頃は、厭にやきもちばかり感じたもんですが。もうこの年になるとすっかり諦めきれましてね。今では、誰かその道に一生懸命な人を応援してやりたいのですよ。由利ちゃんは、まあバレエの端くれなんでしょうが、それでも何となく応援したいんですね」

「全く理解のあるお義兄さんだ。由利さんは幸福ですね」

「お宅とも時々飲みたいもんです。大した楽しみもないので、芸術青年を励ます程度の道楽をしたいのですが、ひとつこれからつき合ってくださいませんか」

「いえ、こちらこそ。芸術、芸術って云われると、何だか背中がかゆくなって来る気持が

しますよ」

「酒は毎晩おやりになるンですか？」

「いいえ。私たちは経済的に恵まれていませんでしょ。ですから、まあ、金の入り次第と云うことになってしまいます」

「それもそうですね。でもあなた方は、金だの何だのと世帯じみたことはなるだけ考えずに、我がまま一杯をしないと伸びないんじゃないかな」

「まあそう思っているんですが、なかなか」「私ならいつでも我がままをさせて上げますよ。それが私の夢のようなものだからね」「よろしく願います」

最初は品よく飲んでいたが、二三軒廻るうちに話も大分くだけ、私は都築がなかなかの好青年なので、私の事も打ち明けてしまいたい気がして来た。

河岸をかえた「エトワール」と云う店で、由利がウエイトレスと何やら興じあっている隙に、私は都築の耳もとに囁いた。

「ねえ、あんた。女には不自由してないの」「オールドのダブルをぐいと飲み干して都築は、一瞬目をキラリと輝かせて

「そりゃ、ねえ」

と答えた。

これが、よそ行きから普段着に調子が変わるきっかけだった。由利はまだこちらの話の内容には気づいていない。

「由利は貴男に惚れていますよ。口説いてやって下さい」

「ほんとですか」

「ほんとですよ。僕は今日ちゃんと仕度をしてやったんですから。どうです、話せるでしょう」

「まったくですね。しかし」

「ただしだ、条件がある」

「なんですか」

「君は由利を好きかね」

「そりゃあ。美人ですからね」

「結婚したいと思ってる？」

「ぼくたちは今の年ではハッキリ云って、まあ無理ですね。だから」

「よしわかった。浮気でよいんならお願いします。でも結婚したいなんて思わないでくれよ。あの娘もそのつもりなんだから」

「そんなことまでお義兄さんに相談出来るンですか、由利さんは」

「そうさ。私は若いうちの浮気は賛成なんですよ。あの娘は貴男がみても、二人や三人男を代えたからって、結婚出来ないクラスとは

違うでしょう」

「そうですね。しかしお義兄さんもうい分お考えが新しいですね」

「まあね」

都築が、少しづつ私の変わり者ぶりに気づいたらしいので、私はふっと話を打ち切ってしまった。

もう夜も十時を廻っていた。ここが汐どきと、私は退散のつもりで由利の許可を得ようとした。

「あら、ホテルまで送って行くのよ。それにあの子、つまんなければ、さっさと帰るんだし、待っててくれなくちゃダメよ」

と由利は澄ましたものである。

御堂筋を北に戻りながら、

「お二人共どっちの方がお好みなんですか。深夜喫茶にでも行くんだったら」

と私がわざと衣をかぶせるのに、もう由利は、

は、

「あたし知らないから、都築さん、どっかいホテル教えてやって」

とはっきり云ってしまう。

「太融寺にしましょう。あのあたりにいいのがありますよ」

と都築まで平然と答えている。

もはや私は完全に第三者だ。黙すより他なく、恋をそそる灯影が見えがくれする大阪の夜道を、二人のために走っていた。後からついてくる車のヘッドライトの光がバックミラーに当たるたび、二人が寄り添っているのが見え、私は気がついてラジオ・スイッチを入れ、ムード音楽を探した。もう二人を喜ばせることに懸命な気持になっていた。

由緒の寺を曲ると、とたんに狐火のようなホテルの灯りが一めんに目に入る。この色を浴びただけで、もやもやしてくるような艶めいた街だ。

一切の光や音を消して車の中に、私はじっと待っていた。

由利たちの決めたホテルのネオンを真上から浴びて、煙草の煙が車窓の上隅からいかにも重そうに流れていた。

私のさっきまでのモヤモヤした気持は完全に放心の域に達して、奇妙な快よさに、私はひたりきっていた。

これまでの、由利の自信に満ちたあしらいの一こま一こまが、臉のうらや耳の奥に湧き返るようにつり、私はゆっくりと味わいかえしていた。

トイレ帰りの手洗いの残り水を飲まされた

こと、下着売場でパンティーを吟味させられたこと、車の中での、今までにみせたことのないうっとりとした由利のポーズ、ムード音楽を懸命に探した私。

しかも命ぜられるままにこうして待っているこの空虚さ。ああ。あとは空想の世界が残るだけ。由利のいみじくも云ったものよ、現代の奴隷とは。

とんとと窓ガラスが叩かれる音でふっと吾に還ると都築だった。丹前にすっかり寛いだ彼は、

「由利さん泊ることに決めたそうです。これはさっき買ったもので、お義兄さんに召し上って頂きたいそうです」

とネッカテーフでくるんだ箱をみせた。

（あっ）とっさに私にはわかった。コーヒー屋で云った由利の「後から渡して上げる」御褒美の意味も。

都築は私のそんなせつない思いも知らぬげに微笑しながら、

「色々お世話になりました」

などと挨拶をしている。おそらく彼の居ない間に包みをつくり、何か洒落たケーキとでも彼を偽って運ばせたものだろうか。それとも彼自身にも、私の呆れた願いを話して、二

人で私のバカさ加減をさんざ笑ったあとの芝居だったろうか。

都築の立ち去るのを見済ますと、私は大急ぎで包みを開いた。まぎれもないさっきのパンティーだ。

私はぶるっと身ぶるいをした。はっとして廻りを見廻したが、車の中はもちろんあたり人影はなかった。

× × × × ×

「どう。今日の一日面白かった？」

遅く帰宅した私に、久江がたづねた。

「うん。まあね」

と私も平気でにやにやすると、

「由利にサービスさせてもらえたの？」

「だめさ。ただ一寸そんな気分になっただけさ」

「あたししかいないのよ、この世の中に。わかった？」

そして、それがきっかけで、毎夜の習慣がまた始った。

由利が帰京してからもう一月にもなるが、久江のS振り様は、ますますはげしくなっている。

奇譚三十九夜物語

才十四夜

辻村 隆

早咲桜のたよりが、ちらはらと春の季節をのせてくる今日此頃です。

ライカ氏の提唱で、朝早く集まった一同は、ゴルフ氏とドクター氏の自家用車に分乗して、一路大阪から和歌山の加太まで飛ばしました。交通殺人の多い国道二十六号線は、今日もダンブカーやひっきりなしの車の洪水です。

加太の舟釣りで鼻高を競い合った一日を過すと、更に車を廻わして、新和歌の浦のK館に旅塵を洗い落し、鯛の生きずくりに味覚を楽しましたあと、私も含めた八人の退屈男たちは、恒例の三十九夜の物語にはいりました。

一九六一年の新年号に、私達のメンバーが登場して既に一年半。

その間大分周囲の事情も変わったので、もう一度改めて退屈男達の素姓を説明する必要があるようです。

このクラブへ集まる者は、誰も本名を呼ばないことになっていて、ニックネーム——、簡単なシンプルな呼称でお互いに呼び合っているのです。

ゴルフ狂の社用族のゴルフ氏は、その後輸出業務の協会の理事に納まり、最近好きなゴルフが出来ないのを嘆いているようです。

印度蛇木のパイプが自慢のパイプ氏は、この一月に長女に養子を迎えて、紙業界の第一線から離れ、悠々自適の生活です。

産婦人科のV院長ドクター氏は、近頃又赤ちゃんを生む人が増えて、毎月五十人を下らぬ出産に悲鳴をあげ、助産婦を二人程懸命に

探しているようです。

一九五三年のライカを珍重していたライカ氏は、どうやらライカに見切りをつけたようで、最近はおっぱい一限レフのペンタックスを愛用しているらしいです。

繊維問屋のナイロン氏は、年々進歩する化学せんいや合成せんいの売出しで、ナイロン氏の名を返上したい気持のようです。

元陸軍少将、会社重役のステッキ氏は、最近血圧が高いので心配気味です。クラブの最年長者でもあります。

芸能方面の酒仙ワイン氏は、胃潰瘍を医者に宣告され、二貫匁程やせて、近頃少し元気がありません。

最後がかく云う辻村隆。当時はスバルを買った頃なので、スバル氏としましたが、それも遂に古くなり、昨年の十二月、下取りに出して、代りにマツダクーペに乗りかえました。

夫々境遇に多少の変化はあっても、一年有余呼びなれた呼称を今更変える気持もなく、やはりこの儘続けて行く事に異議なく一致したのです。スバル氏のメモによると、この一年間、即ち、一夜から十二夜までの各氏の話をした回数に次の様です。

ナイロン氏	七回
ワイン氏	五回
スバル氏	五回
ドクター氏	四回
ステッキ氏	四回
ゴルフ氏	三回
ライカ氏	二回
パイプ氏	一回

「パイプ氏はどうなったんだネ。僕を見給え僕を——」

ナイロン氏が冷やかかし気味にパイプ氏を眺めます。

「おとなしい者はつい、喋りそびれてネ。恐縮恐縮——。しかし、合の手は私が一番だよ——」

——ずるい、ずるいの声に、パイプ氏は頭を掻き乍ら、酒にほてった頬を潮風になぶらせる様にして、丹前の胸を合わせると、さてと膝を揃えました。

「どうも拝聴側にいつも廻って恐縮です。では今日の口切りは私からとして……。最近神奈川県の大和市に起った、洋娼六人組、ジュリー一家の暴行事件から思い出したのですが、嘗って進駐軍の駐留時代に華やかなりし洋パンは、その後、何処へ影を潜めたのでしょうか。大阪の街を歩いてても、ついぞそれらしい女は認めるすべもありません。既に一昔——。当時二十代の、我が世の春を謳った女の群も、今は凋落して、三十代の醜い、悪病と魔薬にむしばまれた残骸を、陋巷の片隅に曝す身に落ちぶれ果てているのです。この話は、そんな女達の、最後のあがきとも云うべき、風変わりな稼業のエピソードです」

第三十四話 片眼のジュシー

片眼のジュシーは、その夜も、寒々としたベッドに敗残の身を横たえて客待ちをしていた。ペイの切れかかった体に、恐ろしい禁断症状が起りつつあった。

轟然と、天井の漆喰ばかりをバラバラ散らせて、省線がジュシーの頭上を通り過ぎた。神戸のガード下のバラックまがいの彼女の巢も、既に市当局の立ち退き命令が迫っている。

蒼褪めた頬がピクピクとけいれんして、ジューシーは片眼を閉じた。

相棒のルリは、傷ついた肌に精一杯の化粧をして、いそいそと波止場に出掛けて、未だ戻ってこない。

閉じた瞼に、ジューシーの得意絶頂の華やかな一昔前が浮かんでくる。それが今の彼女のせめてもの慰さめだった。

「マックさえ生きていてくれたら、わたしは今こんな事もないだろうに……」。朝鮮の動乱がわたしの総てを奪い去ったんだわ。日本人はパンパンと云ってさげすんだけど、私は私なりで、マックに真実の愛情を捧げていたんだから、何と云われたって苦にならなかったけど……。マックと二人、奈良から京都へと、外人専用車にたった二人っ切りで乗って遊び廻った。連結したすし詰め日本人車の羨望と嫉妬に、フンと鼻で笑ってやった時が最高だった……」

ジューシーには、そうした高慢の酬いが今になって現われたとも反省していない。

進駐当時、どの郊外電車にも特別に外人用のハコが連結してあって、そこで嘯々としてふざけ合う傍若無人の彼女達。謂わば虎の威を借る狐の群に、満員の日本人車の男達は、幾度となく切齒扼腕したものだ。

朝鮮動乱の起る迄、ジューシーはオンリーとして、比較的恵まれた生活をし、マックと結婚をも誓った。が、マックがいなくなったその頃から、ジューシーの生活は眼に見えて悪くなっていった。

マックが可愛がっていた縁猿がジューシーと云ったので、始めトミーと呼ばれていた富子も、マックと一緒にってからジューシーと呼ばれる様になった。マックが、氣候に合わない日本で早死した

ジューシー猿をなつかしんで富子につけた猿の名前を、人間である富子は易々として受け入れていたのだから変っている。

彼女が二十四才の秋、致命的な不運が彼女を見舞った。アブれたジューシーが、縄張り違いの山手で、カラミティリーンの相手の白人を客にしたのが、そもその間違いだ。姐御で通る厄病神リーンはカンカンに激怒した。

ジューシーが勤め先のバー「ラッキー」から呼出され、万国波止場に連れ出されたということを知った同僚が、カンパンになってからバーテン等と共に波止場にかけていた時には、ジューシーは波止場のブイにつないだ太いワイヤーロープで、荷物の様にぐるぐる巻きにされ、岸壁から海面へ、危うく首だけが出る程度で吊り下げられて、気を失っていた。

全身数十カ所の打撲痕は未だしも、肝心の顔面が腫れ上って、左眼がお岩のように紫色にただれてつぶれていた。リーン一家がジューシーの両足を持って、振子の様にブイにぶち当てた為だった。波止場の倉庫番の話では、彼女達は、ジューシーを取囲み、バンドや棒切れで散々振りつけた挙句、ジューシーの左右の脚に縄をつけ、固いコンクリートの岸壁の上を、ぐるぐると曳ずり廻し、ジャックナイフを足に突き立てた上、波打際に吊り下げたと云う話だった。

リーン一家の後難を恐れて、ジューシーの受難はうやむやに葬むられ、二カ月後、漸やく回復した片眼の彼女を、もうどの酒場も使おうとはしなかった。やられ損の彼女は、今更正業にもつせず、転落の一途を辿り、辛うじて下級船員相手のその日暮しの女になり下って、それでも神戸の地を離れず、何とか最低の生活で、雑草のように生き伸びて来た。



マックは二度とは日本に戻ってこなかった。

それでも若いうちは、片眼であっても、何とか相手にしてくれる者もいたのだが、三十の坂を越すと、もう誰も、このうらぶれた片眼の洋媚くずれには見向きもしなくなった。

リーンに刺されたナイフの傷が、尚更娼婦としての値打ちを下落させていた。

二年前、湊川で知ったルリが、彼女を麻薬の立売人に拾ってくれたが、彼女は立売りを始めると共に、己れ自身もその麻薬に酔う様になった。

ルリには両乳首がなかった。嗜虐的な外人に、一夜ベッドに縛りつけられて、切られたのである。

同病相憐れむ同志。ガード下で、女二人の奇妙な愛情のこもった生活がつづいた。

立売りの収入より、ペイをうつ費用が嵩み出すと、麻薬の小売先はいい顔をしなくなった。女として使い道のない敗残者二人を彼等もそろそろ持ちあつかいかねていた。

生きのいい若い女が、波止場やガード下にたむろする様になってジューシーとルリの立場はいよいよ狭くなって来た。そんな時、麻薬立売人の陳が、二人によい智恵を授けて呉れた。

嗜虐的なショウである。泥沼にあえぐ二人には、もう矜持も羞恥心も残っていなかった。

単なる女遊びにあいた船乗り達を相手に、彼女達は老醜に白粉を刷き、片眼のジューシーは勿体ぶった態に黒い覆面をつけ、ルリは代用品の、精巧なプラスチックの乳首をつけて、安ホテルの一室やあいまいバーでショウを演じ始めた。

立売人の陳の外仲間数人が、ボン引であり、ショウの演出者でもあった。

片眼を閉じて、ベッドに横たわるジューシーをルリが起した。陳も立っている。

追想がジューシーをひとときの仮睡に導いたのだろう、彼女はウトウトと眠っていた。

「船がついたのさ。早速バイだよ。さっさと準備をしよう——」

ルリの声に、慌てて彼女は起き上ると支度を始めた。トランクを提げて陳等と三人、車を拾う。トランクの中にマスクや数条の縄、滑車、鞭、ローソク、手錠が納められてある。これが彼女達の商売道具であるのだ。

場所は行きつけのバー「あざみ」。扉をあけると、ムツとたばこの煙りが流れ出て三人を包みこむ。強烈なウオッカとウイスキーの匂い、果物の饒えた匂い、安香水の匂い等が、狭い暗いバーの中に充満していた。

バーテンが眼で合図して、後ろのカウンターの洋酒棚を押すと、ポツカリと暗赤色の一室の口が開く。バーの客がぞろぞろとその中に吸いこまれる。女達はそそくさと、テーブルの上の酒やつまみものの皿を片付け始める。

ジューシーは、見物者の一同が今夜初めての客である事を咄嗟に見とった。

「例の手で行こうよ——」

ジューシーは陳にささやく。陳は眼だけでうなづいて指で円をつくる。O・Kというしるしだ。

好奇の眼が、ジューシーとルリに集中する。彼女達も、真赤のカーテンに包まれた薄暗いこの狭い一室では、見違えるように妖しく輝き出す。ジューシーはこの一瞬に、忘れ去られた自己の女に自信と誇りを蘇みがえらせる。

ハーレムノクターンの楽につれて、二人は細い手錠を嵌めてよろめき出ると、中央でバツタリ打伏す。陳とピストンの勝が、めいめい鞭をふるって飛出す。

二人の女に鞭は、ところきらわすうなる。ジューシーとルリは疼痛と苦悶にのたうつ。この辺りは序の口で、陳もピストン勝も手加減しているから痛そうで痛くない。

女達がグッタリした態のところで、陳が一抱えもある責め道具をドサリとその前に投げ出した。感嘆とも昂奮ともいえず溜息が、外人も交えた見物人達の口から洩れる。

「お客様のうちで、我ぞと思わん方は、この二匹の美しい奴隷を、存分に責めてやって下さい。殺さぬ限り、女共は貴方達の思うが儘です。——さあ如何ですか……」

ジューシーはこの刹那が最も恐ろしかった。殆んどは、陳の筋書通り運ぶのだが、時偶、五回に一度は、言葉を真に受けたヒョーキン者が、嗜虐に疼ききった男が飛び出して、陳の言葉通り、死ぬような眼に遭わす事があったからである。

或る年輩の船乗りは、ジューシーにジンを一本無理矢理に吞ませ四ツ這いに這わせて馬乗りになって歩かせた。彼女がへたると、たばこの火を容赦なく押しつけた。

雁字搦目に縛っておいてミルクを全身にぶっかけ、連れて来たブルドッグに舐めさせた男もあった。

ジューシーは番外の飛入りのない事を心に祈った。

幸い、今日の客は初見だっただけに、とび出してくる者もなく、神妙に黙っていた。

「誰方もおやりにならないようです。幸わせな女奴隷共です。じゃあ仕方がない。私が皆様に代って、今夜はうんと虐めてやりましょう。どうせ、二三日後には香港に売られて行く女共ですから、こいつらをふた眼と見られぬ女にしようと思っていたところですよ。皆さん、今宵はどんな事が起りましたも決してお驚ろきになりませぬ様に……さあ、女共、覚悟はいいだろうな」

何時もの通り、陳の勿体ぶった口上は終わった。ジューシーもルリも、さも恐ろしげに、わなわなと震えて見せる。客達はドキリとして固唾をのんだ。

「女奴隷共よー、お前達二人のうち、争って負けた方に、俺が結構ないれずみをしてやる。一生消えぬ刺青を顔に彫りつけてやる。いずれお前達は、香港では人前に顔の出せぬ畜生同様の奴隷となる身だ。さあやれッ！」

陳は二人の手鎖を解くと、鞭を鳴らした。

ジューシーとルリは立上った。凄惨な女斗美が始まった。汗がにじみ、髪は乱れ、二人はレスリングのショウを懸命にやった。

いつしか見物も、ジューシーとルリとに分れて、それぞれに弥次と声援が乱れとんだ。

予定通り海老固めにされたジューシーが矢庭にルリにかみつく。

「ギャッー」とルリの絶叫が起って、ルリはひっくり返える。乳首のものがれた個所から、仕掛けておいた赤絵具の鮮血がだらだらと滴たり落ちる。

「大変です。この女は逆上の余り、相手の乳首を噛みきりました。さあ大変です……」

陳がここぞと許り大声を張り上げる。

ルリは矢庭に貴道具の中から短剣をとり、握りしめるとジューシーにとびかかった。

凄惨なレスリングがひとしきり続いて、馬乗りになったルリが、ジューシーのマスク目掛けて短剣を突き立てる。

今度はジューシーが咆哮して転げ廻る。マスクの下の厚布に仕掛けた赤絵具に短剣がささってマスクを通して鮮血がほとばしる仕掛けであるが。短剣をマスクに突き立てた儘、ジューシーがよろよろと立上ると、見物は驚愕で一斉に総立ちとなる。

マスクをむしりとったジューシーの左眼がつぶれて真紅に血塗られている。

ドサリと二人はその場に打伏して、氣息えんえんとする。

「大、大変です。短剣で目を突きさした様です。ああ困った困った。これじゃ商売にならない。あとの始末は私が引受けますから、今宵の事は誰方にも喋べらずにいて下さい。もし喋べった事が分れば、うるさい奴等がつき纏わぬとも限りません。さあ帰って下さい、どうぞどうぞ——」

見物はおどましげに蒼褪め、或いは物凄さに打震えて、そそくさと赤い部屋を出ていった。

「フフ、このショウの帰りは車でそっと帰らなくちゃ。見物に見つかっちゃ不味いぜ」

陳はニヤリと笑って、ジューシーとルリを見下した。

「ああ、疲れた。私すっかりクタクタよ」

ルリはやれやれと云った顔付で、旨そうにピースをふかした。

「今頃酒場の方じゃ、パーテンの野郎、うまいこと云って、割増金をとっていやがるだろうヨ」

それぞれの欠点をうまくねらったこのインチキショウで、陳は大分儲けた。

「ホレ、今夜の出演料だ。そうそうジューシーはドヤで一本うってやったからないよ」

陳は相当の札束をとり出して、その中から千円札二枚をルリに手渡した。

体をはって一銭にもならず、ジューシーは寒々とした心の中を、風が吹きぬける思いで力なく立上った。

「いい加減にペイはやめなよー」

自分からすすめておき乍ら、陳は言訳めいてそう附加えると、暖かいふところにニヤリと笑いを浮べた。

×

×

×

「洋パン崩れの、こうした嗜虐ショウは、全国にかなりあったそうです。片眼のジューシーのエピソードも、氷山の一角の又その一角に過ぎないようです。思えば十年――。よき平和な時代に選んて来たようですね」

パイプ氏の話は終わりました。いつ同席したのか、年増の厚化粧の仲居が一人、座敷の片隅で、身につまされたようにヒソと聞いておりました。

引続いて、これも回数のないライカ氏に、一同の指名は集まります。

ライカ氏は立上って、ぬいだ洋服のポケットから一葉の写真をと

り出すと、一同に回覧しました。写真は窓際でうつむいて毛糸を編む、若い女のスナップでした。が、異様な事に頭髪は一本もなく丸刈りの小学生のように数ミリの毛が伸びているきりでした。

「最近買ったペンタックスに超望遠レンズをつけて、遙か数百米先から撮ったものを引伸したものです。この丸刈りの女にフト気附いた日から、私は窓際に望遠レンズを構え、シャッターチャンスをおらっていたのです。丸刈りで思い出したのですが、大宝映画と云う新東宝の肩代りの会社で作った、寺内大吉の「大吉ぼんのう鏡」と云う映画では、ストリップパーが大吉師に緑なす黒髪をきられ、ゾリゾリと頭をそられるシーンが克明に描写されています。映画自体は至ってつまらなく、その俄か尼僧が、裸になって堅固な僧を誘惑するシーンなどありますが、この映画の見どころは、ストリップパーの得度にあつたようです。映画の話はさておき、このスナップにとつた女の丸坊主になる所以は、依つて件の如しなのです」

ライカ氏は一同を煙に巻いて、さてと改まりました。

第三十五話 丸刈りの代償

清水角太郎は最近厭な噂をきいた。愛妻の理恵が、彼が会社へ出勤したあと、盛装して何処かへ出掛けては、角太郎の戻ってくる時間ぎりぎりまで家を空けていると云う噂である。テレビドラマの影響で、池内淳子ばかりによろめいているのではないかと、専ら近所の評判で、知らぬは亭主許りなりと云う状態がずっと続いていたと云うのだった。親切で世話焼きのクリーニング屋が、彼にその噂をそつと教えてくれた。

清水角太郎は心底、三隅理恵に惚れ抜いて女房にただけあつ

て、徹頭徹尾、愛情を傾けて心より愛していたと思っていた。

それだけに彼のショックは大きい。

彼は思い余って、一度理恵の様子をうかがうことにした。定刻通り家を出ると、彼はクリニング屋の源さんに大急ぎで電話し、見張って貰うことにした。

駅前の喫茶店で、ジリジリした気持で、無意味にコーヒーを冷たくして待っていると、幸か不幸か、源さんからの電話があった。

駅前に向ったと云う事である。彼は大急ぎで飛び出すと、駅に走った。

ホームの片隅で、新聞で顔を隠して窺ううち、着飾った理恵がホームに出た。我が女房とは思いつつも、見惚れるほどの美しさである。ムラムラと激しい黒い嫉妬が角太郎の心に渦を巻いた。電車をR駅で降りると屋敷町が続く――。

スタスタと理恵は、角太郎の尾行に気付かず歩を早めると、門構えの一軒に立止ってペルを押した。

若い青年が現われ、二言三言にこやかに語り合ってドアに肩を並べて消えた時、角太郎は怒りと嫉妬にブルブルと体を震わした。

▲畜生！理恵の奴、あんな若い男と密通してやがったのか▼

角太郎は思い切って飛び込もうとしたが、逸る心を押え、辛抱強



く、辺りをブラブラして時間をつぶした。

長い二時間――。今度は独りで理恵は外に出た。再びR駅に戻ると電車へ――。

角太郎は爆発しそうな心を、漸やく押えて尚も尾行した。理恵は次いで電車をS駅で捨てた。再び歩いて、今度ははっきりそれと判

る、サカサくらげのYホテルに平然と消えた。

▲ウーム、若い男と逢っておき乍ら、その上再び、又連れ込みホテルへ行くなんて、なんと云う姦婦、売女——▼

清水角太郎は最早、顔面蒼白になった。どうしてくれよう。彼はジダンダを踏みたい気で、向い側の喫茶で、理恵の現われるのを待った。

ここでも二時間経って理恵は独りで外に出た。心なしか髪がほつれて見える。

フト立止って理恵は時計を見た。つられて角太郎も時計を見た。

諦めた様子で理恵は駅に向うと再び度電車に乗り、元のV駅に引返して、駅前で買物をする、家へ戻っていった。

▲よし、確かな証拠を握ったぞ。どうしてやろう。憎さ百倍だが、可愛い女房だし……あいつと別れる位なら死んだ方がましだし、兎も角帰ってうんと詰問してやろう▼

角太郎は足音荒く玄関の扉を開けた。

「あらッ、お早いのネ。どうなさったの？」

理恵は不審げな面持ちで、それでも嬉しそうに出迎えた。何しろ結婚八カ月、一番楽しい筈の頃だ。

「早いも糞もあるものか——俺は見ただ。見たんだぞ、すっかり」

角太郎は完全にあがっていた。

「まあ、何を見たと仰有るの？」

「白々しく、とぼけるな。ホテルや恋人の家でよろめいていたじゃないか——」

「よろめいただなんて——私はただ……」

「ただも糞もあるか——。どうだ弁解出来ないだろう。近所でも知

らぬは亭主許りなりっていわれたぞ——」

「いえ、私は……」

「云うな——」

角太郎は、結婚以来始めてと云う平手打ちを理恵に飛ばした。

呀っと頬を押えて、理恵が打伏すと、それにつられて角太郎はすっかり逆上した。

いきなり打伏す理恵の黒髪を掴むとズルズルと曳すり廻し、尚も打擲した。その時、角太郎の脳裡に「大吉ぼんのう鏡」の、筑波久子の妖艶な尼僧姿が、前後の関連もなくフト浮び上った。

▲そうだ。坊主にしてやれ。それなら幾ら理恵だって外出も出来まい。自分をさしおいて、多くの男共とよろめいた、浮気女房のこれが当然の酬いだ——が、この儘では素直に頭をそらしもすまい。そ

うだ。身動きの出来ぬ様にしてツルツル坊主にしてやるのだ▼

彼はすっかり理性を失なっていた。嫉妬と黒い怒りが、平凡なサラリーマン清水角太郎を、瞬間にサジストに置き換えた。

矢庭に理恵の手を後に捻じあげると、腰紐で後手に縛り上げた。

「呀っ！どうなさるの——、貴方、やめて……やめて……」

必死にもがく理恵に、角太郎は益々逆上する。

「えーい、やめても糞もあるか。貴様の様な尻の軽い女は坊主にしてやるのだ——」

「誤解よ——貴方の誤解よ。私は……」

「云うな！うるさい——」

角太郎はいきなり理恵の唇をこじあけて手拭を押しこむと、更にマフラーで猿轡をした。必死に抗弁しようとする理恵は、何か云いたげに叫ぼうとした。

床の間の柱まで曳ずって行くと、柱に犂々と縛りつけ、両脚をも縛って、角太郎は洋鋏をミシンの抽出からとり出した。

一瞬ためらったが、思い切って形のいい黒髪にザクリと鋏を入れた。

ザクリ、ザクリ、ザクリ、ザクリ。

夢中で剪り落すうち、理恵のヘヤーカットは見るも無慚に崩れて、ザンバラになって乱れた。涙を溜めて理恵は、今は角太郎のなすが儘に、身を切られる思いで、眼前に束になって落ちる黒髪を呆然と見つめていた。

長い髪を剪り終って、理恵はザンギリ頭になった。

角太郎は風呂場から石鹸とゾリンゲンの西洋カミソリをとってくと、水で頭をしめして石鹸をつけ、ゾリゾリとそり始めた。青坊主がむき出しになるにつれて、淡い後悔から、深い悔悟が急速に角太郎の心を襲った。

綺麗さっぱり青坊主になった理恵の前で、角太郎は放心したように、さめざめと声もなく涙を流していた。

「バカッ、バカな理恵——。どうしたらいいんだ——」

角太郎は理恵の坊主頭を掻き抱くと、泣きじゃくり乍らパチパチと叩いていた。

猿轡を外されて理恵は悲鳴に近い声で叫んだ。

「貴方こそバカよ——。何てことなさるの。私が、あちこちの家へ行くのはアルバイトの為よ。貴方と結婚して、暫らく貰っていた失業保険の期限もきれ、貴方のサラリーだけの二万一千八百円で、物価の上る一方の近頃、やって行けるわけがないじゃありませんか。貴方に心配かけまいと思って、私、内緒で毛糸編機の講習や出張教

授に出向いて、多少のお金でも稼いでいたのに、本当にひどい方——ひどいわ、ひどいわ……」

「そ、それを何故早く云ってくれないんだ」

「云おうとしているのに、貴方は逆上してしまって、私を縛ったり、叩いたり、挙句の果てに猿轡までなさったじゃないの——」

「す、すまなかった——」

「すまないで、私の髪が伸びると思うの——バカネ——バカよ。」

×

×

×

「と、云うわけで坊主になったのかと思って、私は懸命に彼女の坊主頭に、望遠レンズを合わせて撮ったのですが、その日、例のクリニング屋の源さんが私の宅へ来ましてね。こう云うんですよ——『いやあー旦那驚きましたネ。不衛生なパーマメント屋に行ったお蔭で、清水さんの奥さん、虱を湧かしましてネ。随分手当をしたそうですが、一向に治らない。遂に思いきってスッパリと青坊主にしたそうですよ。虱は毛をそるのが一番手っ取り早いそうですネ……へへへ——源さんは意味深に笑っていました。近頃は精巧なカツラが出来ているので、外出に不自由ないそうですが、さて世間の噂は態々です。清水君まで近頃坊主頭で出勤しているのですが、これが理恵さんへのお詫びで頭を丸めたのか、又は源さんの云う通り、虱が感染した結果なのか、免も角新婚の二人切りの家庭の事情は、そうそう他人に分るものではありません。だが一説には、虱と坊主頭とは関係ないと云う人もあります。最後に私はもう一度、このスナップを皆さんに見て戴きたいのです。毛糸編機を教授したり、講習したりする理恵さんが、果してスナップの写真の様に、コツコツ手編で毛糸を編むものでしょうか。坊主頭の代償は、恐らく

夫婦以外、誰も知らない秘密を秘めているのでしよう」

ライカ氏の話は終わりました。一同は狐につままれた様な顔付で、ワイン氏など、ボリボリと、モジャモジャの髪を搔ゆそうに搔き上げます。時間は未だある様です。最後にゴルフ氏が回数を稼ぐように口を切ったのです。

第三十六話 玄蔵寺の姪婦殺し

「伝説によりますと、安達力原の鬼婆は、旅する姪婦をおびきよせ、その腹を断ち割って嬰兒を啖ったと云われていますが、私は最近、京都の古籍屋で、古本を漁るうち、何気なく明治異聞集のうちから、特異な出来事を見出しました。何らかの本で、既に御存知の方もあるかと思いますが、三十九夜にふさわしく思いますので、茲に紹介して見たいと思います。私なりの多少の潤色はあっても、物語の本筋は実話である事を御諒承下さい」

会津磐梯山の雪も解け、春の遅いこの地方も、どうやら水はぬるんで来た。

福島県耶麻郡は磐梯山の山麓に位置している。その村の玄蔵寺の屋根洩りで、屋根葺き渡世の初五郎は、今日も柔かい日差しを浴びてせつせと屋根葺きに精を出していた。

明治五年になっても、中央の文化から遅れたこの山村では、殆んどが未だ丁髷をつけていた。初五郎もその例に洩れない。

「おや、初っあん、よく御精が出るねえ。さあさ、お茶が入りましたよ」

屋根を見上げて呼びかけたのは、寺の墓掃除婦の、ゆきと云う女

で、掃除婦には勿体ない豊満な体の、名前にふさわしい色白で、豊かな黒髪の女である。六年前に嫁いだが、夫は半年で患ってなくなり、その儘出戻りになった二十七才とも見えぬ若さの寡婦であった。「有難うよ——今、降りるからなあ——」

初五郎はスルスルと身軽に滑り降りると、ゆきと並んで熱い番茶を啜った。

「おいら、結婚を間違ったよ。あんたの優しさのせめて十分の一でも、女房にあつたらなあ、つくづく我が身が恨めしくなるよ」

「だってとめさんは、初っあんにバカに親切で情があるって云う噂よ——」

「いやだいやだ。第一、おいらより十も年上の四十五才じゃ話にならない。悪女の深情っていう奴で、やきもちだけは人一倍よ——」

「だって年上を承知で夫婦になったんじゃないの——」

「あいつが酌婦をしていた時、ついフラフラとおいらが引っ掛けて、それから今輪際離さねえんだよ——」

そんなやりとりのうち、どちらからともなく二人は睦言を交わす様になった。配偶者に恵まれぬ三十五才と二十七才の男女が、人影もない玄蔵院でしんみり語り合ったとすれば、落ちつく先は定石通りである。

初五郎は女房のとめの眼を忍んでは、頻々とゆきとデイトを重ねるようになった。

間もなく明治のハイカラらしく、彼は断髪してザンギリ頭になって、一層男振りを上げた。

近頃めっきり冷めなくなった夫の態度に、とめはゆきの存在を知

った。近所でも噂は立っている。

年下の夫を取られた四十五才のとめは、煮えくりかえる胸のうちをじっと押えて、精一杯夫の気持を元に戻そうと努めたが、一旦気



た。

ひぐらしの啼声のみが、静寂の松林に物憂く聞えている。△年上である許りに、夫には搔ゆい所へ手の届くよう勤めて来たし

持の離れた夫には、四十五才のとめが、化粧すればする程うす汚なく、醜く眼に映ってくるのも道理で、半ば公然と家を開けるようになってきた。

とめはその日、夫の初五郎の跡を見え隠れにつけた。八月末の午下りの暑気は、よく肥ったとめの体に一層こたえる。

玄蔵寺を超えて、更に夫は藪を分けて奥へ奥へと歩いて行く。磐梯山の麓の松林の辺りで彼は立止って辺りを見廻した。通称一本松と呼ばれる、年若い大松の根株に腰を降して、初五郎はきせるを抜いて煙を吐いた。

待つ間もなくゆきが、普段着の儘、息せき切って、初五郎の許に走り寄った。

とめは眼の眩みそうな思いで、焼けつくように凝視してい

幾人とも知れぬ白粉女との浮いたうわさにも知らぬ振りをして、ついで愚痴をこぼした事もないのに……

とめは溢れる涙を拭おうともせず、愛憎の眼で二人を睨みつけていた。が、とめは、憎い女の腹が可成りふくれているのを見て、愕然とした。

「あの女は、夫の子供を宿している！」

それを裏書きする様に、なまめかしいゆきの声がとめの耳許まで届いた。

「ねえ、もう六カ月に近いのよ。どうしてくれるのさ。早くとめさんと別れて頂戴よ」

「いいともさ。女房なんか豚に喰われちまえだ。近いうちにすっぱりと片を附けるよ」

「きつとよ。世間が何と云おうとも、私はとめさんが居なくなればすぐ乗りこむんだから——。このお腹じゃ、墓掃除だってきついたらありやしない——」

とめの感情は遂に頂点に達した。ゆきに対する煮えたぎる様な憎悪の一念が、はつきり、殺してやろうと云う決心をつけた。

猫のように足音を忍ばせ、松林を抜けると、とめは家に戻らず、その足で、村外れの掘立小屋に住む白痴の弟の許へ急いだ。

「わかったネ。玄藏寺のゆきをお前に世話してやると云ってるんだよ。どうだい一緒にになりたいだろ。だから明日のお昼に、初五郎が例の一本松で待っているからと云って連れ出すんだよ——」

とめは憎悪と呪咀の虜になっていた。明日は、夫の初五郎が、村の薬小屋の屋根葺きを頼まれているから、朝から手が離せない事

を、とめは知っていた。

白痴の弟の宇之松は四十才になっても、幼児の智能しかなかった。ゆきを世話してやると云われて、彼は涎を垂らして喜んだ。翌朝、何喰わぬ顔で初五郎を送り出すと、とめは早速実行にかかった。恐ろしい殺人計画は着々と進みつつあった。

とめは、縄と出刃庖丁と古い鉄鍋を布にくるむと、暑いさ中の山道を一散にかけ昇って一本松に着いた。全身汗みどろで、とめは腰巻一枚になって、木蔭で涼を入れ乍ら、宇之松の来るのを待っていた。

山道を昇ってくる二人の姿が小さく見え、それが忽ち近づいて来た。

一本松まで辿りつくと、宇之松はとめに云われた通り、矢庭にゆきをその場に押し倒した。

「畜生！何をするんだよ——放しておくれ。この阿呆——」

ゆきは必死に抗ったが、馬鹿力のある宇之松にぐいと組敷かれては身動きも出来ない。ヌーととめは半裸の体をそこに現わした。

「フフ、初五郎が来なくてお気の毒だね。女房のあたしじゃ、お気に召さないかねえ——」

とめは憎々しげに云って、押し倒されたゆきの顔を泥まみれのわらじで、ぐいと踏みにじった。

「わたしを欺したのねえ——」

「欺した？よくいえるねえ。私の夫を盗んだお前は亭主泥棒じゃないか。夫を取られた女房の恨みがどんなものか、これからたっぷり味わせてあげるよ。フフフ」

とめは宇之松にゆきを押えつけさせ、ゆきの手足を、矩形型に生

えた四本の松に、力一杯引き絞って縛りつけた。

ゆきの四肢は四本の松に、縄によって引っ張られて、地上に大字なりになった。

とめは辺りの枯芝を掻き集めると石を置いて、急造のかまどをつくり火をつけた。

チョロチョロ流れる山水を鍋に汲んで、火にかけると、とめは宇之松に声をかけた。

「さあ、約束通り存分にするがいいよ」

絶叫するゆきを、とめは心から快心の笑みを洩らして眺めていたが、やおら立上って、出刃庖丁を手にした。

ゆきのふくらんだ腹を、庖丁でチクチク突き乍ら、小気味よげにとめは云った。

「フフ、お前の腹の子は、わしの亭主の子供だ——。もらってもよからうネ、ヒヒヒ」

とめはゆきの悲鳴を充分満喫してから、やおら、握る出刃庖丁に力をこめた。見る見るうちにその形相は夜叉の如くに変じ、その所業は正に鬼畜のそれだった。血染の未熟児は無残にも、大気に触れると同時に沸とうする鍋に投げ込まれた。

ゆきは断末魔の呻きをあげていたが、やがて間もなく冷めなくなり果てた。

悪鬼さながらの二人は、ガラガラと狂える者独得の眼を見開いて、ぐつぐつ煮える鍋の胎児を見つめていた。

青光りする蠅が、群をなして這い廻り、飛び交い始めた。

鴉が早くも血の匂いをかぎつけたのか、不吉に啼いてわたった。

髪を逆立て、血まみれの庖丁を握りしめた儘、とめはガラガラと

止め度なく笑い続けていた。

×

×

×

「ゆきが宇之松と一緒に、一本松へ行ったと知った寺男がかけつけて、その無惨な有様にびっくりぎょう天して屯署に飛び込み、巡邏がおっとり刀で急行して、其の場で、とめと宇之松はつかまりました。鬼畜にもひどいといめは、係官の取調べに対しても、『本当に食ってやるつもりでした。憎い憎い子だから、その位いのことは当り前の事でしよう』とうそぶき、係官を慄然とさせたと言います。考えて見ますと、夫の情婦が、夫の子を宿したと知った時、その妻は、恐らく誰しも喰い殺しても飽き足りぬ気持にかられるのではないかと思います。最近でもこの種の、本妻と二号の刃傷沙汰は絶えません、それを敢然とやり遂げたといめは、或いは人間の本心のおもむく儘の行動ではなかったかと思えます。三船敏郎出演のメキシコ映画『価値ある男』でも、最後のカタストロフは、妻が咄嗟に情婦を鉄串で突き殺す処で終わります。これを実行に移したといめの、教養のない無智さ加減そのものが、社会にこうした戦慄の記録を残す一つの要因ではないでしょうか」

ゴルフ氏の悲惨な妊婦の腹切おとき譚は終わりました。

「酒も鰯腹のみ、鮮魚も腹一杯つめこみ、釣った魚の土産も出来た。話の終わった処で、そろそろ散会と行こう」

酒が呑みたい為、予かじめ旅館に頼んでおいた運転手が二人、ゴルフ氏とドクター氏の車を、あやつる事になっています。

紀三井寺の桜は早や八分通り咲いているそうです。夜風にほてった頬をなぶらせ乍ら、談笑する車は、やがて孝子峠を越え、大阪府下へと夜風を切って突っ走って行きました。

フィクション

女性
の
潜
在
意
識早
川

進



四宮あつ子は四階建ての鼠いろにくすんだ建物を入った。暗かった。暗いとき、古びた階段がみえ、高い窓によれたガラスがはめてある。あつ子は四階に上った。受付に教えられたとおり、廊下の左側の紙札を見て歩いた。

あつ子は或るドアの前に止り、「面談室」のはり紙のしてある文字を、あらためて見直した。

覚悟は充分にしてきた筈であった。あつ子は眼をカッと見開き、深く息を吸って、ドアをノックした。と、直ぐ、内側から応答があった。重いドアを開けて入ると、天井の低い暖かい部屋である。窓側に白っぽい机が並んでいて、いま、こちに背中を向けた水色の洋服の女が、ひとりで書類に向っていた。柔らかなウェーブの髪がふさふさとした若い女だった。

「あの、お葉書を頂きました四宮ですが」
「どうぞ」

その若い女は、くると椅子を廻した。

「さあ、どうぞここへおかけなさい」

四宮あつ子は体をコウチヨクさせて、相手の前に腰を下した。

その若い女は事務的に机上のペルを押し、あつ子の履歴書にいちべつをくれると脇へ置き、覗き込むような眼で、

「十年生れと云うと……」

「二十六才です」

「そう、まだお若いのね」

云い終らぬ内に、ドアが開いて奥の部屋とおぼしきあたりから、中年の眼鏡を掛けた女が入ってきた。肉感的な体をグレイのスーツで包み、無表情に若い女に一礼すると、椅子を傍へ片寄せ筆記体勢を整えてあつ子を見た。

○昭和十年八月二十六日生

○四宮あつ子。四女。

○身長一六四釐、体重五四匁。

「何か運動をなさいますか」

若い女の質問が続く。あつ子より大分若いようであった。

「高校時代にバレエをやっただけです」

「お父さんの亡くなられた御病氣は」

「胃ガンです」

「お母さんは？」

「肝硬変です」

「貴女はこれまでに病氣は？」

「ありません」

「婦人病は？」

「ありません」

あつ子は体中が熱くなっていくような想いであった。

「今までに、モデルなどの仕事に就かれたことは？」

「ありません」

「人前で裸を見せるのは始めてですね」

「ハイ」

「服を脱いでみせて下さい」

愈々その時が来た。自分がどんなに震えるかと予想していたが、案外あがつていないのに胸を撫で下したものの、顔がほてったように熱くなっているのを意識した。

暖房のきいた室内に、一枚一枚とあつ子の衣服が落ちていった。

白い肌の部分が多くなる。艶やかな肌と、むっちりとした脂肪の乗った魅力的な曲線が露わに描きだされる。

俯向いて脱衣するあつ子を、若い女と中年女の眼鏡が容赦なく見詰めている。

あつ子は痛い程の視線を肌を受けて、ブラジャーとパンティになった。

「両手を頭上げてゴランなさい」

豊かな肢体の背後へ、中年の女が廻ってあつ子の両腕を上に乗せた。

「仲々良い体してますね」

中年の女が横から口を出した。

この女は、若い女の助手役を受持っているようであった。

あつ子は、胸の激しい動悸と、湧き上ってくる震えと、身を裂かれるような屈辱感を必死に耐えていた。上下の歯を痛いほどに咬み合せて。

前から横から手足の屈折から四つ這い迄の姿態をとらされた後「正交会」入会の印章である写真を会員章にはりつけられた。

○

四宮隆雄とあつ子の夫婦が、団地アパートの、その空き部屋におさまったのは、一週間前の日曜日であった。冷い風が頬を刺す十二月の中旬。青い空に所々ハケではいたような雲が、如何にも冬らしい景色とあつ子には思えた。

夫婦の他に手伝いも男女二人ばかり来て、半日の間に手早く、多くもない荷物を三つに分れた各室に無事に運び入れた。

結婚して半年経つか経たないあつ子夫婦は持って来た嫁入道具もまだ真新しく、萌黄の油単のかかったままの簡筒や、緋綸子の覆いをかけた三面鏡などの置き並べられた部屋の

内部は、如何にも新婚家庭の部屋らしいなまめかしさがあった。

「もう一度、新婚旅行から帰って来たような感じがするね」

と云って、隆雄はあつ子の大柄な、肉付のある身体に視線をやった。

「よかったね、思い切ってここへ来てしまつて……会社へ通うのにはちょっと時間がかかるけど」

と、隆雄はあつ子のご機嫌を取るように云った。

あつ子と隆雄は同じ職場で結ばれた恋愛結婚である。

早く両親を失くしたあつ子は叔父の家で育てられ、高校を卒えると同時に家を出て、間借生活をしながらBGになったが、安い給料では生活も苦しく、おしゃれ一つ出来ない苦しさに、もっと収入の多く取れる所を考えると、始めはいっそヌードモデルにでもなるかと思つたが決断がつかず、ずるずるとダ性の日を送るうちに、生命保険外交員募集の広告が目についた。

女の持つ強力な武器を巧みに利用すれば、とひとり想いに耽る時、妖しい興奮に取りつかれ、金を得る為には手段を選ばぬやり方に、

新しい生き甲斐を見出したような気がしたのだった。

そうだわ。容貌も十人並み以上だし、肉体も誰にも負けないという自信を持っている。

どう転んでも同じ一生なら、全ゆる手段でうんとお金を儲けよう……。

あつ子は翌日K生命に面接に行った。

それからあつ子の仕事振りは、めざましかった。ありとあらゆる機会を狙って、ゲンゲン契約高を増やして行き、ひとり彼女の成績グラフのみが煙突の如くそびえ立っていた。衣服を脱ぐように脱がず、きわどいすれの線上を巧みに泳いで渡った。

インテリタイプの蒼白い渡瀬支部長のニコニコ顔が、ひとしきりあつ子の美貌に向けられた後、成績のかんばしくない他の外交員たちに、ねちねちと粘液質の叱言とはげましが繰り返えされた。隆雄もその前にうなだれて、じっと甘受しなければならぬ中の一人であった。

仕事にあふれて、これという目当てもないまま、やむなく保険の勧誘員となった隆雄とあつ子とは、男女の利点という相違をのけても、格段の開きがあったのだ。

坊ちゃん坊ちゃんした上品さのある、どこ

かおっとりした隆雄はきびしいセールスマンの世界には、とうてい不向きであったが、あつ子はその保険屋らしくない所に何故か惹かれるものを覚えた。他の男たちが露骨にあつ子に接近しようとするのに、隆雄はげびた冗談一つ云わなかった。

契約高の線が上昇する度に増えるあつ子の収入が、筆算となり三面鏡と交っていった。勿論それと平行して銀行の預金通帳の数字も増えて行った。団地のアパートに隆雄と一緒に暮すようにもなった。隆雄は相かわらず安い収入で、あくせくと同じ保険会社に通っていたが、あつ子はそれでよかった。遊んで居ても仕方がないから唯通っていてさえくれれば、それでよいのだ。

あつ子位の優遇者になると、いつ出勤しいつ帰ろうと全く自由であり、時間は自分のものなのだ。あくなきあつ子の金への執念はとどまる所を知らず、或る所で耳にした秘密結社『正交会』へ応募した。

だが、ここでは保険会社のような我がままは通用しない。セールスのベテランも、『正交会』に於ては、初心な白い奴隷でしかなかった。

保険の契約を取りつつ一方では『正交会』

で、その屈辱の姿態をさらすあつ子。良人の隆雄は何にも知らない。

「正交会」はその日その日で報酬を支払ってくれた。あつ子にとって、それがまた魅力であった。血の出るような屈辱を忍んだ後の、報酬の金を手にする時の気持は、また格別だった。

あつ子の収入が増すにつれて、良人の隆雄の勢力が弱まって行ったのは当然である。アパートの室内に於ける夫婦の座が、段々にあつ子の色に染まって行った。

食事の支度から部屋の掃除まで、すべて隆雄の仕事になった。

「渡瀬って嫌な奴ね」

嘲笑するように、あつ子は隆雄を視た。良人を男と感じないあつ子の着更え方である。

スリッパをあらあらしく根元までまくり上げ太腿を露わにしてクツ下を取り、部屋着をきるなりテーブルの前にドスンと腰を落す。あつ子の、これが毎日の動作となっている。自然の成り行きとでも云うべきか。

テーブルの上には、良人の心をこめた手造りの料理がのっている。必ずあつかんがそえてあった。あつ子は良人の注ぐ酒で、いろん



なことを喋りちらしながら、気持良さそうに酒に酔うのだ。美しい顔をほんのりと紅色に染め、妖しい眼許で、なめまわすように良人を見るのだ。隆雄は、それでも満足そうであった。

「こら隆雄——」

また始まったと彼は苦笑する。

それほど実際は酔っているわけではないのだが、良い気分と解放感にまかせて、ひどく酔った態度をするのだ。

「お前は、それでも男か」

「ああ男だよ。お前が一番良く知っているじゃないか」

「何云ってんだ」

あつ子はこんな時、決して「正交会」に於ける自分の屈辱な姿態を思い浮かべているのだ。哀れなあさましい姿。臺の下から両親がどんな思いでみていることか。金で買われる故にと割切っては居るものの、今日の買われた先の様に、若い無遠慮な同性の前に屈辱的

ポーズをとって、パチパチと写真を撮られるのは堪らなかつた。それでも特別料金を払っている客達なので、文句は云えない。

「お前、それでも男なの？ いったい今朝の態は何よ。たかが渡瀬如きに、ネチネチ厭味を云われてさ。あんな支部長なんか撲り倒してやればいいんだ。いくじなし！」

「無茶云うなよ。お前と違って僕は——」

「だまれ、馬鹿」

云うなりあつ子はさっと立ち上り、良人の隆雄を押し倒し、いきなり彼の顔の上に足の裏を押しつけた。

他愛なく、ぶざまに転がされた良人の隆雄は、唇を足の裏でふさがれ、息が詰まるほど強く踏みにじられても、ただバタバタと手足を蹴くもがくだけなのだ。

「どうだ、甲斐性なしめ。喋ってみろ」

あつ子は面白がつて、足の裏で良人の顔をグイグイ圧迫する。跳き、悶え、必死に逃れようとする隆雄と、そうはさせじと圧倒する妻のあつ子の遊び斗争は、二人だけの室内で繰り広げられた。

あばれる良人の腕をねじ上げるあつ子と、顔を苦痛にゆがめてもがく隆雄の図は、そのまま経済力の差、体力の相違を示していた。

重量感と精力にあふれる妻のあつ子と、神経を磨り減らしてやせ細っている良人の隆雄の差を——

○
秘密クラブでは、あつ子が奴隷であった。

褐色の伊豆の山が見え始めた。素晴らしい一流レディが飛行機の窓から遙か彼方を見下している。そり返った高い鼻、うるおいのある黒目の勝った瞳。

夢にまで見た、これが一流の旅行なのだ。美しい下界。そして何とも言葉では表わせない、胸のすくような心地は格別であった。

あつ子は、機上の人となっておさまっている自己と、最も屈辱的な肢態をさらしている時の自己との、奇妙なコントラストを思った。誰が想像出来ようか、この二重生活。

故意に良人の隆雄を遠ざけ、自分一人の豪華な旅に、伸び伸びとした気分を感じる。

飛行機が、伊丹空港に降りると、あつ子はすぐNホテルへ向った。

ホテルから電話帳をめくって、阿部敏弘の勤めている製糖会社へ電話した。

阿部はあつ子の高校時代の友人の兄であり「兄は貴女が好きよ。だから、貴女が遊びに来たあとでは、いつもぼんやりしてるわ」

そう云われたことがある。

あつ子はその家には、幾度も遊びに行ったが、阿部敏弘と二人きりで話したことは一時間もなかったし、まして外で会ったこともなかった。

あつ子には愛している男がいるらしい、と妹にきかされたのであろう。阿部は高校を卒業すると、すぐM製糖会社へ就職して行き、その時、簡単な挨拶状を寄越しただけであつた。

あのおとなしい阿部に、いきなり抱いて頂戴と云ったら、どんな表情をするであろう。と、あつ子は思った。

あつ子はスチームの通った部屋で、ガウンを脱ぐとソファにほうり投げ、バスルームに入った。壁にはめ込みの鏡の前にすくと立つ。純白のトウキの様な肌をした浴槽が湯気を噴き上げている。水色のタイルで囲まれた室内装飾がまばゆいばかりにコウコウと輝く。あつ子は自分の白い肌の光沢を、惚れ惚れと見詰め終り、内部の湯加減を見た時、バスルームのドアのところで音もなく廻った。扉が開く。黒い眼帯をつけた男があつ子の背後へ。振り向いたあつ子の顔面が醜くくユガム。見開かれたドウコウ。声より早く濡れた

白い紙があつ子の唇にピタリとはりつく。唇の動きが停止され、強力な男の腕で身体自由を奪われる。暫らくもみ合ったが迎も駄目だ。

あつ子の白いおとがいがが仰向けにグイグイのけぞり、乱れた髪が湯の中へ――

どうして、このような状態になったのか、と思考する暇もないのだ。

「殺される！」

あつ子は恐怖が先に立って、身体がすくみ肌に乗を生じて鳥肌がたった。

ノドの圧迫が段々に強まり、あつ子は全ゆる力と動作で逃れんとするが、体の自由が殆んどきかず、跳き、あがき、悶え苦しんだ。

片腕で首を絞めるかたわら、不敵なこの男は一言も発せず、湯の中へ幾度かあつ子の頭を沈めた。

「苦しい」

「助けて」

あつ子は声にならぬ声で、何度こう叫んだことであろう。

だが男は容赦するのみか、失神しかけたあつ子をタイルの上にはうり出すと、スルドイカミソリを手を取った。

今にもブスリと刺し込まれるかと、身体を

こわばらせている美貌のあつ子……

男の眼帯から覗く眼が笑ったようだ。この眼は一体誰であろう？

体付きが誰かに似ているようにも思える、と気付き始めたのは、手足を縛られ、もはやどうにもならなくなってしまうてからの、あつ子の感じてあった。

あつ子はその儘、広い応接間へ運ばれ、無造作にソファに転がされた。

待っていたように、三人の男がスックと姿を表わす。しめて四人だ。あつ子は息を呑んで唯呆然……

「何時の間に侵入したのか？」

あつ子を見下す四人の男。

見上げるあつ子の恐怖の眼。

これが夢に描いた旅の果か。

私はどうなるのか。

殺されてしまうのではないか。

あつ子は、右に左、裏に表に、横に逆さまに、まるでゴム人形のように、四人の男の八本の手によって、自由自在に扱われた。

翻られ、弄ばれ、あつ子は完全に失神した。

あつ子は自分の部屋に横たわっている自分を見た。

あつ子はしばらく呆んやりと天井を見、周囲を見、そして時計を視た。

十時四十分を指していた。

陽はとくに上っている。

「あれは夢だったのか？」

隆雄はすでに出勤している。

飯台にはチャンと布きんをかぶせて、食事の用意がしてあった。

身体を捻^{ひね}べて見た。どこも異状はないようである。

えらい夢を見たものだ、と、あつ子は苦笑した。

さあ出勤だ、勿論保険会社へである。時をみてクラブにも――

あつ子はさらさらと飯をかき込んで、出勤の支度に掛かった。

と、その時、部屋の中のどこか、いつもと違っている様子に気付き、ハテ？ と首をひねったとき、机の上の白い紙を視た。

封を切った。

隆雄が去ったのである。

散々弄めた彼ではあったが、急に部屋の空間が広くなったような気がした。

麻生保氏の生活と意見

麻 生 保

「麻生先生、今日は。『週刊レディー』の編集記者の渡辺でございます。」

先日、谷田氏を通じてお願いいたしました連載もののプランは如何でございましたか。何しろ、創刊号から先生の連載というので、社長以下皆、大へんに張切っております。

当方、『週刊レディー』の編集方針は、読んで面白く、しかもこれからの若い女性の教養と精神的向上に資する様に致したいと思っております。一切他の類似誌よりもぐっと高級に、上品にというのが狙いでございまして、特にグラビヤは力をいれ、美しいものにした、と考えております。さしあたってここ当分は、毎号世界のトップレディーのレジャーシリーズでまいります。創刊号は乗馬で、エリザベス女王、アレクサンドラ女王、ケネディー大統領夫人、ソラヤ王妃をはじめ、マツダレーナ・ド・コワニー伯爵令嬢、カロリ

ーネ・フォン・ウイットゲンシュタイン夫人、ワンダ・フォン・コトヴィッツ夫人などの乗馬姿が載ります。次号は、季節柄スキーということになりますでしょう。で、先生の御作も、どうぞその線の一つお考え頂けるといいのですが、さし当ってプランなど少しおきかせ頂けませんでしょうか」

「そうですね。先日谷田君から、大体『週刊レディー』の編集方針はうかがいました。

要するに、戦前の日本女性の教養は、しとやかさ一点張りで、所詮忍従だけを強制した。戦後、それがなくなっただけのいいが、行儀が悪くなり、優雅さに欠け、ガサツになって来た。そこで日本女性の精神的体質改善をする。それが為には、西欧的なものの考え方を基本とし、シックで、エレガントで、しかも高いプライドと、キツパリした態度とを涵養するというのが目的でしたね。いや、大変結

構なことです。私も常日頃痛感していた事ですよ。

で、連載もののプランだけど、以前から一つ計画していたものが丁度この目的にうってつけだと思ふのです」

「それは又、願ったり叶ったりです。少しお話し願えませんか」

「場所は南部アメリカ。時代は、まだ奴隷制度が行われていた頃です。といっても、あんまり昔の事ではない。大体アメリカの奴隷制度は、公には南北戦争と共に無くなったことになっていますが、実際は大違いで、特に南部では、割に最近まで行われていたのですからね。」

まあ、人身売買だけは開放令以後ほとんど無くなったでしょうが、労働条件なんかは長い間少しもよくなかったのですから、黒人に対する白人の鞭の支配を最近に設定したって少しも不自然じゃないでしょう。

主人公は美しい白人の少女です。名前はそうだな、平凡だけどセシルとおきましょう。何かもっという名前があったら考えて下さい。

彼女のお父さんは、沢山の奴隷を使って、大きな棉園を経営しています。セシルのお母さんは早く亡くなり、お父さんと二人で、多くの奴隷や、召使いにかしずかれて住んでいます。

棉園経営者と言うと、例の「ドリー・モルトンの思い出」に出てくるランドルフのような無教養な人が多かった中で、セシルのお父さんは一寸違っていました。若い頃、ロンドンとパリで勉強したインテリで、ヨーロッパ文化の心酔者でした。セシルのお母さんはフランスの名家の出だったのです。

だから、セシルも幼い時からフランス語をよく話しましたし、イ

ギリス婦人の家庭教師に厳しく躰けられ、どこへ出しても恥ずかしくない立派なレディーとなる様に教育されました。

お父さんは、彼女が十六になったらニューヨーク、ボストン、更にヨーロッパの社交界に、セシルを連れて出ることを楽しみにしているのです」

「そこで先生。そのセシルが、如何にエレガントなレディーであるかを示すために、彼女の動作や、行動や、シツクなマナーなどを、それとなく書いて頂きたいと思っています。お説教ぬきで、そういったものを読者に学んで貰いたいと考えておりますので……」

「ああ、勿論ですよ。それから私は、そのイギリス人の家庭教師のこともよく書きたいと考えております。」

レディーに仕立てるには、子供の頃の躰けが大切です。つけ焼刃じゃダメです。セシルは子供の頃にそのイギリスのオールドミスに、それはそれは厳しく躰けられたのです。お茶をこぼしたり、ドアをパタンと閉めたりすれば、すぐにお尻をピシャピシャ打たれたものでした。

その家庭教師は、本当にセシルを可愛がり、献身的に養育しましたが、彼女が十二の時、都合でイギリスへ帰ってしまいました。そのあとは、お父さんと二人になるのですが、このお父さんという人が少し変りものなんです」

「ハア」

「ヨーロッパで勉強し、フランス貴族に憧れて、しかも、フランス婦人と結婚した彼は、アメリカ及びアメリカ人を心の底から軽蔑し、しかも自分がその一人であることを、大へんに厭わしく思っていました。」

ここに、現代日本のインテリのある種の姿勢を投影してみようと思うのです。谷崎文学の中で、日本人が、西洋婦人に憧れて、マゾ的愛情を持つものが幾つもあります。ヨーロッパ崇拜のアメリカ人が、ヨーロッパ人に対する心理には似たようなものが、現代でもあります。

セシルのお父さんは、そのフランス婦人に憧れと尊崇に近い感情を持って結婚し、その後、彼は彼女に、ほとんど仕える様にしていたのです。

この種の愛情は、いささか自然発生的ですが、マゾヒズムと密接に結びつきます。

彼女は、古典的な美人で、優雅で、鷹揚で、名門出の誇り高さがあり、アメリカへ渡ってからでもそれを捨てませんでした。セシルもその氣性を受けつぎました。黒人奴隸などは言わずもがな、アメリカの白人をさえ、セシルは軽蔑し、同年輩のアメリカの少女ともまるでつき合いませんでした。お父さんも、むしろそれを喜んでいたので。そればかりではありません。お父さんはセシルを優雅な、しかも驕慢な女に仕立てることに異常な執念を持つのです。優雅と驕慢に磨かれて、セシルは本当に美しい少女になって行くのです。「流石は麻生先生ですな。論理の運びがまことにお上手です。優雅と驕慢。成程いいですね。こいつはまったくすばらしいキャッチフレーズだ」

「セシルは乗馬が好きでした。無論、南部の人達は、誰でも馬に乗りますが、セシルは何時もイギリス風の端正な馬装で乗るのを常としました。」

彼女の美しい乗馬姿は評判であり、又、お父さんの自慢のたねで

した。乗馬慾、征服慾を旺盛にするといって、お父さんは大へんに奨励しており、特にセシルが、ひるむ馬を、ピシリッ、ピシリッ、と鞭打って励まし乍ら障礙を飛ばせたりしていると、お父さんは目を細くして眺めているのでした。

さて、セシルが十五のお誕生日を迎えた時でした。お父さんが「セシル。お前ももう子供じゃない。今後は棉園の経営にあずかって、わしの手助けをし、この家の女主人になるのだ。まづ手はじめに、棉園の奴隸の見廻りを時折やって貰いたい。今迄、それは一切奴隸頭に委せていたが、どうもこの頃思わしくない。わしがするには経営面の用事が多すぎるから、お前に頼もう。いや、なに、一寸した運動のつもりでいいのじゃ」と言いました。

セシルに与えられた仕事は、週に三度、時間をきめないで、馬に乗って棉園に行き、奴隸の働いているところを見廻り、怠けている奴隸を見つけ次第、馬上から鞭で打つのです。

セシルは、それまで、棉園のカンカン場で、その日のノルマの果せなかった奴隸が、地面に腹這いにさせられて、黒い大きな背中を巾の広い革紐の鞭でピシリッ、ピシリッ、と打たれているのを見たことは時々ありますが、自分が鞭を振るのは全く初めてでした。然し、日頃から毎日のように馬を鞭打つことに慣れているセシルにとつては、それは何でもないことでした。奴隸は馬以下の存在だったからです。

セシルは毎日の単調な生活にあきあきしており、しかも子供扱いされるのが日頃不満だったので、大喜びでお父さんから与えられた職務を忠実につとめました。

セシルは、それまで馬に鞭をあてる時の優越感を、ひそかに楽し

んでいましたが、今度、黒人の膚を鞭打つ味を覚えてからは、彼女の体の中に眠っていたサディックな血が本格的に目覚め、次第にフラゲロマニヤの傾向さえ持つようになって来て、この仕事が楽しくて堪らないものとなって来ました。



います。いくら黒人の足が早くても、馬にかなうわけはありません。セシルは馬に拍車をいれ、鞭をあてて、どこまでも追いかけます。全く人間狩りです。

哀れな奴隷が追いつめられ、疲れ切ったところで、セシルはたっ

棉園は広大なものでしたから不意にどこかにセシルが現れれば、彼女の鞭が唸る理由を見つけてるのは難しくありません。黒人たちは、喜怒哀楽の情をすぐに現します。馬上のセシルが近づくと、両手をあげて『おゆるし下さい、おゆるし下さい』と哀れみを乞い、セシルの手にした革の乗馬鞭が、黒い膚にピシリッ、ピシリッと小気味よい音をたてると、『ヒイー、ヒイー』と大声をあげて泣きます。それはかえってセシルのサディックな神経を快く刺戟し、なおもはげしく、しかも楽しげに、時には口許に花のような微笑さえ浮べて鞭を鳴らすのでした。

時には打たれまいとして逃げ廻る奴隷もいます。それは全くセシルの慰みものになってしま

た今まで馬の尻をピシピシ責め続けて来た鞭を持ち直して、はげしく喘ぎつつも観念の眼を閉じた奴隷の前に、高々と振上げるのでした。又、不貞腐れたような態度を示す奴隷に対しては、鎧から片足を外して、長靴の踵につけられた拍車で情容赦もなく蹴りつけるのでした。厚い馬の皮にさえ血を滲ませることのある拍車です。如何に奴隷でもたまりません。

裸の赤黒い肩や背中や頬に幾本ものみみずばれを走らせ、時には拍車で蹴られ、えぐられて血を流して、痛さと口惜しさにヒイヒイ泣いている奴隷を、セシルは馬上から満ち足りた氣持で見下して馬を進めるのでした。

時折奴隷達が皆よく働いていて、あまり鞭を使う機会がないと、セシルは、馬が疲れ切るまで何時間でも野原を早駆けしました。容赦なく、ピシッ、ピシッと鞭があてられ、何の罪もない馬は、セシルのあくことを知らない鞭打懲の犠牲に供されるのでした。

セシル愛用の鞭は、籐を黒い革で巻いた約一メートル位の長めの乗馬鞭でした。馬上から奴隷を打つにはどうしてもこの位の長さが必要なのです。軽くて、よくしなない、打たれると痛さがヒリヒリと身にしみこんで行くような感じです。そして、打ち心地のよさは格別で、馬の尻や、奴隷の背中にピシッピシッと清々しい音をたてる度に、独得の手ごたえが掌を通じてセシルの体の中までもジーンときます。

それと同時に打たれる者の苦痛も、電氣のように鞭の先端からセシルの手首に伝わってくる様な氣がしました。通常、奴隷を懲戒する時は、巾広い革紐だとか、胡桃の丈夫な枝だとか、木のヘラだとかを用いますが、そういった、単に苦痛を与えるだけの野蛮な戒具

を若い娘に使わせることは、如何に相手が奴隷でも、セシルのお父さんの主義に反しました。

彼は最初にセシルに言いました。「奴隷の懲戒は、あくまでも權威を以ってしなければならぬ。が、同時に、セシル、お前は若い娘だという事を忘れてはいかん。粗暴な懲戒は絶対にしてはならぬ。レデイのそれは優雅でなくてはならぬ。それが為には第一に鞭の選択が大切だ。次に見廻りの折の服装も、女主人の權威と優雅を示すものでなくてはならない。そして、鞭を振上げた時のお前は、最も美しいポーズを示さなくてはならない。然し、懲戒そのものは、あくまでもきびしく、容赦なくやってもらいたい。わかったな」

セシルは英國製の狐狩りの時に使うような鞭も持っていました。これは馬上から犬を打つための長い革紐がついていて便利でしたが打ち心地を直接に充分味わえる長めの乗馬鞭に決めたのでした。

馬と奴隷達の汗とあぶらと、そして涙のしみこんだ鞭を持ち、ピカピカに磨いた黒長靴に、これ又、馬と奴隷とに平等に使われ血を流させる拍車をつけ、馬に跨ったセシルの姿は、奴隷達から大へんに恐れられ、お父さんにはますます自慢でした。事実、セシルは、この仕事をする様になってから、ますます美しくなり、年頃の女性らしくなっていました。何故なら、鞭打と、加虐によって、セシルの征服欲が目覚めて行ったからなのです。

お父さんは、かつて、セシルのお母さんにマゾヒストとしての愛情を捧げました。然し、彼女は氣位の高い貴族の娘でしたが、サディックなところは皆無だったのです。アメリカへ来てから、一度棉園のカンカン場を見て卒倒した程でした。お父さんは、それが不満で、一人娘のセシルを自分の理想の女性に仕立てようとしたのです」

「ところで先生。セシルの服装や、アクセサリなどについても御考慮下さい。『週刊レディー』は、女性の上品な、そして近代的貴族趣味の先端を行きたいと思っておりますので、その辺もどうぞ……」

「そうですね。それはいずれ挿絵画家とよく相談いたしましょう」

「はあ、それで、ものによりましては、同じものを作って当社の代理部で販売してもいいかと考えております」

「セシルが、奴隷見廻りの際の服装は大切だと思います。これは、イギリス風のクラシックな乗馬服でなくてはなりません。といっても競技会のフォーマルなのじゃ困る。」

優雅で、クラシックで、しかも、ややラフな、気楽なものが望ましいな。マフラーなども、白よりは、色物の方がよいでしょう。要するに、サポーター一つで汗みどろになっている黒人達と極端な対照が必要なわけです。」

さて、かようにセシルは、黒人達から恐れられていましたが、若い男奴隷達の中には、どうせ叶わぬものとは知りつつも、セシルに憧れを抱いている者もいたのです」

「ああ、それ。それですよ、麻生先生。『週刊レディー』といたしましては、第一に、レディーたるものは常に他人から憧れを以って見られなくてはならないと考えておりますので、そのくだりは、なるべく詳細に書いて頂きたいと思ひます。特に、この際セシルの鞭に虐げられている黒人が、それにもかかわらずセシルを憧れ、恋するようになる心理をですな」

「そう、それは大変に大切なところですよ。無論、そこは特に力をいれて書きますよ」

「それからどうなります」

「ジョーという、黒檀の様な美しい膚の、筋骨たくましい美青年もその一人でした。」

彼は、可愛がっている弟と二人で棉園に働いていましたが、或日弟が、ジョーの目の前でセシルの鞭を受けたのです。その晩、丸木小屋の裏で、肩さきと、首すじに痛々しく走った鞭の跡をさすって泣きじゃくる弟をなだめ乍ら、ジョーは複雑な思いでした。目をつぶると、弟を馬上から鞭で打っているセシルの凛とした姿が暗やみに浮んでくるのです。

ピシリッ、ピシリッ。ピシッ、ピシッとセシルの鞭が鋭く鳴るたびに、可愛い弟はよろけ、痛さに身もだえ、ヒイヒイと泣く声も高くなって行きます。ジョーは思わず、『お嬢さま、俺を代りに打って下さい』と進み出ようと思いました。然し、それはしませんでした。『何故?』と、いま、裏の中で、ジョーは自問自答しているのです。

それは奴隷の分際で主人に口答えすることが出来ないからでしょうか? 勿論、然し、そればかりではありません。ジョーは、実はセシルの美しさに見とれていたのです。

ああ、何とジョーにとって、その時のセシルが美しく見えたことでしょう。セシルの、毅然とした中に、えもいえぬ柔軟さを秘めた身のこなしが、鞭が振上げられるたびにうかがわれました。鞍の上に張った腰、キチッとひきしまったウェスト、長靴に包まれていてもそれとわかる魅力的な脚線、風になびく金髪、見据えた鋭い目、驕慢そのもののような鼻、そして、優雅さを片時も忘れない身のこなし。

女といえ、汚辱の中で豚のような生活をしてブクブク太った黒人女ばかりを見ているジョーにとっては、全くこの世のものとも思われない程で、別世界の天使か何かのように見えたのでした。

若し、弟を鞭打ったのがセシルでなくて、奴隷頭だったりしたら、血氣盛んで、腕力にも自信のあるジョーは、絶対にだまっていなかった筈です。ジョーは、そう考えると、恥しきでイライラし、弟が床の中で、『あの白い魔女め!』とつぶやいているのをきくと、『バカ、いいから早くねろ』と怒鳴ってしまいます。そうして、働きの自分がまだ一度もセシルの鞭を受けたことが無いのが何だか物足りなく、セシルに手ずから鞭で打たれた弟や仲間が、ねたましくさえ思えてくるのです。

「いやー。このくだりは最高ですな。改めて麻生先生の心理描写と運びのうまさに敬服いたします。要するに、女性美が最後の勝利を得るということでございますね。早く帰って皆に話してやりましょう。大喜びだろうな」

「いや、感心するのはまだ早い。これからが大事なんだ。まあ、終りまできいていらっしやい。」

その二、三日あと、セシルが見廻りを一わたり終えて、馬からおりて休んでいると、木陰から、じっと彼女を見つめている黒人青年がいるのに気がつききました。言わずと知れたジョーです。労働時間中に抜け出してきた、しかも、ものかげから女主人をジロジロ眺めるなどということは、どんなひどい懲罰をも受ける理由になることでした。

セシルは立上り、美しい眉を寄せて、きびしい声で言いました。『失礼な! ここへおいで!』



ピシーリ、ピシーリと鞭は、ジョーの両頬に誇らかに高く鳴りました。然し、ジョーは他の奴隷達のように泣いたり、わめいたりせずに、黙ってセシルの鞭を受けています。

長い間、切なくも憧れていた白人少女の手から与えられるなら、それがたとえ堪え難い苦痛であろうとも、ジョーにとっては喜びである筈です。

ふだんは、口をきくことさえ許されないセシルを、いま自分が一人占めしている嬉しさ。はげしく打たれる鞭を通じて、セシルの手のぬくもりが伝わってくるような氣さえするのです。そして、鞭にピュッと切られた風が、セシルの甘酸っぱい体臭を運んでくるのでした。

彼女は何とかジョーを泣かせ、わめかせたい衝動に駆られ、狂氣のようにピシーッ、ピシーッ、と鞭を振り、遂には、ジョーのひざを長靴で蹴り上げました。思わずヨロヨロしたところを、すかさず

反対のひざを強く蹴られたジョーは、地面にうつぶせに倒れてしまいました。

汗の粒がダイヤモンドか何かのようにキラキラ光る黒檀のような背中を、セシルは長靴でギューギューとふみにじり、拍車で蹴りまくり、血を流させるのでした。

然し、それでもジョーは、うめき声一つあげませんでした。もっとも、その精悍な顔は苦痛にゆがみ、澄んだ目には涙があふれ、幾本ものみみずばれが赤黒く走る頬の上を伝ってはいましたが……。

こうして、さんざんにジョーの体を責めさいなんだからセシルは再び馬上の人となり、屋敷へ向いました。が、上気した乗り手の氣持がうつったのか、途中で馬がいきなり狂ったように疾走し、セシルは振り落されてしまいました。

腰を強く打って荒地の真ん中で動くことも、助けを求めることも出来ないところへ、やって来たのは何とジョーでした。「お嬢さん。馬から落ちたんですね。さあ、俺におぶさって」「さわらないで！ 汚らしい。私一人で帰れてよ」セシルは立上ろうとしますが、ガックリひ

ざをついてしまいます。「お嬢さん。やせがまんするんじゃないよさあ」ジョーはセシルを背負って屋敷の方へ向いますが、まだまだ遠いのです。そして、ジョーの背中にはさっきセシルの拍車がつけた傷跡が一ぱいで、その上に、よく発育したセシルの体を背負うのは大へんな苦痛でした。まだ血のとまっていない、あかぎれの様になった傷を、セシルの上衣で一寸でもこすられると、飛上りそうになりました。それに、如何に力持ちのジョーでも、段々に、重くて堪



らなくなって来ました。

然し、ジョーの心の中は喜びで一杯でした。生れてから貧しく哀れな生活ばかりしていた彼には、こんなに嬉しい日はありませんでした。頬や、くびすじの鞭跡に汗のしみる痛さ、背中の激痛とセシルの重さ、そしてまともに照りつける西陽の暑さを歯を喰いしばって堪え乍ら、ジョーはこの道が、どこまでもどこまでも続けばいいと思うのでした。

セシルのお父さんは、根は氣の優しい人でしたから、ジョーに感謝し、今後屋敷の仕事をさせるようにします。棉園の奴隷から見れば、大へんな出世です。ジョーはよく働き、特にセシルには誠心誠意を献げて仕えたことは言うまでもありません。セシルはジョーの働きぶりに感じ、身のまわりの世話を一切ジョーに命じるようになります。

彼女は、彼の心を知ってわざと入浴中に風呂場に呼んで用をいいつけたり、足をもませたりなどします。これは、ジョーにとっては何よりも楽しい奉仕であると同時に、鞭よりも辛い責苦だったに違いありません。

幾月か経ちました。或時、お父さんが商用で数日留守をした間のことでした。セシルが、ジョーに足をもませていますと、ジョーは思わずセシルの足に唇をつけてしまいます。と、セシルのすんなりと形のいい脚が躍り、ジョーの顔をイヤという程蹴りました。

『何をするの！』起き上るやセシルは、ほとんど本能的に、壁にかけてあった鞭をとり、振り上げました。

でも床に土下座して、おそれおのき乍ら罰を待っているジョーを、セシルは打ちませんでした。『ジョー、お前そんなに私が好きなの？』『…………』『わかっててよ、ずっと前から』『ハ、ハイお嬢さま。好きだなんて、そんな大それたことは考えてもおりません。ただ、俺、うまく言えないんですけど…………』

セシルはジョーのあまりの純真さに感動してしまいます。(ジョーは本当にきれいな心の持主だわ。そうして私をこんなにも崇拜している。それなのに私はジョーを鞭で打ったり、拍車で蹴ったり、その上足をもませたりなどして念のいった意地悪をしたんだわ。無

論、ジョーは奴隷、私の所有物に過ぎない。私が打とうと蹴ろうと勝手。若し私がお父さんに『ジョーが不埒なことをしました』って言いつけたら、ジョーは殺されたって仕方がないんだわ。してみると、ジョーは決死の覚悟でこんな行為に及んだんだわ。私の足に唇をつけるだけで、死んでもいいという氣持なんだわ……。この間、ボストンのダンスパーティーで会ったお世辞ばかり上手な下院議員の息子や、お父さんの財産目当に入り婿になろうとしているイタリ人の外交官なんかより、ジョーの方がどんなに純粋だかわからない……。『こっちへおいで、ジョー。お前は本当に可愛いわ。無智で、純粋で、遅しくて…………』

然し、翌朝になると、セシルは昨日の行動が悔まれてなりませんでした。

無理ありません。如何にジョーの純情に心ひかれたとはいえ、それは全く道に外れた事でした。

世の中にプライド程大切なものの無いセシルは、自己嫌惡に堪えられなくなり、その日の午後お父さんが帰ってくる前に、お父さんのピストルで自殺してしまうのです。遺書にはただ一言、『ジョーを殺して下さい』とだけ書いてありました。

然し、それが人目に触れた時には、ジョーもすでにこの世にはいませんでした。

銃声をきいて万事を悟ったジョーは、セシルにはじめて鞭打たれた木立ちのあたりで、セシルのマフラーで首をくくって…………』

「それでおしまいですか？」

「そうですよ。一寸いいでしょう」

「あの、先生、まことに申し兼ねますが、最後のくだりに少し問題

創作

妻の座への階段

東町三郎

(一)

看護婦の山田みどりは、和服の上に白いエプロンをかけた姿で、主屋からの渡り廊下をしゃなり、しゃなりと腰を振って、秀生の病室に入ってきた。

「お熱を計りましょう」

そう言って秀生の枕許にピッタリと坐る。

色は浅黒いが、いわゆる小股の切れ上った年増芸者という感じのするみどりは、看護婦らしくない仇っぱさを持っていた。

蒼白く瘦てはいるが、貴公子然とした美青年の秀生は、熱っぽい目でみどりを迎える。

「めんどうだから、後でいいだろう」

「いけませんわ、若さま。きちんと時間に計りませんと駄目」

みどりは秀生の手を握り、一方の手で検温計を差し出してニッコリと笑った。秀生は目を閉じて、顔をそむけた。

その時だった。主屋の方で、秀生の妻、百合子の悲しい泣き声が、かすかに聞えた。

「お母さま……お許し下さいまし。アレー、カンニンして下さいまし」

秀生は、パッと目を開けて、身を動そうとした。だが、みどりは両手で秀生の体を軽く押さえた。

「何でもございませんよ。若奥さまが、御隠居さまから叱られているのですわ。ウフフ……」

と、みどりは意地悪そうな微笑を浮べた。

秀生は悲しそうな表情をしたが、黙って再び頭を枕につけた。

秀生は、百合子を深く愛していた。母親の松子の猛烈な反対を押し切って貰った妻なのだ。子爵家の一人息子である彼と、貧乏人の孤児にひとしい百合子との結婚は、始めから無理があった。だが、相思相愛の若い二人は、心中さえしかねない決意を示したので、遂に松子も折れたのだ。しかし、二人が新婚生活

に入ったその日から、松子の嫁いびりは徹底したものだ。だが、心のやさしい百合子は、夫の愛にすがり、一生懸命に気むずかしい姑に仕えたのだ。新婚一年は、それでもとうにか暮せたが、百合子が妊娠三カ月になったある日、突然、夫の秀生は血を喀いて病の床についてしまった。それから言うもの、松子の嫁いびりは、更に激しいものになったのだ。松子は、古くから使っている女中頭のお辰を始め、この家の経済顧問兼家令の役をしている大熊という男や、他の二人の女中まで動員して、徹底した責苦を百合子に加えた。動員といえば、この家に居る者ばかりではない。松子は、出入の商人から、医者に至るまで、抜け目なく手を廻していた。特にこの家に昔から出入りしている医師の中村はこの附近でも評判の習問医者で、松子は、この中村医師がお気に入りだった。秀生が肺浸潤で倒れると、これこそ、百合子と息子を切り離すよい機会」とばかりに、中村医師に頼み、付添看護婦に美人を頼んだのだ。そして来たのがみどりだった。

松子は、秀生の世話を妻の百合子には、何一つさせないようにした。そればかりか、一歩でも主屋を離れ、病室に近づく事を禁じた

のだ。

「お前が、秀生を病気にしたのだ！ お前のような女が妻になったからこそ、秀生は肺病になんかかったのだから、近寄ったら承知しないからね」

と松子は、眼鏡の奥から蛇のように冷めた目で百合子を睨みつけて言った。そして百合子が結婚前、ほんの短い間だったが、レビユー・ガールだった事を女中の前でも、誰の前でも、大声で罵るのだった。

「ほう、若奥さんの胸郭は、実に、立派なものですな。日本人には珍らしいですよ。」

初めて百合子を診察した中村医師が、思わず叫んだ程に、美しく、型のよい鳩胸の持主だった。だが、この医師は、間もなく、松子の嫁いびりを知り、美しい肌に、紫色のあざがあっても、気のつかぬ風をしていた。松子に言われれば、嘘でも、本当でも、好きなように診断を下すような男だった。赤ん坊が生まれ、あふれるように乳の出る百合子に「多少脚気のようなだから、赤ちゃんには飲ませない事ですな」といったのも、松子から、たんまりとお礼を貰う約束からだった。健康で美しい若嫁を苦しめる一つの手段として、こうした事を医師に頼んだのだ。松子は、出入りの

職人に百合子を折檻する拷問道具さえ、公然に作らせるのだった。朝、起きてから、夜、眠るまで、これでもまだ出て行かないかとかばかりに、考えられるだけの意地悪さと責苦を百合子に加えていた。だが、百合子は、じつと姑の仕置にたえているのだった。それが、益々、松子の心を苛立たせた。

今も、この寒いのに、庭の池の掃除を跣足で、腰巻一枚、白い襦袢一枚の姿でさせていたのだ。池といっても、小さなコンクリートの池で、金魚を出し、水を替えるだけの事なのだが、連日、断食の刑を受けさせられている百合子にとっては、可成の重労働なのだ。何杯もの水をバケツで、遠い台所口から運ばねばならなかった。しかも、縁側に蒲団を出して坐っている松子は、口やかましく、次から次にと用を命じた。百合子は、金魚をバケツから池に移す時に、誤って一匹を芝生の上に落してしまった。運の悪い時は、仕方のないもので、何処で見ていたのか、松子の可愛がっていた猫の玉が、サッと走って来て、パクリと金魚をくわえてしまったのだ。驚いた百合子は、あわてて、玉の首を押さえつけて金魚を取ろうとしたが、猫は離そうともしなかった。

「玉、だめよ。玉！」

百合子は、猫の頭を思わず平手で打った。

その光景を見ていた松子は、ギリギリと眉を吊り上げ、とげとげしい顔を更にとがらせて、下駄をつっかけると、猛烈な勢で走って来た。そして、アッという間に、百合子の腰を強く突き飛ばした。

「お前は、何んて可哀そうな事をするの！」

倒れた百合子は、目の前の芝生に金魚が死んでるのを見て、両手をついてあやまった。

「申しわけございません。私の不注意で……」

松子は、百合子にみんなまで言わせず、百合子のやや赤っぽい束髪の毛を撫むと、ずるずると引きずって縁側の前まで連れて来た。

何時も、打檻する時には、病室から遠い所を選んでいる松子だったが、今はそんな事を考えていられない程に、腹を立てていた。

「お前は、玉やを殴ったね。玉やが死んだらどうするのです。」

「つい、思わず打ってしまいました。お母さま、お許し下さいまし」

縁側の前の三和土の上にキチンと坐って、百合子は両手をついた。松子は撫んだ頭髪も離さず、力一杯に百合子の顔を引き起した。束髪は乱れ、髪を引かれ、百合子の目は

吊り上っていた。三日月眉のやさしい百合子の眸だが、白目が出て、松子を睨んで居るように見えた。

「その目はなんですか。私を睨む気かえ？」

髪を離して、平手打が頬に飛んだ。百合子は睨んだ覚えはないのだ。だが、姑の無理は、毎日の事なのだ。百合子は、ひたすらあやまった。

「お前は、玉やが私に可愛がられるのが口惜しいので、あんな事をしたんだろう！」

そう言って、松子は、もう一度たたか頬を打った。

「お許し下さいまし。決して、そんなつもりではございません。アッ」

この百合子の悲哀な声が、病室まで聞えて来たのだ。

「許しません。お前の性根は解ってるんだからね。動物を可愛がる、やさしい心なんてものは、お前には、毛ほどもないのだから。さあ、私の部屋に来るんだよ。足を洗ったら、すぐにですよ！」

そう言い残すと、松子は立って行ってしまった。三和土に坐ったままの百合子は、ホロリと涙を落した。病室の窓から、看護婦の山田が、こちらを見ているのに気がついた百合

子は、ハッとして立ち上った。百合子は、この女に、責め折檻を見られるのは、何よりもつらかった。女中達の噂では、この女と夫とは、どうも少し怪しいと笑っていた。百合子は、夫の愛を信じていた。だが、嫉妬をするわけではないが、百合子の心の片隅からは暗い雲がどうしても消え去らなかった。膚は浅黒いが、すばらしく美人の山田みどりが、百合子にとっては責められる松子よりも怖ろしかった。

「あなた。早く、元気になって下さいまし」
そう心にこめて、彼女は病室をチラッと見ただけで、バケツを下げて走り去った。

(二)

秀生の熱は、このところ、毎日高かった。一時、やっと七度一、二分に下った熱が二、三週間前から、夕方から夜にかけては八度ぐらい出た。勿論、重態というものではないが咳が多く、安静にしている必要があった。再び熱が出た原因は秀生には解っていた。彼は妻に対する悪かったという気持と病気を悪化させた事に深く後悔していた。目を閉じて、百合子の可愛らしい顔、美しい肌、やさしい心を思い出して自分を慰さめては居るが、目



☆

を開けると、妖艶さでは妻より優った女が手のとどく所に居るのだ。しかも、女の方から言い寄ってさえ来ているのだ。彼は、この誘惑との斗いに、精根つき果てていた。

部屋を暗くして、枕の横のスタンドの灯でみどりは寝そべりながら講談本を読んでいる。一日の仕事も終り、白衣を取ったこの女は、女房気取りで、この部屋に床をとるのだ。

彼が重態だった時の習慣が、今でも続いていたし、今は、当然の事となっていた。

「さあ、寝ようかな」

そんな事を言って、一つ、大あくびをしたみどりは、寝巻に着かえ始めた。これみよがしに胸を張ってみせた。だが、秀生は眠っているらしかった。「フン」と鼻でつまらなそうに笑うと、彼女は寝巻を肩にかけた。

「看護婦さん。山田さん、もうおやすみ？」
女中の声だった。

「いいえ、何か御用？」

「あの、大奥さまが一寸、お部屋まで来て下さいまして。それから、お風呂をどうぞ」
「ハイ、すぐ参ります」

みどりは、急いで、また、着物をまとうと白衣を着けた。何の用か解っていた。彼女は大喜びで灌腸の道具をもって部屋を出た。

松子の部屋では、乳しぼりの日課が始まっていた。

「ああ、山田さんかい。一寸まって下さい。また、この人に灌腸をしてやって」

「ハイ、そうだろうと思ひまして……」

みどりは、灌腸の道具を横に置いて坐った。そして、面白そうに、その光景を眺めるのだった。

「もう、カンニンして下さいまし。アッ、痛とうございます」

百合子が細い声で哀願した。

「今夜は、これぼっちかい。えろう少いじゃないか。まさか、お前、孝一に飲ませたんじやないだろうね」

松子は怖い目で睨みつけた。

「いいえ、お母さま。決して、そんな事は致しません」

「そうかい。そんならいけど。もしそんなことをしたら承知しないからね。」

「ハイ。よく存じております。」

「さあ、山田さんがお持ちだから、早く、灌腸をして貰いなさい。」

「アノ……お母さま、それだけは……」

百合子は真赤になって下を向いて言った。

「お前は、便秘で苦しんでるんじゃないか。」

山田さんをお待たせしてはお気の毒じゃないか。それとも押えつけていてもらいたいのかい？ 大熊を呼ぼうかね」

百合子は、姑の言葉にゾッとした。家令の大熊が、この家にとっては、どんなに忠臣であるか彼女は知らないが、何時もいやらしい目で彼女を追ひ廻すこの中年男は、顔を合せるだけで身震いが出た。この男を呼んで折檻の手伝いをさせると松子が言い出すと、百合子は、もう、どんな事でも我慢した方がよいと思うのだった。五十に近い年で妻も迎えず、女から女へと遊び歩く赤ら顔のこの男は百合子にとってこの家で誰よりも嫌いな存在なのだ。

百合子は、もう観念し、手で顔を隠した。その姿は、何ともいえない可憐さがあつた。だが、山田みどりは、そんな事にはおかまいなしに、邪慳に取扱つた。

「ハイ、おしまい。出来るだけ我慢して下さいませね」

職業的な冷めたさで彼女は、こう言うのと、浣腸器を片づけた。今に、この女が我慢出来なくなつて、身を震わせて姑に哀願するのが見られるだろう。

膝に玉を抱き上げた松子は、畳に伏してい

る嫁の苦しみを凝視していた。その目の鋭さには、みどりもゾッとするものを感じた。この目で毎日睨みつけられていては、子供を生んだとはいへ、まだ、二十になったばかりの小娘のような若妻には、蛇に睨まれた蛙のようになってしまうのも当然だと心の中で思った。例え自分が、若さまの秀生が好きであっても、こんな家の嫁だけにはなるものかと思つていた。長居は無用とばかり、みどりは立ちかけた。

「ああ、御苦労さま。お風呂に入つて、もうおやすみなさい。」

さつと表情を変え、微笑さえ含んで松子はみどりに言った。

「ハイ、有難とうございます。」

みどりは、もっと見ていたい気もしたが、利口な彼女は、切り上げ時と部屋を出た。

寝室では、秀生が軽いいびきをかいて眠つていた。この若い貴公子は、病気の疲れと心の苦悩のためか、やせが目立っていた。熱のためか額に汗が見え、頬がポツと赤かった。

もう、真夜中に近かつたが、お風呂場では水音がしていた。誰よりも遅く、一番終りに入る事に決められている百合子が、お風呂の

掃除を終ったところだった。彼女は、ぬる湯に長く入ってなければ体が温まらなかった。それでも、いくら白い体にホンノリと色がついたので、大急ぎで上り仕度をした。その時だ。突然、後から鏡の中に、一人の男の姿が映った。ハッとした彼女は、声をのんで後を振り返った。

酒に酔った大熊がそこに立っていた。

「アッ、こんな処へ何の用ですの。いけません！」

「大きな声を出すと、お前が叱られるだけだよ。フフフ……」

大熊は、無遠慮に中へ入って来ようとした。

百合子は、無言で抵抗を続けた。そして、いきなり、大熊の手をガブリと噛んだ。

「アッ……こ……こん畜生！」

百合子は、無我夢中で、湯殿を飛び出し、風の如く廊下を走って逃げた。自分の部屋の方には走れなかった。何故なら、女中部屋の隣りで、赤ん坊と二人で寝ている彼女の寝室に行くには、姑の部屋の前を走り過ぎねばならなかった。大熊は、ニタニタ笑って追ってくる。彼女は、自分の部屋と反対の、夫の病室の方に逃げた。寒いのも忘れて、渡り廊下を通り病室の前まで来た。だが、そこで百合

子の足はピタリと止ってしまった。部屋の中から聞えた声が、彼女を立ち止らせたのだ。

みどりの甘たれた声だ。

百合子は、ブルツと体を震わせた。とてもこの部屋に逃げ込む気にはなれず、主屋にトボトボと戻っていった。幸い大熊は、もう二階に行ったらしく姿が見えなかった。彼女は蒼白な顔になって、やっと、自分の部屋に帰った。

赤ん坊の道雄は、スヤスヤと眠っていた。

彼女は、薄い床の上に伏すと、ワツと泣きくずれるのだった。

(三)

百合子は、夫を信じていた。だが、あの病室の囁きは彼女の心に絶望に似た感じを与えた。彼女は一晩中泣いた。だが、朝が来ればもうそんな事を考える閑さえないのだ。真赤に泣きはらした目で、彼女は朝早くから姑の叱声に追い廻されるのだった。

その夜、日課の乳しぼりの時に、大変な事を姑に見えられたのだ。あの犬熊との争いに一方の紐がとれた事に気がつかなかったのだ。姑に問われて、百合子は昨夜の事を正直に話した。だが、姑はそのままには受け入れ

なかった。

「嘘おっしゃい！ お前がわざと大熊さんを誘惑したのだろ！ 大熊さんは、何時でも、お前が色目を使うと困っていたんだよ。夫のある身でお前は！」

百合子は、余りの事に、口答えも出来なかった。

「どうぞ、お母さまの思い通りにして下さいまし。」

百合子は、思わず、そんな事を言ってしまった。松子は、ニタリと気味の悪い笑いを浮べてにじり寄る。

「よく、解ったね。お前も段々に根性をいかえて来たらいいじゃないか。感心、感心。それでこそ、私が叱りつけて来たかいがあるものというものさ。では、今夜から、お灸を据えてやりましょう。」

松子は、愛用の灸の道具を持ち出した。

「始めは、小さいのから据えていこうね。ヒイヒイ泣くと承知しないから。」

モグサが盛られ、胸の双丘に同時に灸が据えられた。

「ウツ……ア……」と百合子は、齒を喰いしばって熱さをこらえていた。

姑の松子は、じっと、嫁の顔を眺めていた

が、この鬼のような女にも、この時の百合子の顔の可憐さ、美しさを認めないわけにはいかなかった。一瞬だが、松子の心にも、人間的な同情心が動いた。だが、それは、一瞬の事で、次の瞬間には、前よりも、この女を苦しめたいという激しい嗜虐心がわいて来た。消えた灸の上には、更に、モグサが盛り上げられた。

「アッ……ッ……アッ……」

百合子は、身を悶えて苦しむのだった。

松子の責めの方法は、お灸に限られてはいなかった。金属で出来たネズミ取りのパネで、至るところをはさむ事も考え出した。みどりに手伝わせて、カラシの湿布を当てる責めもあった。胸はただれたようになり、ヒリヒリとする痛みは、何日も取れないのだった。

数カ月を過ぎる頃には、着物を着ていては解らないが、別人のように、痛々しい肌になっていた。姑の松子は、そうした嫁の変りようを、この上もない満足で眺めるのだった。好色漢の大熊も、こうなった百合子には、目も向けなくなった。大熊は、何時の間にか、美貌のみどりと仲よくなっていた。ある日、突然、この二人は、駆け落ちをしてしまったのだ。松子は、飼犬に手を噛まれた時のよう



に、一人で怒って騒ぎ立てた。大熊は、会計をまかせられていたので、可成の金額のものを持ち逃げしていた。

幸い、秀生の病状は、その頃から快方に向っていたので、もう、看護婦の必要はなくなっていた。秀生の世話、松子や女中で出来た。松子の留守の時など、女中の目を盗んで百合子も、夫に近づけるようになった。

「百合子、会いたかったな」

秀生は、涙を流さんばかりの様子で、しみじみと言った。もう、その言葉だけで百合子は死んでもよいと思う程に嬉しかった。

「苦しかったろう。よく、我慢していてくれたねえ。」

「夫は知らないのだ。私の肌がどんなになっちゃったか知らないのだ」そう思うと、百合子は、悲しさと不安に震えた。

「み……みどりさんを愛していられちゃうのでしょうか？」

「バカな！ボクの愛しているのはお前だけ。あの女は、ボクが動けないのをよい事にして、無理に愛を押し売りしようとしたのさ。」

百合子の心は、パツと明るくなった。だが姑の眼を思い出すと、これ以上、夫の近くに居ることが怖ろしかった。

「お母さまがお帰りになると叱られますから……」

そう言うと、逃げるように部屋を出て行った。その可愛らしい後姿に、秀生は、限りない愛情を覚えるのだった。

「百合子！百合子たら……バカな奴だ。」

秀生は、フラフラした足つきで主屋に追って来た。それは、発病以来一年と数カ月振りの事だった。

「若さま、御病気に障ります。」

女中頭のお辰が、大きな体で、逃げて行く百合子と彼の間に割り込んで来た。

「ウン。……百合子に……ボクの部屋に来るように言ってくれ……」

息が切れた秀生は、笑って言った。彼は、妻がこんな事で激しい折檻を受けるとは思わなかった。

母親が百合子を憎んで責めている事はよく知っていたが、常人はずれの事をしていると思わなかったのだ。それは、肉親に対する信頼と一種の盲点でもあっただろう。

その夜、彼は、ふと目を覚ますと、主屋でビシー、ビシーという音がしていた。彼の顔色はサツと変った。病床で動けなかった頃、母親が妻を折檻するのをどんなに心配してい

たか解らないのだ。だが、みどりが出て行った頃から、バタリとそんな事がなくなっていた。あの看護婦の駈け落ちで、母の心を少しは百合に結びつけられたのだと喜んでいたので。

彼は、床を離れると主屋に急いだ。音は湯殿からだった。

「気を失ったフリをしようたって許しませんからね。」

そう言う母親の声と共に「ヒィー」という悲鳴が聞えた。

湯殿の戸をガラツと開けた秀生は、呆然として、余りの事に声も出なかった。

そこには、秀生の想像もなかった無残な光景があった。湯殿の窓に結びつけられた梯子に、百合子が両手両足を伸して、梯子を抱くようにして縛りつけられ、立てかけられているのだ。横に、細引を束にしたものを下げて、女中頭のお辰が立っている。母親の松子は鬼のような顔つきで、釘抜きで百合子の腕を挟んで居たのだ。

秀生を驚かしたのは、それだけではない。百合子の驚く程にやせた背中、細引で打たれた跡が一面に赤くなっていた。

「な……なんて事を……」

秀生は、怒りが燃え上った。

彼は、思い切り母親を押しつけて、妻の傍に走り寄った。

百合子は固く猿轡をされていた。秀生は、大急ぎで、妻の手足の紐を取り、梯子から離した。

百合子は、気を失ったのか、グッタリとしてしまった。

「母さん、あんたは！」

秀生は蒼白になり、松子につめ寄った。だが、松子は、平然と息子を睨みつけた。

「お前、母さんのした事が気に入らないと言うのかね。何ですか、こんな女！ 生かせて置くのが上々だよ。」

「でも、あんまりです。若し、警察にでも知れたら」

「オホホ。息子のお前が、母親を訴えない限りはね。」

松子は、気味の悪い笑いを浮べた。秀生は母親のこんな顔を生れて初めて見た。

「ボクは……ボクは訴えてやる！」

秀生は、怒りに身を震わせて叫んだ。

「どこの世界に、親を訴える人間があるものかね。お前が、そんな心になるのも、こんな女に迷っているからだよ。」

「本当でございますよ。若さま。」

お辰が、傍から忠義顔に言った。

その時、百合子は、身を起すと、細い声で夫に言った。

「あなた！ お母さまが悪いのじゃありません。みんな、私が悪いのです。」

(四)

あんな事があったが、不思議に秀生の病気には、何の影響もなかった。寧ろ、毎日に元気を回復して行った。

秀生は、母親を訴えはしなかった。だが、涙と共に、母親を説いて、嫁いびりをやめさせる事を誓わせた。だが、それは、表面だけの事に終っていた。あの事があってから母親の松子は、ゲッソリと元気がなくなってしまった。

家の経済をやっていた大熊には逃げられるし、いやでも、この家のすべてを息子夫婦にまかせる結果になってしまったのだ。

心の優しい百合子は、それでも、何一つ苛められていた時の恨み事を言わず、前と同じように母親に仕えた。

そして、夫の留守に、依然として嫁いびりが続いても、何も口に出して言わなかった。

た。

体の丈夫になった夫が勤めに出た事、一応、夫婦らしく生活が出来る事だけで、百合子は嬉しかった。

子供も、ヨチヨチと歩いていたし、更に、百合子が幸福だと思うのは、自分の肌がメチヤクチャにされてしまっているのに、少しも、夫の愛が変らなかった事だ。今では百合子は寧ろ、自分から姑の折檻を受けるようになっていた。

「お母さま、私が気がつきませんでした。どうぞ、前のように折檻して下さいまし。」

百合子は、こんな事を姑に願うのだった。秀生が知らない間に、矢張、嫁いびりは続いていたのだ。

だが、同じ嫁いびりでも、前とは姑と嫁の間に流れる感情が大きく違って来ていた。当事者の二人といえど、この事には気がついて居ないようだった。

百合子は、限らない幸福の中に嫁いびりを受けているのだった。実に、不思議な事だと思う。

(おわり)



白

告

私の女装人生記

美島 弥生

生い立ち

軟かい絹の肌ざわり、胸をぐつと締めつける巾広の帯の圧迫感。これらが私には、たまらない魅力なのです。何物にも代え難い最高の魅力なのです。

私は愛知県のN市に興行師の長男として生まれました。父が興行

界にいた関係上、幸か不幸か幼少

の頃より芝居の楽屋等を覗く機会

に恵まれておりました。男が化粧

をしてカツラをかぶり、女の着物

を着て女の仕草をする。此んな世

界を毎日の様に眺め、子供心に不

思議に思いつつも、何時かその妖

しい美しさにひかれる様になりま

した。そして私の女装願望は芽生

え、又、生長致しました。

初めのうちは、美しい芝居の女

形を見る事だけで満足していまし

たが、年が経つに従い、自分も一

度、あんな風に御化粧して美しい

女の着物が着てみたい、と思う様

になりました。確か小学校六年生

の頃だったと思いますが、父は何

時もの通り仕事に行き、母は親類

に不幸が出来、朝から出掛けました。私は一人留守番をする事になり、とうとう日頃の想いが叶えられる時がやって参りました。

早速ガラス戸に全部鍵をかけ、窓幕も閉めて、外来の客の不安を完全に取除くと、天にも昇る心持で鏡台に向いました。御化粧の方法は、何時も母のを見て居るので大体してはおりましたが、何しろ初めての事なので、なかなか思う様にはゆきません。白粉をやたらと白く塗ってしまったら、眉等も何度も書直したりして、それでもやっと一時間程したら、鏡の中に坊主頭の可愛らしい女の顔が微笑んでおりました。頭を風呂敷で包むと、これでもう首から上は完全な女？です。

いよいよ着附です。タンスの引出しを彼方此方と探し廻り、真赤な御腰をやっと見付出して広げる手ももどかしく、躍る胸をおさえ乍ら急いで腰に巻き、胴のくびれ

る程きつく紐を締め付けました。長襦袢は、恰度幸いに母の出掛けの時に着更えた物が衣紋掛に掛けてありましたので、それを着て伊達巻で上からぐっと締めれば、これでもう総て完全な女です。

足にまっわりつくサラリとした絹の肌ざわり、幾本かの細紐、そして巾広の伊達巻でぐっと胸を締め付ける快い圧迫感。私の胸はだんだん高鳴って参りました。

鏡に向って見たり、体をくねらせて女の子が人をぶつ真似をして見たり、又女らしく歩き廻りました。常日頃の願ひ事が全部一度に叶えられた様な喜びで、もう何も彼も忘れてその一刻を過ぎたものでした。それ以来、私はすっかり女装のとりこになってしまったのです。

結 婚

私は顔立ちも女性的で、背丈もどちらかと云えば小さい方で、し

かも細身なので女装には本当に御誂え向きなのです。よく知り合いの小母さんや親しい女友達などに「貴方は女の様な顔をしているから芝居の女形になったらきつと似合うよ」と云われて、からかわれた事もありました。そうした色々な事が私の「女装へき」を益々強めてゆきました。

でもいくら女装はしても所詮は男の身。世の人並の男性として結婚をしました。だがしかし、お祭やお正月等には晴着姿に美しく着飾った若い女性を見る度に、羨望に胸を躍らせ乍らじっと見入ってしまったものです（それは現在でも同じですが）。それは決して顔形にはありません。着ているその美しい着物なのです。

今迄は、いくら欲しくても得る事の出来なかつた高峯の花的存在の美しい衣裳の数々が、自分さえその気になれば、何時でもふんだんに着られる事の出来る条件が揃

つたのですから、これがなんでもまりましよう。恰度猫にかつお節でした。

私は決心して、或る日とうとう妻に告白しました。勿論妻は、初めは非常に驚き即座に反対しました。けれど、私が余りに真剣なので、半ばあきらめの気持と、他の道楽をやられるよりも、事が秘密なだけに外見もよいとでも考えてくれたらしく、いやいや乍ら理解して呉れました（現在では最も良き協力者ですが）。そして私は総ての趣味と生甲斐を女装にかける様になりました。

一旦知られてしまうと急に気が大きくなり、もうその日から多少はてれ乍らも、平気で妻の前でも女装する様になりました。それからの私は、豊富にある派手な妻の衣裳を、今日は洋装又明日は和服にと、毎夜の様に着ては楽しんでおりました。

着物が自由に着られる様になる

とだんだん欲が出て来て、完全に女装がしたくなり、着物だけでは物足らずカツラが欲しくなりました。思い立つともう矢も楯もたまず、浅草のカツラ屋さんで待望の洋髪のカツラを求めました。その時の喜びはたとえ様もありませんでした。鬼の首でも取った様な気持で、カツラをしっかりと胸に抱いて意気揚々と帰ったものです。もうこれで完全な女になる事が出来るのだと思うと、嬉しくて嬉しくてたまらず思わず笑いがこみ上げて来ました。そっと目を閉じて「私はもう女なのよ」と心に叫ぶのも何か実感が伴う想いでした。

新 婚 旅 行

そして又或る時には、倒錯した立場で「新婚旅行」にも参りました。それは今から三年程前の十月も末の事、秋とは云え朝夕は肌寒く、冬景色の信濃路を車窓に眺め乍ら信州は長野の湯田中温泉へ参

りました。

旅の汗を浴槽に流し乍ら、私の心はもうすでに女性になりきっていました。この旅館にサヨナラを云う迄は、私は妻、そして妻は夫なのです。お湯から上ると、乱れ籠の中にはお腰と長襦袢が入っています。目に沁む様な緋の御腰、快よい絹の肌ざわりを楽しみ乍ら身に着け、友禅模様の長襦袢に手を通し、上から伊達巻でぐっと締めれば、もう女としての感情が胸をくすぐります。

鏡台の前に女らしく横座りになり、先ずコールドで下地を作ります。そしてファンデーションを使い透明化粧に致しました。外出をするので目立たない様にごく自然に、そして入念に御化粧を致します。口紅を最後に化粧を終ると、今度は髪のセットです。髪と申しまして、勿論自髪ではありません。前日綺麗にセットして置いた洋髪のカツラを着け、それに自分

の髪を適当にあしらってヘヤーピンで止めるのです。

ウール地の赤に近い燕地色の着物を着て、巾広の名古屋帯をお太鼓に結べば、もう何処から見ても立派な若奥様です。早速「夫」に記念の写真を撮って戴きました。立ったり座ったり、そして又ぐっと色っぽい所などー。

夕食の膳も今日はアベコベで、サロン前掛も初々しい新妻姿の私の御給仕に「夫」も頬をほころばせて嬉しそうです。

日が暮れると化粧直しをして、予じめ女中さんに聞いておいた裏口から、「夫」に寄添ってそっと街に出ました。遠く近く明滅する七色のネオンも湯の香にむせび、流しの引くギターの音も旅情を誘う……。

女性として初めて眺める湯の街は美しくも又ロマンチックなものでした。一寸立寄って見た土産物店、女店員の御世辞や又行交う人

々の投げる視線にも女心の恥らしいを感じ、思わず頬の赤くなるのを覚えました。上気した頬に夜風を氣持よく感じ乍ら、二人は何時の間にか清流のほとりに出ました。

その時恰度私達より五六米離れた後に、これも湯治客らしく一杯氣嫌の二人連が歩いていましたが、周囲に人氣のないのと私達が女の二人連と見てか話しかけて参りました。自分が女性として男に接するのはこれが初めてなので、嬉しいやら心配やらで胸が高鳴りました。それでも、どうやら露見もせず、楽しいスリルを味わいつつ宿へ帰ると、時計はもう十時を指していました。

現在

妻の数ある衣裳も着尽してあきてくると、今度は自分専用の衣裳を作り始めました。そして新調する度に記念の写真を撮りました。今では男物より女の衣類の方が多く、一つのタンスには入りきらな

い程になりました。写真も好きでずい分沢山撮りましたが、もう千枚以上にもなりましょうか。五冊目のアルバムも、もう残り少なくなりました。

現在では、私も社会人である以上、四十六時中という訳には参りませんが、家庭内では殆んど女装で暮しております。夜等はそのままの姿で映画にも参ります。又御正月には御振袖等を着て神詣でも致します。又夏にはワンピースや浴衣姿で夕涼みにも出掛ける時があります。ありますが、何時の時でも外出には細心の注意を払って行きますので、今でも妻以外には誰一人知りません。

これほど女装に憑かれ、女性化に慣れる私でも、世上で話題になっっている性転換、あれだけは仕様とは思いません。本当の女性になりたいとは思いません。何故ならば、私は男性である私を以て女装する事にこそ、こよない喜びを感じるからです……。

長篇SM小説

宇宙のどこかで

— 或る奴隷囚の告白から —

佐 治 麻 造

保管 奴 隷 (十)

息も絶え絶えになって暗房から出された私は、漸く体も恢復した十日ばかり後のこと、又も、飛んでもない事をしでかしてしまいました。

夜、監房に蹴込まれて漸く横になり、フト氣が付きますと、あの精巧な手錠が緩んで、どうした加減か外れかかって居るのです。すぐに申告して締め直して貰えばよかったのですが、何分にも、慣れているとはいえず手錠のない方が楽なので、ついそのまま朝を迎えました。看守達に、発見されなかったのは全く奇蹟でしたが、翌朝直ちに発見されてしまったのは当然のことでした。眠って居て氣

が付かなかったと申し述べ、自ら進んで点呼の際に戒具の異状を申告したのですが、婦人看守の熟練した観察によってばれてしまいました。

「無理ないとは思うけど、規則は規則だからね。重大な反則よ。覚悟はいいだろうね？」

「……お、お赦下さいまし。悪うございました。」

戒護課の婦人職員の前に正座平伏した時は生きた心地もしませんでした。

「けど、こんな事、滅多にないことだわ。ところでお前一体どうしたの？ 昨日今日の新入りとはちがうんだろ。どんな事が許されなしか、よく知ってる筈ね。何故すぐに申告しないのさ。」

「ハ、ハイ。申訳ございません。」

「ま、ともかく痛い目に会ってもらうからね。保管中の奴隷だと云ったからって、容赦しないよ。ええと、お尻と、足裏の計四力所に焼烙を当ててお貰いよ。それから今後、ずっと重腰枷をかけておくからね。」

直ちに懲戒室に連れて行かれました。大きな殺風景なコンクリートに囲まれた薄暗い懲戒室には、嘗て私が裁きを受けるため繋がれて居た拘置所で見たのより、更にいろいろの恐ろしそうな責道具が並んで居ました。壁際に幅一米、長さ五米程で、床より更に二十センチばかり低い部分があり、そのコンクリートの凹所には四個の金具が埋め込んであります。そのうちの二個の金具の上に、二名の懲役囚が壁を背に正座して喘いで居ました。一方は若い女囚です。云う迄もなく後手錠で、頭上に渡された鉄棒に短い鼻鎖を繋がれ、上体をふらふらさせて居ました。よく見ますと、両足首の鉄枷の中央の金具を、床の金具と直接連結されて居るらしいのです。腰枷は鉄のでした。時々水が流れるらしく、床のコンクリートは所々水が溜って居ます。

「……も、もう……お赦し下さいまし。決して正座を崩しませんから。お慈悲でお願いします。」

女囚は短い鼻鎖の長さ一杯に身もだえして哀願しました。正座を崩した罰を受けて居るのです。床を水洗いする仕掛のあることから考えますと、随分長い間こうさせておくらしく、男囚の方は口から泡を吹いて、うなだれたままでした。

「あら、こっちの男、未だ居たのね。長いじゃないの？」

「今日で確か五日目よ。まだ二日あるわ。女囚の方は昨日坐らせて

やったばかりよ。ちょっと、三十八号。お前は百時間だろ。まだ三日間はたっぷりあるわよ。ホホホ」

女囚は、鉄の腰枷でガッシリと床に固定された体を僅かによじつて泣き出しました。

「フ、フ、フ、懲役は辛いものと昔から決ってるじゃないの。お前がちゃんと座って居ないからさ。誰のせいでもないよ、お前が悪いのさ。ホホホ」

「……お、お慈悲です。どんな労役でもさせて頂きます。立たせて下さいまし。せめて、せめて中腰にでも……させて……」

「フ、フ、フ、そんなに苦しいかい。だったら自分でお立ちよ。その床の金具は鍵かけてないのよ。指一本で外れる様になってるわ。」

「あなた。遊んでないで、さっさと仕事しましょうよ。八〇三号。此の台の上に膝をついて。そうそう。そして上体を前に倒して。」

私の両足首が台上に固定され、膝をついて鼻環も台上の金具に連結して留められました。後手錠は首環に吊上げられ締めつけられた鎖帯の中央の金具が、何かにカチリと連結されます。顔を台上に押付けた私の頭上に立った柱から、水平に延びた腕木の端に設けられた鉄棒が、垂直に滑り動く様になって居ります。丁度ボール盤の様なもの、垂直棒の下端が私の鎖帯の金具をくわえたまま上方に滑り、しっかりと固定されました。両足の拇指の付根にも小さな鉄環が嵌められて、足裏を上向けたまま台上に固定されてしまします。

「アラ、嵌口具を忘れたわね。」

「いいじゃないの、いくら喚いたって……。」

「電気鰻のスイッチも未だだったわ。どうかしてるわ。」

鰻が熱くなるのを待つ間の恐ろしさ。婦人看守は、まだ哀願をや

めない坐り繫ぎの女囚に、鞭を当てて暇をつぶして居ました。

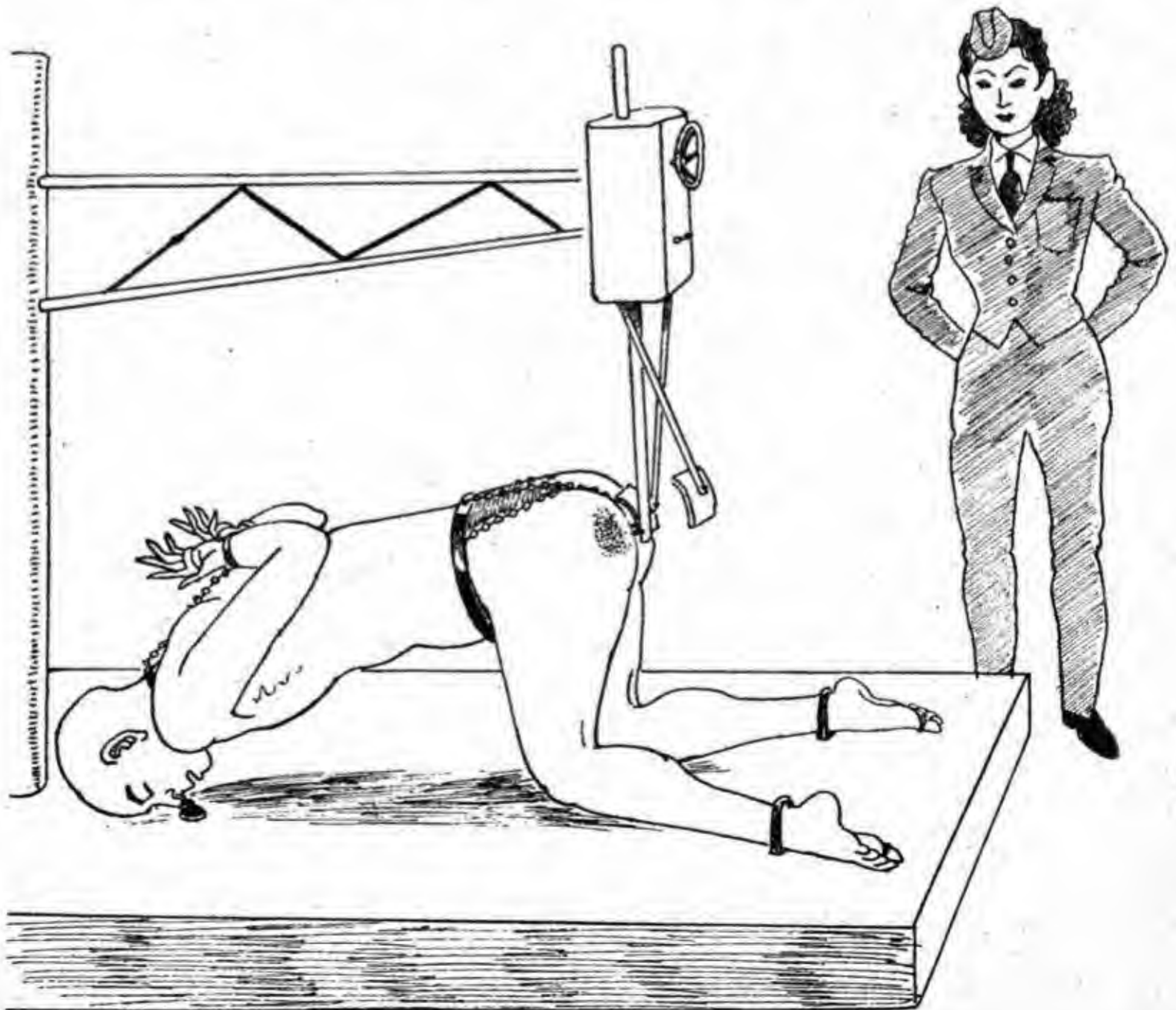
「もういいわね。八〇三号、鰻を当てるわよ。」

ボタンを押された非情な機械は、熱い電気鰻をジリと押し下げて来ます。放射する熱線が次第に強まるのが判り、私は喰い込む鎖の痛みもものかわ、訳の分らぬ喚きを上げて、宙に固定されたお尻を必死に動かそうと致しました。ジュッと云う音が体内を伝って耳に聞え、私は苦痛に絶叫しました。規定の温度の熱を、規定の時間だけ当てた鰻は漸く離れました。喘ぎと凝れが止まらないうちに、更に今度は左が焼かれます。鰻が当てられて居るのは極く短い時間なのでしようが、当てられて居る身に取っては、永い永い時間の様に思える数秒間でした。

「フ、フ、フ、舌嚙まなかったかしら？ この脂汗!! お前、未だ済まないのよ。今度は足の裏。」

婦人看守は私の哀訴嘆願の声を聞き乍ら、携帯用の小さな電気鰻で私の両足裏を次々と焼きました。どうしても力一杯もがきますので、足の拇指の付根の千切れそうな痛みと共に、突き上げて来る焼灼の苦痛に、体がバラバラになってしまいそうでした。暫く放置された私は、そのままの姿勢で呻きに呻くばかりでしたが、タッパーと塗られた治癒促進剤の強烈な刺激に、再び脂汗を絞って絶叫しました。

「凄い声ねえ。そんなに痛いかえ。」



漸く台上から解かれた私は、思わず恨めしげに婦人看守達を仰ぎ見ました。鞭を食って立たされ、焼かれたばかりの足裏の痛みに、爪先立ちしたままで、鋼鉄の腰枷と、四角の大きな環が中央にある鎖褌に替えられ、鼻環を引かれました。爪先歩きに堪え兼ねて思わず足裏をつけますと、途端に飛び上ってしまいそうでしたが、婦人看守は容赦なく鼻繩を引摺って戸外に連れ出し、重い鉄丸を両足に繋いで前手錠にして嵌口具を締め上げてしまい、無慈悲にも砂利道の掃除を命じるのでした。朝の餌抜きの腹がグーと鳴り、咽喉はカラカラで、我が身の哀れさ加減に涙が頬を伝いましたが、婦人看守は脚を挙げて私を蹴り倒し、呻く私を尻眼に

「さてと、お茶でも淹れて飲みましょうか」

二人の若い婦人看守はさっさと立去ってしまったのでした。

それから四五日の間と云うものは、立てば足裏に、坐れば尻に、針の束でも突き刺される様な苦痛に呻くのでした。もとよりそんな事は斟酌等して貰える筈もなく、次から次に雑用を命じられ、そして又、身動き一つ許されない正座をさせられます。もう外されな

いとなると、制式の鉄腰枷や鎖褌も骨身にこたえました。十日程経って焼燙の痕の痛みも薄らいだ頃、見物室の床を磨いて居りますと一名の懲役囚が曳かれてやって来ました。年の頃は四十前後の男で体に刷られた二七八号の赤い番号の字も未だ新しい様です。床に埋め込んだ二十センチ程の太い鎖の上に正座させられ、床の鎖が足鎖の内側を通して腰枷の真中の金具に連結され、嵌口具を外されませんでした。上体を前に倒しますと丁度鼻の位置に鼻環を繋ぐ金具が埋め込んであります。

「だ、だれが……見に来るのでございましょうか。」

二七八号は顔を床に押し当てて、無念そうに訊ねました。

「誰でもいいじゃないの。もうすぐ判ることよ。フ、フ、フ。これ、八〇三号。お前は隅の方で眼障りにならない様に坐っといで。」

やがて入って来たのは男女の二人連れで、三十過ぎの婦人と同年輩の男でした。

「これらしいね。」

「ええ、けど変り果てた姿ねえ。体に番号刷られて、鉄の鎖で縛られて。あの鞭の痕、どうお。」

声を聞いた囚人は異様な声を挙げて身もだえしました。ペダルが踏まれ、鼻環の金具が外れましたが、彼は低く唸ったまま顔を上げようとしません。革鞭が鳴り、堪えかねた彼はヒューヒュー云い乍ら身を起しました。

「ちゃんと坐って。顔を起してるのよ。」

婦人看守は鼻環に捕縄をつけて、グイと上方へ引き起します。

「ホホホホ、鼻があんなにゆがんじゃって……」

涙をポロポロこぼした彼は何か喚きかけましたが、胸をビシリと鞭打たれて悲鳴を上げました。

「さ、罪名と刑期と番号を申上げて。泣いてばかり居ちゃ駄目じゃないの。痛い目に会いたいの？」

鼻繩を乱暴に揺ぶられて、彼はヒューヒュー身もだえしました。

「……申、申し上げます……ヒュー……殺人未遂及び傷害罪……懲……」

……懲役二十八年……二七八号……でございます。ウツ、ヒュー」

「そうお。二十八年も監獄に入れられるのねえ。可哀想なこと。」

婦人は彼を見下ろして、眉をひそめて見せました。

「けど考えて見れば、お前は私を殺そうとしたんだろ。間違って射

たれた女中の事を考えてごらんよ。可哀想に、命は助かったけど不具になったのよ。退院したら見物に来るって云ってたけど……」

二七八号囚は身をもんで、繋いだ鎖をガチャガチャ鳴らせました。

「じつと出来ないの？」

振上げられた鞭の氣配に、彼はビクッと体を震わせました。

「ホホホホ。それでね、私だって自分を殺そうとした男をさ、二十八年も三十年も待ってられないからね、離婚手続済ませたわよ。法律によれば、お前の財産の三分の二は貰えるんですって。有難く頂戴するわ。ホホホホ、それで、今の私の夫は此の人よ。知ってるかしら？」

「……くそっ。こ、この売女め!! さんざん間男しやがって……その挙句……こ、こんな……く、くやしい……まんまとその間男とくつつきやがって……俺は口惜しくて、口惜しくて……」

二七八号囚は、バリバリ歯がみをし、とうとう余りの無念さに逆上したのでしょうか、大声で喚き乍ら立ち上ろうと腰を浮かせかけました。途端に、床に埋込んだ鎖がガチャッと鳴ってピンと張り、彼の腰枷を押えつけ、バランスを失った彼は横に滑って痛さに呻きました。

「ホホホホ。立てないの? 何か鎖の音がした様ねえ」

「此奴のお尻はね、床に繋がれて居るのさ。ハハハハ」
連れの男が嘲笑しました。

「ああ、そうなの。道理でねえ。じゃ安心だわ。」

婦人は二七八号囚の背後に回って見て吹き出しました。

「これじゃ立てっこないわねえ。ああ、おかしい……」

「これっ。一体何をしようとしたの? 馬鹿!!」

鼻繩が低く下方に引下げられ、もう一人の婦人看守が背中に鞭を三つ四つ当てて叱りつけました。

「ね、看守さん。鞭を貸して下さらない？」

「それはちょっと……。規則では禁ぜられてるんですけど。」

婦人看守は、流石に少し哀れを感じたものの、珍らしく規則を盾に断りましたが、婦人が手早く何かをそっと渡しますと

「じゃ、ほんの少しにしといて下さいよ。」

と、革鞭を渡してしまいました。

自分を裏切った憎い女の手で散々鞭打たれた彼は、無念の形相も物凄く、悶え抜いて呻くのでした。

「そんなに腕をもがくと手首が後で痛いわよ。そら、ちっと体を斜に倒さないと鞭を当て難いじゃないの。」

鼻繩に引かれて上体を伸ばして前に倒し、背中に鞭を浴び乍ら、哀れな男は、婦人看守の手に握られて居る鼻繩を恨めしそうな眼で睨みつけて、ヒィヒィと号泣してしまふのでした。

「ああ、少しはスツとしたわ。鞭、有難う。そのうちに奴隷になつて出て来たらうんと鞭を当てて上げるからね。ホホホホ。さ、あなた、行きましょうよ。」

「二七八号。鞭迄頂いて、見物して下さったのにお礼を云わないのかい？」

鋭い声を浴びせられた囚人は、それこそ血を吐く様な声でお礼の言葉をいい、男泣きに嚙り泣きを始めました。

「お前さん。外へ出たい事だろうねえ、可哀想に。けど仕方ないわね、悪いことしたんだものね。もう用は済んだから檻の中にブチ込んでお貰いよ。」

婦人は男と腕を組み、入口の所で振返って嘲けりました。鎖を再びガツと引張った二七八号囚は足に力をこめて腰を浮かせ、オイオイ号泣し乍らのうち回って、立去る二人の後姿を恨みをこめて見送りました。如何にもがいた所で床に彼の体を繋いだ鉄鎖が切れる筈はなく、やがてもがくのをやめた彼は、鎖をガチャリと鳴らして腰を落し、床に打伏して体を震わせ乍ら、低く低く何か呟いては噎り泣きを続けるのでした。

「少し可哀想だったわね。」

「ええ、此の男の云う事が本当だったかも知れないわねえ。けれど密通の証拠がないんだもの、仕方ないわ。」

「あら、其の証拠があったって、女中を誤まって射った罪は免れないわよ。」

「そりゃそうだけど、大分刑が軽くなった筈よ。まあ、そんな事今さら云った所で何にもならないけどさ。八〇三号。此の男を床から解いておやり」

私は、床の鎖の先についた金具のスプリングを指先で押えて、鎖から解いてやり乍ら、本当に我身につまされてしまいました。

ふと見ますと、後手に腰枷に固定された彼の両手首は、鉄の手錠にすれて痛められ、皮が破れて血が滲み流れて居り、どんなに彼がままならぬ両手を切なくもがいた事か、よく分りました。

「さ、おいで。もう諦めて、泣くのはおやめよ。」

鼻繩を曳かれれば嫌も応もなく立ち上って歩くよりありません。足の鎖の音と低い哭声とが入り混って去って行きました。

保管 奴隷 (十一)

知らない間に女奴隷八〇四号も引取られて出て行き、私が拘置所に保管されてから五カ月近く経ちました。勿論所有者の都合次第でいつ引取られようとも、又いつ迄預けて置かれようとも致方はなくいつ引き取ってもらえるのか私に分る筈はありませんし、その日が来る迄、ただ神妙に懲役囚並みの扱いを受けて呻吟して居る外ない訳ですが、余り長いので、このまま監獄に送られてしまふ様な氣がして、独房の中で心細さに震える夜もありました。昼間、監獄に送られる男女の既決囚達が、恐ろしい第四種手錠足錠を嵌められ、罪石を背負わされ、太い鉄鎖で数珠繋ぎにされて喘ぎ喘ぎ追立てられて行く有様を見たせいでしょうか。今夜も自分が其の中に混って曳かれて行く夢を見て、泣き乍ら眼を覚めました。ホッとして「何卒、一日でも早く引取って下さいまし。どんな事でもさせて頂きます。奥様。お願いです」

と、心の中で哀願し乍ら再び眠りに入ったのでした。「八〇三号。都合で奴隷管理所へ移送して、そこで保管して貰うことになったからそう思え。」

或日の午後、少し離れた奴隷管理所へ送られました。拘置所の門を出ますと、少しでも監獄から遠ざかった様な氣がして安心しました。

今となつては恋しくて堪らなく思うあのお妾さん、いや御主人様の姿が、ひよっとして見えはしないかと、キョロキョロしては鞭を当てられ、鎖をしやくられて街を曳かれました。

債務犯審判所と同じ構内に在る奴隷管理所に着き、品物同然に引き渡された私は、拘置所からの鎖錠のまま、唯、前手錠にさせられただけで、直ちに労役に追いつて立てられました。保管中の奴隷も数名

は居る様ですが、傍で数えて呉れる仲間も居ませんし、初めての所ですから全く間誤間誤し続けました。人々は私が如何に困ろうが意にも介せず、面倒臭そうに用を怒鳴りつけて、氣に入らないと足蹴と鞭です。何にも知らない新米なので、もう少し詳しく命じて呉れたなら、どんな仕事でも骨身惜まずやるものと、利けぬ口を口惜しく思いました。

「いつ迄、その掃除ばかりしてるのさ。もういいから、債務犯監房へ行って食事を配っておいで。」

そう云われても、一体どこに何があるのやらさっぱり分らず、途方に暮れて、手錠の両手を合掌して哀願の眼差しで仰ぐだけです。

「……さっき教えただろ。ともかくさっさと行くんだよ。ほんやり突立ってないで……。」

債務犯審判所の入口の辺りで、体にS印を刷られた男を見付けてホッとしました。建物の片隅の薄暗い調理場ではS印の保管女奴隷達四名が立ち働いて居ました。債務犯達に与える食事は、粗末乍らも人間並のもので、嚴重に嵌口された女奴隷達は、一人の婦人職員に監督され乍ら鎖を鳴らせて汗を流して居ります。

「今夜は二十五名だよ。早く盛付けおしよ。」

プラスチックの大きな盆の上に、女奴隷達が手錠の両手で握った握飯数個、漬物、そして何やらお菜らしいものと湯呑茶碗がおかれて行きました。私達二名の男奴隷も手伝って、地下の債務犯監房に運びます。階段があつて運搬車が使えないので三、四コを重ねて持っていくのですが、お盆の上の物を見て、羨ましくて涎れが出る程でした。

「お前、新米だね。ひっくり返したりしてごらん、二、三日は軽く

絶食だよ。」

薄暗い階段を、積重ねたお盆を捧げて降りる私に、婦人職員は冷く云いました。

地下の債務犯監房区画は割合に明るく照明されて居り、入口の監視席から見て両側と向側とに約四十程の独房が「コ」の字型に並んで居ます。各独房は一米半に奥行三米程で、鉄格子の開き戸があり更に各独房の前から幅二米程の通路を作って、別の鉄柵が矢張りコの字型に床から天井迄ずっと設けられて居ります。独房の中には粗末乍らもベッドがあり、囚人達もそれぞれ私服を着て、勝手な姿勢を取って居ました。矢張り男の方が多いのは勿論でしたが、婦人も五、六名は居ます。

鉄柵の内側の通路を歩き来して、二十五名の囚人達の房にお盆と湯の入った小さい薬罐とを配って歩きました。彼等は皆、深刻な顔で考え込んだり、鉛筆を舐め舐め必死の面持ちで何か書いたりして居ました。婦人達は私達の姿を見るとショックを受けるのでしょうか、顔を手で掩ったり、オロオロしたりして居ます。洋装の婦人は未だいいのですが、和服の婦人などは帯紐類を取上げられて居ますので、涙を押え乍らも片手では棲の辺りを押えて居る姿は、本当に哀れでした。

債権者が必要と認めて審判所に申請しますと、直ちに調査がなされ、債務者の全財産を処分しても未だ不足だと認定されますと、直ちに仮処分を執行されて、債務者の身柄はここに拘束される訳です。そして財産を競売された結果、なお不足だと決まれば奴隷にされて自分の体で債務を償わねばなりません。奴隷の身にされる前に一カ月の猶予期間があつて、其の期間中は手紙や面会によって知人等

に最後の助けを嘆願することが許されて居るのです。其の期間も過ぎると愈々人格を剝奪され、債務額によって最低一カ年、最高三十年の奴隷刑を一方的に宣告され、番号を体に刷られて登録を受け、鎖錠を施されて人間の社会から突き落されねばならないのです。

「あの、未だ手紙は来ませんか？」

「面会人はありませんか？」



げて頼んだって無駄よ。」

監視席の婦人がやって来て

「此の男はね、もうあと五日程しかないのよ。朝から晩迄私達を見さえすれば同じ事ばかり云ってるの。やれ何とかさんはよく知ってるとか、何とかの会社の社長は私が行って頼めば必ず何とかして呉れる筈だとか、うるさくて仕方ないわ。お前さん、これ以上うるさ

奴隷の身に蹴落される日

を目前にした彼等は、婦人職員の姿を見ますと食事もそっちのけにして、鉄格子を握りしめて、必死の表情で口々に訊ねるのでした。

「うるさいわね。私はその方の係りじゃないのよ。もう食事は要らないの？ だったら下げさせるわよ。」

一人の中年の男が、鉄格子を揺すぶって

「一日だけ、いや五時間……いや三時間でいいから出して下さい。そしたら、必ず都合つけますから。お願いです」

「お前、まだそんなこと云ってるの？ 何百回頭を下

くしたら、これ嵌めるからね。いい？」

婦人職員は、席から持ってきた頑丈なU字型手錠を彼に見せ、私の嵌口具を指で弾いて嘲けりました。

「これを後手に嵌めたら手紙も書けなくなるわよ。もう諦らめて書く氣ないの？」

男は鉄格子に顔を押し当てて、嗚咽しました。

「けど、どうせ踏倒すなら、大きく借金した方が得ね。いくら多くても刑は三十年止まりでしょ」

「そうよ。そして、刑が済めばそれで御破算だし……。借りて隠しとけばいいのよ」

「あら、でもそれがバレたら、今度は監獄行きでしょう？ けど中にはそんなのあるでしょうねえ。分り難いものね。さ、お前達、早く食器を集めて回るのよ。」

私達保管奴隷の檻は、奴隷管理所の地下にありました。鉄格子で廊下と遮ぎられた細長いコンクリートの室で、鉄格子に向い合った壁には二米おき位に床から三十センチ程上方に鉄環が埋め込まれ、三、四十センチの鎖が垂れて居ました。壁から十センチ程離れた床を、溝がずっと走って居ます。溝の巾は十センチ足らず、深さはかなり深い様で底を水が流れて居る様でした。

債務犯達の食器を始末し、残飯を恨めしく捨てて、ドロドロの餌を当てがわれて喰った私達は、一しきり雑用させられた後、檻に追いつ込まれて壁の鉄環の鎖に鼻環を繋がれました。檻の室の長さは大分長くて、私達六名が一個おきに繋がれても、鉄環はまだかなり余って居ました。外された嵌口具と手の鎖を頭上の鉤に吊り、壁の鎖の先の茄子環を自分の鼻環にカチリと嵌めた私達は、両手を後手錠

にして検査を受けます。

「横になっていいわ」

ガチャーンと鉄格子が閉められて施錠されました。横になりますと、伸ばした足先が鉄格子に辛うじて触れる位です。私は六名の一番端に繋がれ、隣りはS八〇二号の男でした。

「アーア、今日も暮れたか。味氣ねえなあ。」

彼は額に垂れた鼻鎖をうるさそうに除け乍ら溜息をつきました。

「俺、ここは初めてなんだ。教えて呉れよ。」

「分ってるよ。ま、直ぐ慣れるさ。」

頭上の排水溝の中を、水が一しきり激しく流れました。

「フ、フ、フ、覗いたって駄目さ。深くて狭くて、どんな長い首でもとても届きやしないよ。おい、それよりもな、俺いつも考えてるんだが、此の鼻の茄子環は足の指でも外れるぜ。今は一つおきに繋いでやがるから駄目だけど、隣り同志の鉄環に繋がれてるんなら足の先が隣りの奴の鼻に充分届かあな。」

云われて見れば成程その通りでしたが、そんなことして何になりましょう。

「外してどうするんだい。」

「へへへ、まあ、話がだよ。俺もそんな事しようなんて思わねえけどさ。そんな事でも考えてなきや、何の楽しみもねえからよ。けどお前が来て呉れて助かるぜ。何、拘留所に居たって？ そうか、運が悪い奴だな。俺なんか初めからここさ。何？ 檻がずい分大きいって？ これはな、奴隷におなり遊ばした方達がな、売先の決まる迄二、三日御逗留なされる様に出来てるのさ。なあに、御用商人の奴隷屋達が談合しては安く落して引取って行くから、五日と溜ま

る事はないさね。」

向うの端から二人目の女奴隷が、ももぞと身を起し、膝でいざって壁際に行つて、壁に背をつきました。鼻鎖のため、上体を横にねじって倒したまま、大きな吐息をつきます。

「おや、おめえどうしたんだ？ 又鎖を締められてさ、腰枷も鉄のにされてるじゃねえか。」

八〇二号が寝返りを打って云いました。

「又、こんなにされてしもうてん。つい此の間堪忍して貰うて外されたばかりやのになあ。今日な、事務所の床、雑巾掛けてた時に、ホラ登録係の眼鏡かけた娘居るやろ。あの娘の机の角にちよつと当ってん。そしたら又これや。」

「可哀想に。こたえるだらうな。」

「真中の環が四角で大きいやろ。ちよつと辛いで。ギユツ、ガチガチと鉄の帯締め込まれて、カチカチと二本の鎖がついて、ギューツ、カチツと音がしたら、それでもうしまいや。いつ迄締められてないかんのやろかって訊いても、教えて呉れはらへん。」

彼女は人の好きそうな顔に、悲しげな薄笑いを浮べてました。

「あんた達喧ましいわねえ。静かにしてよ。ねられないじゃないの」
一人の女奴隷が叱りつける様に云いました。

翌日の午さがりのこと、命じられた私が、債務犯監房区画の監視席の横に正座して、当番の婦人職員をうちわで煽いで居ますと、一組の男女が二名の婦人職員にそれぞれ連れられて入って来ました。男は四十五、六の背広姿、女の方は三十五、六の上品なワンピース姿です。それぞれの右手首には黒い革バンドが巻き付き、バンドの両端についた短い木の棒を、職員がそれぞれ左手でしっかりと握り

締めて居ます。ズボンのバンドを取上げられて居る男は左手でずり落ちない様に持ったまま、若い小太りな婦人職員に右手を引かれ、ワンピースの婦人と並んで机の前に立ってうなだれました。

「えーと、十五号と十八号ね。ちよつと手を出してごらん」

差出した彼等の手の甲には既に番号が青黒くスタンプされてありました。婦人は私を見てハッとよろめいた模様です。

「さ、おいで」

手首に巻かれた革バンドの握りを邪慳に引張られて、よろめき乍ら彼等は鉄格子の内側の通路に引摺られました。婦人は近くの空房へ突き入れられ、男は更に遠くの方へ曳かれて行きました。彼等は夫婦らしく、男は引張られ乍ら振向いて何か云い掛けましたが、既に婦人の房の格子扉はガチャンと閉まったあとです。

「お、お前……」

妻の名を悲痛な声で呼ぶ彼に激しいピンタが飛び、やがてガチャンと鉄扉の閉まる音、そして非情な施錠の音が冷たく響きました。

「今日は面会人があるらしいわよ。」

両端に握りのついた短い革バンドをぶらぶら回し乍ら、二人の婦人職員はそう云って出て行きました。監視席の婦人は時々椅子から離れて見回ります。その時は手を休めることが出来ますが、それ以外は煽ぎ続けねばなりません。

「手がだるいかい？ じゃ、房の前を這ってずっと回っておいで。奴隷の姿を皆によく見せてやるのよ。」

鎖を鳴らせ、鼻繩を取られて房の前を四つ這って通る私の姿の浅間しさに、房内の男女は眼をそむけて居ました。

やがて相次いで二人の面会人がやって来て、二重の鉄格子を隔て

て囚人と話しをします。一人はデブブリ肥えた紳士風の男、一人は蒼ざめ切った中年の婦人でした。

「……やっぱり駄目よ、あなた。もうこれでどこも頼むところないわ……どうするの？」

最後の望みの糸も切れたらしい婦人は、鉄柵の棒にしがみついて房内の夫を泣き乍ら見ました。泣声の混った悲しそうな会話が断続します。肥えた紳士の方は葉巻をくゆらせ乍ら、必死にくどく房内の男に引導を渡して居る様でした。

「ま、兎も角、裏付けのない話は御免蒙るよ。あんたとは、あんたのお父さんの時からの取引だし、一度、会ってだけは上げようと思つてやつて来たんだが。まあ、せいせい二十年程辛抱して来るんだな。又いずれ御力になって差上げる時も来るだろうて。じや……」房内の男泣きを後に、紳士は監視席の机上に何かおいて出て行きました。

「もう話しは済んだの？ 早くおしよ。いつ迄泣いてたつて仕様ないわ。」

眼を泣き腫らせた婦人はよろよろと歩み去りました。紳士の置いて行つた食べ物の包はそのまま机にしまい込まれ、囚人には一かけらも与えられなかった様でした。

十日程経つた或日の午後
「これを持ってお行き」

と、五個の手錠を監房区画へ運ばされました。太い角棒がU字型に曲がり、頑丈な蓋の部分が開閉する様につけられた二個の鉄環が三コの鎖の環で連結されたもので、ずしりと重く、黒々と光って居ました。数人の係官もやつて来て、五名の囚人が房から曳き出され

監視席の大きな机の前に並びます。男三名、女二名、何れも憔悴し切った顔で、肩を寄せ合つて立ちすくみましたが、机の上に並べられた五個の手錠を見て体を震わせ、婦人達は激しく嘔り上げました。「お前達五名は、何れも昨日迄に猶予期間が切れた。一番古い者は十日以上も前に切れて居る。これから奴隷刑期を言渡して頂いて登録を受けに行くんだ。皆、両手を揃えて前に出せ。まごまごすると蹴倒すぞ。」

五名の男女は涙を流し乍ら、おずおずと両手を差出して手錠を待ちました。眼の少し吊上つた様な婦人職員が、手の甲の番号をチェックしては、順々に手錠を嵌めて行きます。諦めては居るのでしようが、それでも冷たい鋼鉄が手首に触った途端、呻いて手を引込めた男が、猛烈なビンタを喰いました。二人の女囚に嵌められた手錠のU字型環の先のギザギザは、かなり飛び出して居て手首の細さを示して居ます。

「……ああ……冷たくて……重いわ……」

ギリギリと錠がギザギザを噛んで締め込まれた鋼鉄の環が、もう手首から脱けない事を、両手を動かして確認した大柄な和服の婦人は悲しそうに呟いて、自分の両手首に黒々と光る手錠に見入って、不自由そうに眼頭を押えました。彼女の両足にはいて居る小さな目キチツとした白足袋は薄黒く汚れ、五ツこはせの上の方は千切れて居ました。

手錠の味を噛みしめ乍ら、心も張裂けんばかりの五名の男女の側に、更に一人の男が曳き出されて来しました。

「十二号。お前は釈放だ。助けて下さった方があったらしいな。手のスタンプを消して頂いて出て行け。そら、この書類を持って執行

課へ行くんだ。」

「あ、ありがとうございます。」

男は雀躍りして階段を昇って行きました。

囚人達から、身を切る様な羨望の吐息が洩れ、嗚咽が激しくなりました。悄然と追われて行く彼等と階段の所で別れた私は、何だか可哀想な様な、愉快な様な妙な氣持でした。

保管奴隷(十二)

其の夜、私達六名の保管奴隷が檻の鉄環に鼻を繋がれて暫くしますと、ヒューヒュー云う泣き声と鎖の音を立て乍ら五名の奴隷が追い込まれて来ました。今日奴隷の姿にされたばかりの連中で、真新しい鼻環と首環が鈍く光り、後手錠と足錠だけを嵌められて居ます。手錠は、さっきの黒いU字型手錠で足錠も同じ様な構造です。足枷のU字環を繋ぐ鎖も黒々とした太い四十センチ程のもので、腰枷もなく、足鎖も吊られないで床に引摺って居ました。浅間しい哀れな姿



にされてからずっと正座させられて居たらしく、五名共まともには

歩けないで、喘ぎ喘ぎ追い立てられて壁の鉄鎖に鼻環を繋がれました。私の隣から向うの繋ぎ鎖が全部ふさがります。私のすぐ隣りは大柄な女奴隷でした。

「好きな姿勢をしていいよ。もう……」

職員達は鉄格子に施錠して立ち去り、新米達は申し合わせた様に鼻から壁に延びる短い鎖を見入って慟哭するのでした。

「そんな恰好でうずくまって居ても仕方がない。横になったら?。」

私は、隣でいつ迄も噁り泣く女奴隷に声を掛けました。

「もう、恥かしがって居ても始まらないよ。早く慣れる様にしなけりや自分の損だよ。」

青々とした彼女の頭、そして額、背、胸に鮮かに刷り込まれた登録番号を見やり乍ら私は云ってやりました。背や胸の上部には、既に鞭の痕が赤く数条走って居ました。

「……え……ええ。ありがと。けど悲しいわ。情けないわ、こんな恰好にされて。こんなにして十五年間も過ごさなきゃならないのねえ。泣いても笑っても、もう……」

語尾は噁り泣きに消えます。

「……もう人間じゃないのね。ああ、此の首環の冷たいこと……」

「……」

「……私ね、お店してたのよ。バーのマダム。借金して拡張したんだけど、うまく行かなくて。担保は充分あってお釣が来ると思ってたのに。競売されると半分以下の値しかないのねえ。ひどいものよ。」

彼女はとうとう諦めた様に横になりました。

「あら、こんな……後手に括られて、どうして寝れるの? ああ夜も外して呉れないなんて。アッ、ヒー……鼻が干切れそう……」

「私を見てごらんよ。脇の下にもこんな鎖を締められてるんだぜ。あんたのなんか楽なもんさ。其の手錠なら少しは融通がつくし。」

「……でも、私、今日が初めてなのよ。ああ痒い。痒い所も搔けないのね、もう。さっきは犬みたいにして糊みたいなのを噁らされたわ。咽喉を通らなかつたけど、これからはあれしか当てがって貰えないのね。」

「そうさ。その中に慣れておいしくなるよ。」

私は毎日運ばされた食事を思い浮べて胸がスツとしました。

「……でも、こんな恰好、世間の人達に見られたらどうしようかしら。店に居た女の子にでも見られたら……死んだ方がましだわ。」

「鼻環嵌められた時、注射されたろ。自殺なんてとても出来やしないさ。今に分るよ。」

「ほんと? けどこれからのこと考えると気が狂いそうだわ。ああ切ない。此の手錠、いくらもがいても駄目ね。手足の骨に食い入る様だわ。簡単にひとの手足に嵌めてしまうけど、ほんとに残酷な道具ねえ。」

「まあ、一生懸命に勤めて、懲役にやられない様にするんだなあ。

監獄は辛いぜ。それこそ地獄さ。」

「ああ、まだ監獄ってところがあるのね。ヒーッ、ウッ、鞭の痕が床にすれて痛いわ。」

彼女は身をよじって呻きました。

「何と云うことなしに鞭でぶつのよ。小便臭い娘に鞭当てられて、足で蹴られて、そしてお礼迄云わされたわ。胸が煮えくり返ったけど、どうすることも出来ないのねえ。けど鞭ってほんとに痛いものね。これからはいくら鞭打たれたって文句一つ云うことも出来ない

と思うと……」

「鞭位いは日常茶飯時のことだよ。そのうち、鞭で済めば嬉し涙が出る様になるぜ。」

いろいろと私の話を聞いた女奴隷は、身を震わせてわななきました。

私は寝入ってしまいましたが、元マダムの女奴隷はもとより、五名の新米達は鼻鎖をチャラチャラ鳴らせて、寝返りを打って呻いたり、耐え切れずに起き上っては喘いだりして、殆んど眠らなかつた様でした。朝が来ると鉄格子の開く音にはね起きます。ぐずぐずして居る奴隷には鞭が鳴って、壁に向い正座した私達十一名は点呼を受けました。登録番号を忘れた新米奴隷の背には、高らかな鞭の音が三つ四つ鳴り響き、男も女もヒューと泣き喚きました。後手錠をカチリカチリと解かれた私は両手の枷を前で繋ぎ、鼻環の茄子環を指で外して、餌を取りに行きました。今朝の食事当番は私なので、バケツで運んで来たドロドロの囚人食を、隅に積重ねてある容器の印の線迄注ぎ、十名の奴隷達の膝の前へ運んでやりました。

「さ、啜っていいわよ。」

婦人職員の声に、私も足許で手を床について啜り乍ら見ますと、新米達は未だ咽喉を通らない様子で、鼻鎖を容器の縁に鳴らせ乍ら声を忍んで泣いて居ります。

「……み、水を……お水を貰えないのでしょうか？」

元マダムの女奴隷が、異臭に耐えかねて顔をそむけ乍ら泣声で訴えました。婦人職員は黙って鞭の返事を与え、後頭部をスリッパで踏みつけて、女奴隷の顔を容器の中に押当てて低く嘲笑しました。

「嫌なら、別に食べなくてもいいのよ。フ、フ、フ。」

最初は誰でもあんな風なもので、重くきびしい鎖錠のままで苦

役に喘ぎ苦しんだ挙句、与えられるのは矢張り囚人食だけだと云うことを身に沁みて教えられ、そして咽喉が焼きつき、腹の皮が背中にひっつきそうになった末、哭き乍ら啜る様になるのです。婦人職員に顎でしゃくられた私は、隅の水道で集めた容器を洗います。他の保管奴隷達五名は、後手を解かれた両手の枷を前で二十センチに繋ぎ合わせ、鼻環の茄子環を外し、壁に吊るした嵌口具をそれぞれ口にくわえて、次々と締められてゆきました。

「新米達は、午前中はそのまま正座よ。午後、三、四時間訓練して絞ってやるからね。」

私の口も嵌口具で締め上げられ、労役に追い立てられました。婦人職員は床を鞭で叩き乍ら、新米達の正座姿勢を見回します。彼等の両足首のU字環の端は、蓋からかなり飛び出してギザギザの歯が見えて居り、それが踵側になる様になら未だしも、足の甲の側の外側に来る様に嵌められて居るのですから、足首が浮いてとても座り辛そうでした。

「……お、お役人様。此の手錠は外して頂けないのでしょうか？」

お、お願いです……」

「そうですね。お願い。少しの間でいいから外して下さいまし。もう痛くて、切なくて……腕がだるくてもげてしまいそうなんです。」

「何だって!! よしよし。そんなにだるいのならこうしといてやろうね。」

婦人職員は捕縄を取出し、今哀願の声を上げた二名の奴隷の後手錠を、思い切り首環に吊り上げてしまいました。

「正座を崩すとどんな目に合うか、略々分って居るだろうね。お前

達はさっさと出て労役をするのよ。」

後手を吊上げられた奴隷の呻きを後に、私達を追い立て乍ら婦人職員は

「新米の性根を入れ替えるのは骨だわねえ。お前達、よく教えておやりよ。彼奴達はもう三、四日ここに居る筈だから。」
と云いました。

午後、奴隷管理所の庭を掃いて居ますと、新米の奴隷達が曳かれて来ました。後手錠、足錠は勿論そのまま、更に革の腰枷と鎖褌を施されて居ます。庭は鉄柵越しに道路から見える訳で、屈辱にもがく彼等は、容赦なく曳かれる鼻繩の痛さにヒューヒュー喚き乍ら庭の真中に崩折れて動哭しました。容赦なく炸裂する鞭によるよろと立ち上ってすくんで居ます。五名共皆、後手錠を首環にグイと吊られ、苦痛に呻きました。

「お前達をこれから訓練してやる。よく聞け。お前達が今締められて居る鎖のまん中に金具がある。分ってるな？」

大柄な女奴隷が大きく嗚咽して鞭を受けました。今朝よりも更に鞭痕がふえて居ました。

「……その金具でだ、地面に字を書くんだ。どう云う字かと云うのだ、『私は奴隷でございます。人間ではございません。』と書くんだ。登録番号も書け。知らない字は仮名でもいいが、あそこの木の根元から、あの柱の所迄、大きくはっきりと書くんだぞ。十分以内にだ。足の鎖は除ってやる。まごまごしたり、読めない字を書いたりしやがると……」

四角な顔をした男の職員は奴隷達を睨み回しました。哀れな奴隷達は、鞭の音におののき震え乍ら、世にも哀れな姿で次々と地面に屈辱の文字を書き綴らされました。道路に集まった社会の人々に嘲けられ乍ら、オイオイと泣き悶えては不様に転倒し、鞭の一撃に天を仰いで号泣しては身を起し、汗を流して庭をうごめく姿は本当に

哀れでした。そして其の挙句にさんざんけちをつけられ、再び足錠を嵌められた彼等は

「お前は十回、お前は十五回、こら、此の女のはてんで読めやしないじゃないか、二十回だ。お前は中々うまかったから五回でいい。そっちのでかい方の女はてんでやる気がないな。いいと云う迄走つとれ。」

と、広い庭の周囲を鞭で追われて走りました。昨日から施こされたばかりの重い足錠の短い足鎖を引張っては転んで苦痛に呻き、後手錠の腕をもちきにもがいて、必死に立ち上ってガチャガチャと足を踏み出す彼等の全身は、土まみれ、汗まみれになって、もはや恥も何も吹飛んだのでしょう。泡と涎を垂れた口を大きく開き、汗と涙で霞む両眼もうつろにただ前方を見詰めて、形相も哀れに喘ぎ喘ぎ小走りに走るのです。

「も、もう……お赦し下さいまし……お慈悲でございます。」

唯一人いつ迄も走らされて居た元マダムの女奴隷が地面に倒れ、泡を吹いてのたうち回りました。大きく波打つ背に鞭が飛び、女奴隷は死力を尽して立上って二、三步踏み出しましたが再び倒れ伏しました。もう哀願する力もないらしく、地べたに延ばした両足首の皮は破れて、黒々とした鉄環に沿い薄赤く血が滲んで居ます。

「こんなものね。」

「ホホホホ。そうね、もう赦してやりましょうよ。さ、立つのよ。」
鼻環につけられた捕縄を無慈悲に引上げられた女奴隷は、はらわたに泌みる様なかほそい悲鳴を挙げて、ずるずると立ち上ってよるめきました。

「ああ、面白かったわ。けど少しばかり、可哀想にならない？」

「奴隷だもの、仕方ないじゃないの。さ、行きましょう。」

道路で鉄柵越しに眺めて居た社会の人々は、おのおの立ち去って行きました。



四月の収獲は、流れい子筆の口絵「腰元自刃」。グラビヤ四枚組写真「女性の血紅切腹」。南方純「切腹フォト評判記」。藤村陵子「私の切腹体験記より」等、多彩なものであった。

「腰元自刃」は私の最も好む姿態で誠に結構なものであって、分譲写真「こし」より遙かに勝る傑作と思う。只、欲をいうならば、もう少し美人で、刀を突き立てた瞬間のショッキングな表情を、もっとリアルに描いて欲しかった。大塚啓子のグラビヤ組写真は、大分以前の擬態写真の方がよかったように思う。

南方氏の切腹フォトのあり方についての意見は、仲々参考になったし、近代女性ではあるが、好ましいカットが嬉しかった。藤村さんの体験記は、大分以前

に三回ほど発表されたものに比して、マニヤらしいムードに富む佳作であるといえるだろう。又、麗子さんの挿絵も楽しめるものだ。といった具合で、昨年五月頃からのKKは、ずっとマニヤを慰さめ、楽ませてくれる唯一の雑誌であると思っていた。しかるに、「編集手帖」に意外な、否、悲しむべき記事を見出して、一筆書かざるを得なくなった。

それは、神奈川県某団体からKK編集部に対する「勧告」とやらで、今後の編集方針が変るかも知れないというニュースである。実は私も、KK以外の類似誌が

余りにも刺戟的な緊縛写真を盛沢山に収載して、堂々と街頭に出されているのを見て、こういうことになりはしないかと心配していた一人である。

これらの写真類が、未熟で感じやすい青少年に対しては、決してよい影響は与えないだろうということはいうまでもないと思う。しかし、これが暗示となって、真接又は間接に、犯罪につながるものであるかどうかは、心理学の専門家でない私等にはわからない。「勧告」にも指摘されているように記事よりも写真や絵が、大きい影響を与えるということも事実であろうと思う。それは、マニヤにとつて口絵やグラビヤ、挿絵等が一切無くなって、単に記事だけの雑誌となった場合、その楽しさは半減することは確かであるから、容易にうなずける。

事は違うが、戦前は女性の裸形は芸術的な彫刻や写真位にみられただけで、挿絵等も余程少なかったものだが、戦後、女性の裸形

が「解禁」され、所謂ストリップが公開されるようになった。そして、余りにも赤裸々な煽情的な絵看板等が街頭に並ぶに及んで、当局の「勧告」に依って排除されたことがあった。これと同じようなことが、今度起ったのである。

KKの編集部としては、今後、如何にあるべきかについて、いろいろと協議していただけることと思うが、希わくば、口絵、グラビヤ、挿絵等を全廃するというような、極端な転換だけはしないいただきたい。

同じ女性切腹のそれらにしても血痕淋漓といったものや、内臓露出に至るほどの惨酷な場面は割愛して、大和撫子らしい慎しい姿態で悲愴美を漂わした、常人が見ても美しく感じるような、絵や写真を発表して欲しいものである。

切腹のほかの事については、私は何もいう資格はないかも知れないが、「右へならえ」で、以上に準じたような編集方針をとられるならば、世人も是とし、マニヤも救われるものと信じるものである。

この「危機」に際し、折角発展を続けるKK誌に対し、その善処を望むこと切なるものを覚え、敢て愚見を開陳した次第である。

四月号を読み 兵頭庫一

ガン作・マニヤのノート

(私のバーでの会話)



芳野眉美

A しぶき

湯道具をかかえて、A夫妻がドアを押した。

「はずかしいな」とA夫人。

「そんなことないさ」となかなかむつまじい。

「晩酌はなさらないのですか」と聞くと、「ビール、一本か二本。

でも、私がみんな飲んじやうの」と笑った。

「この人、そんなに強いほうじゃないでしょう。バーのふん囲気は好きらしいんだけど」

それからこんなことを云った。

「寝る前にビール飲むと困るわねおトイレが近くなっちゃって。そうでなくても私、近いほうでしょう。」

「おいおい」

「困るの、本当に。だって、おトイレに行く時、どうしても——ち

やん(とAの弟の名前を云って)の部屋を通らなければいけないでしょう。昼はいいけど、夜はねえ」

「間取りがよくないんですね」

「そうなの、——ちゃん、高校生でしょう。よけいなのよ」

A夫妻、顔を見合わせた。

「それでね。考えた末、とうとう買っちゃったの」

「何を買ったのです」

「フフ」

Aの顔が赤くなったのは、ビールのせいばかりではないらしい。

「お部屋ですませば、気がねしておトイレに行かなくても、すむでしょう。」

「ああ」

「この人ったら、はじめ、びくびくして見てるの。おかしかったわシブキが顔にかかるのにねえ」

B 噴水

「いやんなっちゃった」と麻美が云った。

「お風呂でアパートの隣りの二号さんに会ったのよ。二人であったまっていたら、その人いやにお湯をかきまわすじゃない。あついのって聞いたら、おしっこしているのよだって。驚いて飛び出しちゃった。」

「お湯に入ると、気持ちいいからね」と私、「その人だけじゃないさ、案外しているんだよ。赤ちゃんもいるしね」

「その人、一度したら、やめられなくなっちゃったんですって」

「ほう、いくらぐらいの人？」

「三十二、三かな。二号さんタイプの綺麗な人なのよ」

「一緒に入りたいな」

「えっ？」

「いや、別に」

「御主人が来るとね、近くの旅館の内湯をもらいに行くのよ。一緒に入るんでしよう。その時もしちやうんですって」

「御主人、知らないのかい」

「それがねえ、御主人がお湯の中にもぐって、顔を洗ったんですって」

「やれやれ」

「噴水みたいに、お湯が出るなって云ったって」

C 写真

「妻の写真を見せましょうか」とその中年の客が云った。「これです」

「——」

「わかりませんか。お尻ですよ。妻が寝ている、足のほうの掛蒲団をめぐって写したんです」

「大きいでしょう。妻は二十貫近くあります。私は十貫そこそこ」

その客は海水着の肥満した女性の写真をポケットから出した。

「お若いんですね」と私は云った。

「いや、三十七です。もっとも私よりひとまわり若いですが」
夫人の顔と、その豊満な臀部を見較べていることは、はつきり云

S M 対話

社長と女秘書

中野三郎

つて、ちょっと刺戟的だった。
「これが妻のヌード」とその客。
「今度連れて来ますよ、パーは好きだから」

社長「節子さん、又一段と美しくなりましたね」

女秘書「あら、社長さんたら、お世辞がお上手なのね」

社長「いや、本当だよ。全く君は美しい」

女秘書「うふふ、そんなこと言つて、又私の馬になりたいんでしょ？」

社長「節子さん、お願いだ。どうか僕を馬にしてくれ。頼む。この通りだ」

女秘書「馬にしてあげたら、いくら呉れるって言うの？」

社長「この前と同じように、五万円あげるよ」

女秘書「たったそれっぽっち？私、お断りするわ」

社長「じゃ十万、いや十五万円出そう。それでいいだろ」

女秘書「社長さん、あんた私を馬鹿にする気なの？ 私とあんたとの関係、人に知れてもいいっていうの？ 私の馬になって部屋中を這いずり回ったり、私の足をなめまわしたことを社員達に知られても、かまわないって云うの？」

社長「節子さん……。貴女は全く素晴らしい……」

女秘書「うふふ、いくら呉れるって言うの？」

社長「五十万あげよう」

女秘書「じゃ、今すぐ小切手書いて。早く。うん、これでよし」

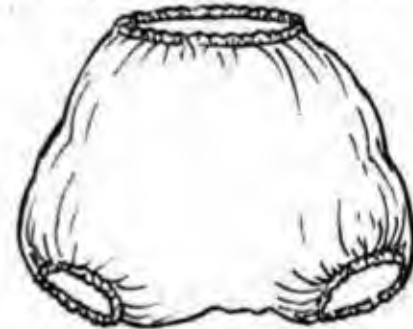
社長「早く乗って」
女秘書「よし、今日は背骨が折れる迄乗りまわしてやる。いいか、それ歩け。ハイドウ、ハイドウ、うふふ、今に本当に思い知るから。うふふ。」



男子どれい用鍵付ブルマー
(綿メシ皮・内側綿ゴム張り)
男性飼育用



男性どれい用ブルマー
(綿ビニール・金属リング付)
男性飼育用 - トルコボーイ用



男性用ズロース
(綿メリヤス製・白・ピンク・ブルー)
一般下穿き用



男子用サルマタ兼用ブルマー
(ヒモ入り・針金入り各種)
一般下穿き用



紳士用おしめカバー
(綿ゴム・綿ビニール各種)
夜尿症用 - 特殊プレイ用



紳士用二重ゴム入りズロース
(綿ナイロン・綿ゴム張り)
夜尿症用 - 外出用等

美女縛り

の希望

河野新太郎



一月号から貴誌を見始めた二十四才の男、私の好むのは、美女縛りのポーズです。それについて、私の希望を次に書いてみます。

第一に縄のかけ方です。後手にしろ、前手にしろ、手首（足首）の縄は最低三回はまいて下さい。二月号の「剃玉子と縄」のような縛り方では、私は満足しません。

二月号にくらべると三月号はよかったですね。とくに私がいいなと思ったのは、「逆海老の態勢」と「二等辺三角形」「さるぐつわ哀歎」それに「美しき獣口」の十五枚、この中の後手の縄のまき方が気に入りました。

私は後手に縛った場合、縄目が見えないと満足しないタチです。何枚かの組写真の中、一枚は必ず後手姿を縄目が見えるようお願いします。私も若い女の人を縛って写真を撮りたくて仕方ありません。

先日貴誌を買いに町へ出ましたら、荒物屋の店先につるしてあるロープが目につき、あんな細いしなやかなロープで女の人を縛ったらいいだろうなあと、もうその事が頭から離れません。

それから三月号の「緊縛フォト撮影の実際」で終りの煙草責めの所。絹川文代さんが後手に縛られ

て両方の鼻の穴へ火のついた煙草をさし込まれています。たゞえ猿ぐつわをしていても、さし込んだだけでは駄目です。苦しくなれば両手はきかなくても、頭を強く左右にふれば、かんたんにとれてしましますし、又テーブルの角へこすりつけても、とれてしまします。（私は自分の鼻で実際にやってみました）

十円か二十円で売っているセロテープ、あれで鼻と煙草をつなぐのです。こうしますと、頭をどんなに強くふっても、決してとれません。責められて苦しいからといって、自分でとれるようでは、責めにはなりません。

三月号の読者サロンで羽村京子さんが、妊娠した女性のモデル志望を希望しておられますが、私もその一人、大賛成です。とくに八カ月以上の大きなお腹の妊婦の方のモデル志望を希望します。

臨月の大きなお腹をかかえた妊婦の逆海老縛りや手吊りのポーズは、考えただけでも嬉しくなりそうです。八カ月以上の妊婦の方、どうか奇巧のモデルになって私を満足させて下さい。

次に私のアイデア。二月号の懸賞小説「契約書」の一八三ページ

に出てくるあの絵を、下宿の娘と云うような題で写真にしてみたい。それと三月号、一五六ページのあの絵、あのポーズを梯子を使って写真にしてみたい。その梯子を板壁にたてかけて後と前を一枚ずつ、そして今度はさかさにして、また前と後を写すのです。それから、梯子の両端をテーブルにかけて、上向きにしたり、下を向かせるのも、いいんじゃないかと思っています。

次に、大塚啓子さんにさるぐつわする時、大塚さん自身の髪の毛を三月号の「噛まされた黒布」のように噛ませるのです。一度やってみて下さい。噛まされた黒布の最後の写真、左の足も右足のようにして髪の毛を持ってヒザで立たせ、正面から写せばもっとよかったですね。直立不動のまま、肩から足首まで肌が見えなくなる位ギリギリ縛ったのもお願いします。

最後にひとこと、ヌードモデルではないのですから、素っ裸は感心しません。パンティかパタフライは必ずはくようにして下さい。下手な字で永々と失礼しました。虫のいい話ですが、私のアイデアが実現されることを希望します。（福島県西白河郡A・S・K生V）



ドレイ・ボーイ への手紙

中村 武志

津久井 毅君

君の二月号での願望告白を見て出来る事なら君の様な、互いに楽しみ合える同志と付合えたらと思ひ手紙した次第。

小生、廿二才の大学生、健全な体格にて、まあ普通の青年だが二年程前、ある本屋にて奇クを見て以来、まだ実際にはプレーした事はないが、Sなんだ。それも同性を責めてみたい欲望の持主。

若し君（敢えてお前と呼ぼう）が左の文面を読んで同意し、先ず手紙にて俺への恭順の意を表すならば、今後は付合つて共に楽しみ合おう。

先ず今後のお前は俺を御主人様と呼ぶ事、俺の命令には何事に依らず絶対服従にて一切の反抗を許さざる事。常に俺に対して献身的に奉仕する事を厭ひとし、俺の氣に召す様な奴隷となる事。

俺は今春大学卒業と同時に一軒

を構えるので、俺の奴隷として、

俺の洗濯、食事、寝具等一切の世話や家中の掃除等の仕事を与え、若し少しでもサボったりミスした時は嚴重に処罰を加える。年令では僅か一才の差だが、御主人様と奴隷の身分の差、少しの遠慮もなく酷使してやる。お前は何といつても奴隷の身、家の中ではいつても手錠をかけたままで、足には短い鎖で結ばれた二つの輪をかけたまま仕事をさせる。

俺もGパン愛用者だが、お前には俺の古いGパンを素肌直接はかせ、上半身は夏は裸、冬はシャツのみ許してやる。牢といった処がないので、夜は俺のベッドの下で手錠、足の鎖のまま、首には俺の所有たるを表す太い犬の首輪をはめ、それから太い鎖でベッドの足につないだまま寝させてやる。食事はいつも俺の済んだ後、残りを与えてやる。仕事のない時は

（そんな事は少いと思うが）お前の言う様に俺の勉強机の人間椅子として使つてやるが、勿論少しでも動けば、奴隷の身、直ちに仕置を加え、鞭打の刑に処してやる。

俺は以前馬術部在籍の経験があるので、乗馬道具一切の持合せあり、革製乗馬ズボンをはき、拍車をつけた長靴をはいた俺が、お前の人間馬に跨り、鞭をあて乍ら家中を乗回してやるが、若し途中で潰れたりすると承知しないぞ。直ちにお前を裸にして縛り上げて、俺の氣の済むまで鞭うったり撲ったり蹴ったりして処刑してやる。

風呂では俺の全身を洗わせ、又揉ませるなど、何事も俺の命令通り行動し、忠実に仕えなければならぬ。何故なら、お前は一個の人間ではなく、一匹の奴隷なんだからだ。又、人間トイレ、顔面騎乗、其の他種々の縄縛り、鞭打ち等を試してやる。

以上の様に真に俺の忠実なる奴隷として俺に奉仕する事に異存なければ、先にも言った様に、先ず手紙にて俺への恭順の意を表わし奴隷の誓いを述べるならば、其の後、改めて俺より会う日時を指定しよう。



御下着干

仕奉
の
断片
美柳
輪生



御靴奉持

ゴム製囚衣の魅力

△古川裕子さんを偲んで▽ 秋 本 利 夫

昭和二十七年頃の本誌から、三十年頃にかけての本誌の誌上を賑わしていた古川裕子さんの作品を時折読みかえしてみても、私はひとり一入、古川さんをなつかしく思うものだ。

殊のほかには私は、裕子さんと同

じようにゴム製品の、あのヌメヌメとした感触を人一倍愛好するものだからである。もともと、ゴム製品といっても、色々あるが、その中で羽二重の裏にゴムを引いたレインコート（これは古川裕子さん御愛用の囚衣に通ずる）を、



連作「少女」人質

牧村興次画

特に私は好むのである。

そして私は、モデルとしては梨花悠紀子さんのような、細面の全身がすらりとしたタイプの、哀愁を帯びた顔立の人に、私の一人よがりだが、古川裕子さんのイメージを持っている。

それ故に、梨花悠紀子さんをモデルとして、次のような私好みのフォートを、製作してほしいものと思うのである。

これは私ばかりではなく、古川裕子さんをも含めて、多くのゴムファンの共感と、支持が得られることと思う。

一、フードもかぶり、ベルトも締めて、きちんとレインコートを着込んだ立姿。

一、横坐りになり、裾が大きくはだけているポーズ（此の場合、裏のゴム面が充分見える様に心がけて欲しい）。

一、胸がはだけて両の乳房が見えるポーズ。

一、レインコートをぬいで胸に抱えているポーズ（此の場合、レインコートの上の方を胸にかかえ、裾の方は脚にはさむ）。

一、ベッドの上に、レインコートをひるげ（ゴム面が上になるように）て、その上にうつ伏せに寝

ているポーズ。

一、腰部にレインコートをまきつける。

大体以上のようなアイデアであるが、モデルは古川裕子さんのイメージにぴったりの梨花悠紀子さんにしてほしい。そして、あのヌメヌメとしたゴムの独得の感触に陶醉してゆく、ムードの強いものを希望する。

尚、写真撮影の場合に、是非とも気をつけてほしいことは、レインコートの表地の絹の光沢と、裏面のゴムのヌメヌメとした質感、これが十分感じ得られるよう、照明には特に配慮して頂きたいものである。

モデルは直接肌にあのヌメヌメしたゴムの感触を感じさせることが必要だが、腰部には総ゴムのオムツカバーを着用させても結構だと思ふ。

そのほか、非常に光沢のある生地、例えばサテンで作ったドレス（中国服等のように身にぴったりついたもの）などを着て、その上から、ゴム引きのレインコートを羽織ったポーズも、サテン地の光沢を照明によって強調できたら面白いと思ふ。

モデル嬢への呼び掛け

僕の大好きな

大塚さん

柿本茂



ボクの大好きな大塚啓子さん、貴女は三月号で、とうとう逆エビに縛られ、髪をひっぱられてしまいました。痛そうな顔。ボクは見えていて、なんだかとても可哀そうな気がして、どうにもなりませんでした。

辻村さん！ 迫真の演出は必要でしょうが、あんまり、ひどくいじめないで下さいよ。ボクの大好きな大塚啓子さんを……。

二の腕にしっかりと喰い込んだ縄目。やわらかそうな啓子さんの肌が、見るもむざんにくびれています。

背中にもわかれた両方の手首も、もうこれ以上あがらないと思われるくらい。

ボクは見えていて、思わず、もうそんなにいいじめないで、と叫んでいました。

別にそんなにいいじめなくても、啓子さんはただ縛られただけでとても美しい。

本誌の口絵に、はじめてデビューしたときから、ボクを惹きつけた大好きな啓子さん。ボクの目の前に、手の先から足の先まで、痛さにあえぎながら、悶えている美しい啓子さん。

ボクは貴女の写真を見ているとき、この世に生をうけた喜びに感激するのです。

ボクは、美しいポーズで縛られた啓子さんの姿の、どの部分も大好き。食べてしまいたいくらい好き、好き、好き。

ボクの大好きな啓子さん、どうか、お元気で、いついつまでも、ボクの目を楽しませて下さい。お願いします。

絵物語かぞえうた

田村清彰

ひとつ、人質、捕われて
ふたつ、振り袖、お姫様
みっつ、身悶え、駕籠の中
よっつ、夜道をさらわれる
いつつ、縛しめ、後ろ手に、
むっつ、無慈悲な狼轡
ななつ、縄目は高胸に
やっつ、柔わ肌括られて
ここのつ、この身は高手小
とおで、閉じ込む座敷牢。

ひとつ、緋色のもみの裏
ふたつ、震える両袂
みっつ、身を緊む縄の味
よっつ、夜更けの静けさに
いつつ、いつまで繋がれる
むっつ、無情な縛り縄
ななつ、涙にうなだれる
やっつ、優しき囚人の
ここのつ、声なく端坐する
とおで、扉に下ろす錠。

白
い素
足
で

早川イサム

空っ風の吹きすさぶ、或る街角の歩道であった。

パスの来るのを待っている私の目の前を、一人の少女が歩いていった。

二月の寒い風が音をたてて吹いているというのに、その少女は白いソックスをはいているだけだった。

風にひるがえる紺のスカートの裾からは、白い脛が、まるで真珠のように、私の目に輝いた。

それは白い肌だった。こんな寒空にさらすには、余りにも痛々しいと思える美しい白さだった。

しかし、自分の美しい脛に自信を持っているのか、その少女は、多くの人達の目を意識しながら、悠々と歩いていった。



画を望む

マゾ

北村

馬曾男

店頭でパラパラとめくった新年号。たった二枚の絵の為に遂に財布の口を開いた。

即ち口絵の『重量感』と中程の少年を尻に敷いて舟を漕いでいる絵とである。マゾ的な男性には、もってこいの好材料である。筆者の姓は何れも春川さんだが、前者の名はナミオとあり、後者の名はナオミとあった。何れが正しいか？此の誤植は未だ誰も気がつかぬ様だ。

さて、アラ探しはこの位にして前者の『重量感』の方だが、組敷かれていての方の恰好がよくない。勿論この足の恰好がよいと言う人もあるが、僕はとらない。それに男の言葉が、あれでは喜劇だ。矢張り真面目な文句の方が

迫真的だ。『お姉さん（奥さん、マダムでもよし）重いよ、苦しいよ』『今夜という今夜は、承知しないわよ』といった会話にしたら断然光る。

次に中程のボートの上の絵も、こんな場所の挿絵でなしに、前者の口絵の場所にチャンとした絵で描いてほしかった。漕いでいる女性少年を尻に敷いて背を向けていたのではつまらぬ。矢張りこれも少年の顔を漕ぎながら見下ろしている様に描かねばなるまいに。それこそドッシリと重量感を与えながら、可愛い少年の腹の上に跨ってボートを漕いでいてこそ面白いというもの。加うるに、少年が海水パンツ一枚、女が所謂ビキニ・スタイルだったら、錦上花

を添えたらうに、惜しいことをしたものだ。濡れい子さんあたりに次号で描いて貰いたいもの。比較して悪いが、滝さんの方が春川さんよりマゾ男性には、うけるのではないだろうか。どの絵も迫真的だから。殊に大傑作『従姉と中学生』の二枚が黄金的な価値がある。だが、その後の彼女は余りパツとしなのは何故だろう。

春川さんとして我々を十分満足させてくれるものなら、勿論言うことはしない。次回にこんな構想の絵は如何？

一、柔道二段の心得のある凄腕肉体系の有閑未亡人。一夜入浴中のところへ押し入った泥棒を捕え、仰向けに組敷いて馬乗りになり、覆面をはぎとったら、目のさめるような美少年だったので、

『今夜はただじゃ帰さないからネ』

逆に泥棒を威しているところ。二、もう一つは、美しいビキニ・スタイルのグラマーが海水パンツ一つの美少年の胸の上に馬乗りに跨って、両膝の下に少年の両手を組敷き、もう一人の、これも海水パンツ一つの少年を横抱きにかかえ込んでいる図。題して『ダブル・プレイ』

ダブル・プレイなら、必ずしもかかる絵でなくてもよろしい。場所は絶海の孤島でもよいし、幾ら助けを求めても駄目な大洋のボートの上でもよい。

男が女を征服するのは、古今東西何千年もの昔からの事、強い者の勝つのは当然。従ってこれでは平凡だというのが僕の意見。せめてマゾの脳裡の世界では、アブノオマルなものを要求してやまないのだ。現実には到底充たせないものを、芸術の世界に求めて何の不思議もない筈だ。

「戦後は靴下と女が強くなった」と云われるが、或は僕の日頃夢見る女上位が実現しつつあるのではないか。社会的地位や年令的に女性の方が年上だと、どうしても婦人が上位について指導し易い。いわば姉であり母の立場である。

「チャタレイ夫人」「ボバリイ夫人」「赤と黒」皆然り。従って夫人と下男、令嬢と運転手、後妻と年少の息子などはマゾの好題材である。或は女性同士の責め（男性のは興味なし）の図などには快哉を叫びたい。美しいグラマーが男性の気持になって年下の美しい女性を組敷いている図なども計画してほしい。（東京八馬曾男）



まぞ川柳自註

凝 脂 の 水

西 田 仁

凝脂の水滑らかならず

流れ来る

銭湯は由来、女湯の水が男湯へは流れこまないように建てるものだそう。ところが、下水側に高層アパートの窓がある当団地ではあべこべ。今どきこんなことを気にする人もあるまいが、注意してみているといろんなものが流れてくる。

女湯に積んだ小桶の

はぜぐあい

女湯の足拭きマツトの

傷みよう

その風呂屋を団地会の集いに借りる。平常見ることのできない女護ヶ島の実相二件。尻敷き

足舐め。女はそれを好むというマゾヒストの手記が決して嘘ではないことを、万人に立証するような小道具の表情。

サジスチン自殺するのはまんが稀れ

その前にちと

御用命下されば

12月11日付よみうり夕刊は、マゾヒストにとって悲しいニュースをのせた。東京江東に住む柔道一級21才の女工員。弟とケンカして、これを投げ飛ばしたことが近所で評判になったのを苦にして自殺。遺書に曰く「女らしくなれないのが悲しい」と。巴ごと恥じて絶ちける玉の緒の、山本節夫あるを知らざり。

<M 画>

モノの味倍加法

綾満須男・画



斉藤栄子さんへ

金沢均

東京都中野区の斉藤栄子さん。

誌上(三月号)の便り拝見しました。小生は杉並区に住む一青年サラリーマンです。大学在学中に古本屋で参考書を探しているときふと奇譚クラブを見つけ、中を開いてみて、びっくりしてしまいました。小生の気持にぴったりの記事ばかりでしたから。

それから数年。今では毎月奇譚クラブの出るのが待ち遠しく、小生の愛読書の一つになっているのです。今まで気がつかなかったのですが、私にはSの傾向があるのではないかと思っています。

私は空想で毎夜(少しオーバーかな)みめうるわしき女性を縛ったり、コルセットでいためつけております。

しかし、現実には、いまだ女性を縛ったりムチうったりした事はありませんし、そんな機会すらありません。

さて、貴女の便りを見て大変うれしく思います。そして私は貴女

と会いたくてたまりません。

私の好みの趣向は、まず栄子さんをパンティとブラジャーだけの姿にして(栄子さん、ごめんなさい。しかし、最初はいやがって、いやがては喜ぶでしょう)しばし、貴女のグラマーぶりを鑑賞します。つぎに、手をうしろに組んで縛ります。ブラジャーを上下して縛り、両足をひらいて縛ります。これで、バンドで打つ準備は完了というわけです。

バンドはあなたの美しい脚へ尻へと飛ぶのです。しかし、私は貴女の美しい肌にきずをつくるのは嫌いですので、あまりバンドではたたきません。平手で叩くのみにとどまりたいと思います。貴女の望みでしたら、バンドでもムチでも打つ気があります。

またクリップ等で、いためつけでも見たいと思います。洗たくバサミでいためることは、あまりにも苦痛がはげしい事と思いますので、あまりして見たくありません。

貴女のわきの下を羽根等でくすぐります。すると貴女は真紅にな

って擦ったさをこらえるでしょう。今、空想するだけでも楽しくなります。また貴女が望むなら流腸もしてさしあげましょう。またパンティやオムツカバーにうまくかきをつけて、あなたにそれをはかしてあげる事も、貴女が望むのなら、してさしあげます。

空想するだけでも、私は大変幸せです。どうか私と交際して下さい。私のこの通信が誌上にのったその日から、毎週土曜日には(午後一時ごろから二時まで)新宿駅東口にいます。

さて、ここ二、三カ月の奇譚クラブを見るに、グラビヤ頁がだんだんとすばらしくなって来ましたね。私の目を大いにたのしませてくれます。ただ大塚さんの写真の少いのは、多少残念な思いです。それにくらべて梨花さんの写真は、多少多いのではないかと思います。竹野さんは、ますます磨き

がかかって来ているようで、今後がたのしみです。

緊縛フォト撮影の実際は力作であると思います。もっとくわしく説明して下されば、もっと良いと思います。

さて、口絵ですが、四馬孝さんの、昔のように拷問服をつかった(皮の服)絵がいつも出てこないのは残念です。どしどし、使用した絵を画いて下さい。

小説では近藤一さんの作品がもっとも好きです。また『宇宙のどこかで』は、少しマンネリになりました。だしたのではないかと思います。竹谷十三さんは、どうしたのですか。このごろ氏の作品におめにかかりませんが、氏の尻打ちの文はいまでも心に残っています。

またマゾヒズム関係の文が多いように思われます。サドの皆様、サド小説が多くなるようにしようではありませんか。編集者の皆様の活躍をきたいしております。

栄子さんはじめ東京のマゾの女性と、どこか喫茶店でゆっくり話し合ってみたいです。では寒いですからカゼなどひかずにガンバッテ下さい。

(東京都杉並区八金沢均)

アクロバットと

白足袋のアラベスク

「曲馬団」の娘より 阿部能丸・画



製品紹介 アメリカ製の生理帯

古川真哉

サニタリー・ガードル

(Sanitary girdle)

兼用生理ガードル。人絹、綿。
分離出来るストレッチ付。一つは
二重アセテート製の不断用。もう
一つは生理時に使う綿ゴム製の股
あて。ガーター付。白色規格品。
小(ウエスト24~26インチ)中(27
~28インチ)大(29~31インチ)
船積み重さ6オンス、8F2731—
—Ea3.49ドル。

ナイロン・シールド

(nylon shield)

ナイロン・タフタ製保護帯。防
湿性。股布。濃バラ色。規格サイ
ズ、小(24~26インチ)中(27~
29インチ)大(30~32インチ)特
大(32~35インチ)船積み重さ2
オンス、8F2754各89セント。2
コならお安くします。1.39ドル。
サニタリー・ブルマー

(Sanitary Bloomers)

強力二本あみ、トリコット製人絹。長さは膝まで。ウエストと足

は弾力性、耐湿。耐酸性の股下。
ナプキン止め付。どうぞ規格サイ
ズで。小(ウエスト24~26インチ)
中(27~29インチ)大(30~32イ
ンチ)特大(32~34インチ)白。
船積み重さ5オンス 8F—2.735
各々1.57ドル。

セーブ・オン・ナイロン・オア・レイメン

(Save on nylon or Rayen)

アン・バートン・サニタリー・ブリーフ

(Ann Baton Sanitary Briefs)

防湿。縫目は安全と保護を与え

ている。ブリーフはすべてキチン
と身体に合うように短くカット
し、走ってもずらないし、長い間
身に着けていられる。ウエストサ
イズは小(24~26インチ)中(27
~28インチ)大(29~31インチ)
特大(32~34インチ)
ナイロン・ブリーフ、白のみ。
規格品、重さ各3オンス、8T7265
76セントのものを各々69セント、
3コ1.89ドルのものを3コで1.79
ドル。

アン・バートン・サニタリー・パンティス

(Ann Baton Sanitary Panties)

人絹かナイロン製。横を長くカ
ットしてある。安全保護のための
防湿。走ってもずれないし、長く
着ていられる。ウエストサイズ、
小(24~26インチ)中(27~28イ
ンチ)大(29~31インチ)特大(32
~34インチ)

レイモン・パンティ、白のみ、規
格品、重さ各5オンス、8T2766
76セントのものを各々69セント。
3コ1.89ドルのものを1.79ドル
で。

ナイロン・パンティ、白のみ。
規格サイズ重さ各2オンス、8T
9481—1.68ドルであったものを各
々1.56ドル。2コでは2.79ドル。

体験記

真昼の格闘

守口隆夫



編集部の皆様方には愈々御壮健のこととおよろこび申し上げます。

小生二十三才の一サラリーマンですが、最近奇クの愛読者になりました。卒直に感想を申し上げますと男性サド・マゾとか、ソドミーの記事が少いように感じますので、この方面に力を入れていただきたいと思います。

小生体格は悪くなく極めて健康（身長一・七メートル、体重五七キロ）ですが、女性の友人も有り乍ら、何となく遅ましい青年にひかれる傾向があります。同性愛の経験は次の一回しかありませんが真に希望する友人が出来ないので非常に悩んでおります。と、申し

ますのは、定評のある映画館などや男娼の出没する街で相手をみつけるのは容易ですが、ホモ気のある相手には嫌気がさしますので、その気がなくて、しかも相手になつてくれる人を探すのは、非常に困難です。

遅しい体格の美青年を銭湯などでみかけますと、こうした人と力の限り格闘して、へとへとになるまで組打したい気分一杯です。

小生がただ一度それを経験したいと思ひ出を次に御報告したいと思ひます。京都に社用で出向いた帰途、枚方で下車して淀川の堤防を散歩した折のことです。五月晴れの堤防に一台の小型トラックが置いて

あり遙か彼方の川原の草むらに、独りで跳躍したり逆立したりしている上半身裸体の若者を見つけました。僕は全身ジーンとした感じが走るのを覚え、思わず堤防を走り下ってゆきました。

案のじよう、僕が最も期待していた通りのタイプの遅しい青年でした。一・七メートル位、六〇乃至六五キロ位の体格で、たしかに今の堤防上のトラックの運転手とわかりました。そつと見ていると彼はいろいろの運動をやっているようですが、やがてズボンを脱ぎすてパンツ一枚になつて柔い小砂の上で柔道の投げの型で、自分の体をなげつけました。独り相撲の形で

どんどん砂上に体当たりしているの、僕は彼がエネルギーの発散を試みていることが直感的に判りました。

大急ぎでパンツ一枚になつて彼に近づき、声をかけますと、彼は非常に驚いた様子でしたが、年配も体格も同じ位の僕をみて、角力をとつてもよいと応じてくれました。僕は卒直にお互いに体力の限りの組打ちを頼みました。彼は三、四キロ位軽く見える僕を省みて、「面白いなあ、何ほでも相手したるで、さあ、やろか」といどみかかってきました。

僕は少しばかり柔道の手を知っているのですが、余りその手を知っていない彼とは立技では互角ですが寝技で組むと、矢張り体力負けを感じましたが、五月の太陽のさんさんと降りそそぐ下、人目につかぬ草むらの川原で、半裸の若者が今精力の限りをつくして斗っているのだと思うと、ギリシャの昔のパンクラチオンを想像して、汗は滝のように流れ、息もつまるばかりでした。

こうした格闘を四回繰り返えし延長二時間位にわかつて組打ちしました。その後二人で水泳して身体を洗い、そのまま握手して別れ

ましたが、裸体のままで別れ、別々に着衣して帰途につきましたので住所も氏名もすべて不明のままです。其の後も、会ったことはありません。せめてトラックのナンバーでも記憶していたら、連絡方法もあったのに残念でなりません。読者の中に小生と同じような好みの方がいましたら、誌上で何とか御連絡願いたいと思います。なお小生、胸囲最大九八センチ、腹囲最小六六センチ、腰囲八五セ

ンチで極めて健康体です。体格のスタイルは満点に近いと自信を持っています。

春光輝く大草原でギリシャの昔を偲びながら真裸体の一騎討に、全力を傾注して斗う楽しみはどうでしょう。不健康な女性交友とくらべて、ずっと男らしいではありませんか。名乗りをあげて下さる青年の出現を希望します。

(大阪AT・M生)



連作「少女」 肴

牧村興次・画

サロン 通信

昆布褌雑考 森 太一

伊帆氏は私の「昆布褌」に関心を持って頂きましたが、山本氏は嫌悪の批判をされた。私とて最初から昆布褌を愛用していたのではなく、やはり晒木綿の褌が出发点だったので。小学五年の時、学校の規定の水泳褌が晒だったのです。この褌は、巾十センチ位、長さが一メートル半位だったと思います。前の垂れは十センチ位の所に麻紐が通してあり、ちょうど六尺褌に前の垂れをつけた恰好のものでした。私が六尺褌などに異常な興味を覚えたのは中学生になってからで、晒木綿の六尺褌をはじめ、ネルの三角褌、黒いズック地の木綿のモッコ褌、帆前掛の褌へと進展して奇異なものに憧れたのです。そして遂に「昆布褌」と言う我乍ら突飛な褌を考案して愛用するようになったのです。

自分でも了解に苦しんでいました。しかし、モッコにせよ六尺にせよ、昆布の褌をした時は、勇氣凛々、不思議な感動を覚えるのです。私は何人も想像し得なかつたであろうと思われる、この奇想天外な昆布褌を考案した自分を、独りひそかに誇っている訳なのです。若し私の「昆布と少年」「昆布記」をお読み下されば、私のこの異常な執着の心理も、多少ともご理解頂けるものと思っています。

私としては奇ク誌が、晒の六尺褌からそう逸脱した世界にあまり踏み込まないのを、まことに遺憾に思っているのです。世間には、私の「昆布褌」以上に、奇異奇妙な褌を愛用されている方があるものと信じます。

読者の方よ。どうか、私の「昆布褌」以上の奇想天外の褌の体験記をひろうして下さい。又、小生の「昆布褌」に対するご批判、ご意見を賜る機会のあることを切望しています。

△サロン通信▽ 〓編集長へ〓

審議会の勧告を

機に寄す

西田 仁

四月号「編集手帖」拝見しました。いろいろ苦心のことと思いますが、私としては児福審議委員の勧告を妥当なものと考えざるを得ません。昨年十一月はじめてお手紙をさし上げ、さらに三月号の「読者通信」でとくにお願ひして樋村京氏のご感想に賛意を表明したのも、ひとえに「芸術的な香りを持つものにまで高められた」グラビア、真実の告白、読むに耐える小説等で、全誌面が埋められることを熱望したからに、ほかなりません。

四月号「編集手帖」拝見しました。いろいろ苦心のことと思いますが、私としては児福審議委員の勧告を妥当なものと考えざるを得ません。昨年十一月はじめてお手紙をさし上げ、さらに三月号の「読者通信」でとくにお願ひして樋村京氏のご感想に賛意を表明したのも、ひとえに「芸術的な香りを持つものにまで高められた」グラビア、真実の告白、読むに耐える小説等で、全誌面が埋められることを熱望したからに、ほかなりません。

にも責任がある。ごじぶんの生理的要求ともいふべき望みを、ナマのままぶっつけている通信をよくお見受けします。が、用心ぶかく選ばれて誌上に発表されたのであろうものにして、そのうなのですから、活字にならず、しかし編集部ではご覧になっている投書のなかには凄まじいものがある。と推測されます。そこで藤山秀緒さんのように、自作を送稿したものかどうか、直接読者に訊ねるような前代未聞の作者があらわれてくる。掲載を熱望するあまりでしようが、藤山さんにかぎらず、編集部としてはこういう声に毎日取りかこまれておられることと拝察します。そこでなるべく多方面のマニヤにサービスするため、心ならずも掲載に踏み切ってしまうた記事や写真もあることと思ひますが、ここで思い切つていってしまえば「もともと発行部数の多きを望まない」御誌としては、そこまでサービスする必要はない。「實際行動を未然に防止する安全弁」を安直に二百円で売買しようとするのは、土台むりなはなしではないでしょうか。

本文の記事にしてもそのとおりです。私はM傾向の小説を掲載ねがっているもので、同傾向の作者のものごとくに興味深く拝見しているのですが、そのうち一、二の例を挙げさせていただければ、鞍良人氏の「馬のり短歌」(36・12)や四月号山本節夫氏の「フアンタジア」など、用語、表現などの点で、もうひとつ洗練されたかたちに打出してほしいと望むこと、切なるものがあります。二月号で山本氏がしみじみと自己の性癖を語り、その不思議な行為を告白してくださったのは、私も、大きな共感を禁じ得なかったのですが――。このように、マニヤの手記は、ややもすれば自慰に陥る危険が多く、編集部へ毎日送られる匿名原稿には、そういうものがかなりあると思われまふ。私自身、その種の自作を秘かに持っているのですから。しかしこれが発表されるとなると、やはり問題が起き易いのではないのでしょうか。

それにひきかえ、前にも触れた「偏執記録の断片」(36・10)十篇(目次には原研吉氏のもの落ちている)はいずれも率直な告白で、客観性もあり、これなら「誰にも指弾されることのないマニヤ誌」として、恥ずかしからぬ内容と申せましよう。それから繊細な

情感と羞恥とを行間に漂わせながら綴られる北原操さんの手記。
 論議のかまびすしいセックスについて、私は原則として解放論に組しますが、しかし、これが物理的SMを重視すると、実作上いいものにならない場合が多く、その点だけをとり上げて、一般の雑誌と同一に論ずることはできない。慎重に構えるのが賢明でしょう。

まぞ川柳自註(追加)

漫才

西田 仁

漫才のお琴優しく

佐助責め

漫才の宮お金さと

ぬかしたり

漫才のコプロに落ちて

拍手なり

漫才のノミの夫婦の

芸達者

漫才のどれもこれもが

マゾ好み

女上位の世相を反映してか、漫才のネタも増えた。靴下とおんな。巴板額春琴ナオミ奴の小万を総動員。お宮さんまでが

う。

さて、今後の方針として示された五項目のうち、「一」と「五」はべつとして、その他はいずれもグラビアが槍玉にあがっているのは、以上申し述べた私の所信からいえば不満です。ここでいたずらに姿勢を低くして「韓信の股くぐり」(二月号サロン)をするというようにお考えにならないで、内

メつくなつた。

寺坂が来たで

責め場も南部坂

雪責めで瑤泉

格を落とすところ

御存知、南部坂雪の別れ。戸田局、吉良方の間者を捕え、瑤泉院の前に引き据えたところに寺坂吉右エ門が駆けつける。戸田局、弓の折れを持ったままうろろしたかどうかは、講師師も見て来なかった。

容そのものを、高度に充実させる方向に進んでいたきたいものです。外部からの干渉にその都度身をかわすより、投稿者も含めた製作者全員の質的、技術的の向上により、いい雑誌をつくることが発展の基だと思います。その意味でこの度の勧告は、飛躍のチャンスでもあると思うのは青臭い私の机上論に過ぎないでしょうか。マゾフォトだって、「正真正銘のサジスチン」春日嬢全盛の頃は、きれいなものがありました。それからさしえ。これは大いに改善の余地があります。文中の情景、当時の風俗を無視したもの、そうした不勉強を如実に思わせるような粗雑な絵が、「アブ誌探点表」でも減点の要因となっていたようですが、これが分譲写真の広告と相まって、低俗ムードを流していることは否めません。

ところで今は、大人そのものが「読む本」から「見る本」に吸い寄せられた結果、大人も子供も同じものを「見て」楽しむ時代になってしまいました。
 読者通信を見ても、口絵、グラビア、さしえに関する注文がじつに多い。これは全般的な傾向で、二月号「まぞ川柳」で触れたこときグラビアが、茶の間用の一流誌の巻頭を飾るというような風潮こそ、大人のお行儀として好ましくない現象だと思えます。すでにお察しのことと思いますが「まぞ川柳」はそんな意図の下に書いており、したがって取材は一般の社会現象にみずから限定しています。本当をいえば、大人のあたまから直さなければ、どうしようもないのですが、それはまた、べつの問題でしょう。
 以上貴社の営業に直接関係することですので、それゆえ今日迄控えていた主張を「手帖控」のお呼びかけに応じて書き綴りました。私信として参考にされても、あるいは誌面に発表引用等されても結構です。
 二月二十八日 西田 仁
 箕田編集長殿案下

一月特大号(定價二百円)

讀者通信

「風流いろは歌謡多」

讀者通信

次裏一風流いろは歌唄多

說者通信

第一口絵杉葉いぶし。アザ

說者通信

女斗美絵巻
シリーズNo11

決戦

提 供
雪 崎 京 人



ある告白——内海昇一

もう一人の私



「孤独」とは冷酷な言葉だ。私はこの言葉をいつ頃から意識するようになったのか。多分青年期の始め頃、センチメンタルな小説を愛読していた年頃からだろうと思われる。

だが、その「孤独」の私に、ある一時期になると、もう一人別の私がハイド氏の様に現れる。明るい社会に背を向け、神をも怖れぬ背德的行為と承知しながら、満たされぬ心の隙間風にいつも身悶える私——それは私の意志や、自制では防ぎ切れないもう一人の私の本能なのだ。そう、私は正常人には「おH」と云われる「女装と自縛」の愛好者なのだ。とてもこんな告白が一般に通用することではないだろうが、同好者の人ならば、私の狂った異状な告白に耳をお貸し下さるのではないかと思います。今夜も声なき嘲声に耳を塞ぎ、恥ずかしさに身悶えながら私はこの拙文をつづる。

それが私の中の、もう一人の私に捧げる供養なのだ。私の奇妙な告白に諸兄姉よ、お笑い下さい。私は自分の過去、そして現在の私の秘密の扉を開くことにする。

団地の日中は静かだ。ぴったりに閉め切った部屋の中は、世俗の雑音から一切開放してく

れる。厚いカーテンにおおわれたガラス窓の外では、暖い初春の太陽が明るく躍っているばかりだ。私の熱い吐息ばかりが極度に緊張した心臓に音を立てて響いている。私は椅子から身を起こすと恐々と何度目かの鏡台に近寄る。鏡は私の中のもう一人の私の女装の姿を鮮明に写し出す。それは私にとって、胸が締めつけられるような喜悅の瞬間である。

軀をびっちり締めつける、紺に横縞のはいったセーター。黒いストラップス、茶のソックス、そして頭には水玉模様のネッカチーフをピンで止めて、顔には、勿論あくどくない程度に化粧している。この軽装が、もう一人の私の不断着なのだ。月の内何度か、私はこうして現世に於ては不可能な願望を、異性の着衣や化粧で慰さめわずかの時を満足して、はかない夢園の中をさまよう。

私は鏡の中へ微笑む。横向、上向あらゆる角度を写す。すると鏡の中の私はその度に喜しそうに頷きかえすのだ。私はマニキュアの光る両掌の指を組合せ紅唇へ愛しそうに近づける。私は好きな癖が出た時は私が満足した証拠だ。私は時計を見上げて時間を確めると煙草を唇にくわえる。この瞬間に鏡の中からは私の姿が消えて、醜い男の姿が覗く。その

瞬間が私の大嫌いな時だ。私はあわてて煙草をもみ消す。口紅のついた煙草が灰皿に落ち込む間に、鏡の中から男の影が消える。私はほっとすると改めて顔を直す。

昔の女形は、私生活に於ても女の生態を通したと聞く。芸の上とは云え、私はその意慾を尊敬する。

さて、私はいよいよ自縛にかかる。既に用意してある紐の束は、腰紐の様な柔らかいものを撰んである。家の中に適当な柱の一本もないことは、こんな時不便を感じる。紐の束を一本に延ばすと、その先端を台所のドアーのノブに結びつけ、もう一方の端にあらかじめ作ってある輪の中へ、私は後手に廻した両手首を差込みぐーっと引張る。すると輪はするすると手首へ食込んで、もうめったなところには緩まない。解く気になれば別だが、自分で縛り自分で解くのだから方法もある。時代劇映画の目明しが投縄に使う結び方。あれを女結びにしただけの、簡単な方法を使用している。さて両手首を縛るとぐーっと引張った紐を、肩にかつぐように体を廻れ右させて後向きに直り、思い切り後手首を水平に上げたまま、長い紐へ体の方からぐるぐる巻ついていくのだ。そして縛られた後手首を使ってノ

ッブに結んだ紐を解く。

自縛が終って私は又鏡の前に戻る。私は時の闘争の跡のように肩で荒々しい息を吐きながら、鏡の中を覗き込む。そこには最前の女装を無惨にも乱し、セーターの胸や腕に、痛々しく紐をギリギリ巻きつけた私が、紅唇を嚙んで身悶えているのだ。私の上半身は捧になったように固定され、その内だんだん苦痛が増して来る。随分我慢して見るが「こんなことして痛いばかりだ」と私は呻く。しかし別の私は「まだ解くのは早い」と云う。私は立ちかけた腰をおろす。私の理性は又負ける。もう一人の私の熱情に抗しきれぬ私の悲哀。

いつの間にか私は、苦痛の中から自虐の喜びの中に落入ってゆくのだ。食込む紐に締めつけられて、頭の中に熱い血がかけめぐる。誰か私を裁いて呉れないか？ 若し人を裁ける人間が居たら……。そう、人を裁ける聖人など居ないと思う。「人を計るうつわにて己も計らるるべし」しかし私は裁かれたい。この狂態につかれた人間を……。私はその人の足下に痛い体を折臥すだろう。

少年時代、あれ程願望していた女装緊縛が、こんな形になって実現されようとは、直接的

に私の眼を開けさせたともいえる、姉も知るまい。そう、私にも人並の少年期はあったのだ。随分昔の事のようにも思うのだが……。

瀬戸内海の中でも、風光明媚随一と称されるS諸島が目前に展がって、平和なP市の片隅、塩田産業で名の通ったKの町。貧しい田舎の町だが、そこが私の生まれ育った故郷だ。私の生いたちなど愚にも等しいことだが、私も人の子、木や石から生まれたわけではないから簡単にのべよう。父は健在で再婚者、つまり私の実母は早死をした様だ。私の兄弟は姉一人、年は三才上だ。父は浜子だが実におだやかで、かって私も姉も、父に叩かれたことなど一度もない。義母もよく出来た女性で、私達は貧しいが平和だった。だが、この温室の中で私と姉は、誰の性癖を受けついでたものか、縛りごっこ、の秘密を、大切に胸の中に隠し合って成長した。

姉はだんだん年下の私に縛られるのが不満になったのか、縛る方ばかりに廻ったおかげで、私は始終縛られてばかりいた。縛ると云っても子供のことで、寝巻の紐で後手首を括るぐらいのたわいない遊戯だった。

ある秋祭に着物を着た姉が、義母に連れら

れて宮参りに行くと言関に立った容姿は今でも忘れられない。それまでは、単に「縛りごっこ」の相手だぐらいにしか考えていなかった私の眼前に、しとやかな和服姿で大人の様な帯を締め、白粉濃い顔が笑っているのだ。悪童のようにぼかんと突立っている私の鼻先へ近々と笑い顔を覗かせた姉の、香料の匂いを深々と吸込みながら、私はこの時くらい姉をうらやましく思ったことは初めてだった。

「姉さんはいいなあ。きれいになれて」

その晩、私は姉に云った。

「そう？ 女ですもの」

「女、か」

私は解った様な返事をしたが、実際には何一つ解っていないかった。

何故、女は化粧が出来るのに男はしないのか？ 着る物も何故違うのか？ と私はただどしく姉に訊いたが

「知らないわ。嫌な子ね」

と姉は、私があまりくどいので本気に怒ってしまった。

私はついに返事を得られないままに終ってしまったが、私が異常な程、姉たちの着物や化粧品に関心を持つようになったのは、その時からであつたろう。

その頃から、姉はもう「縛りごっこ」に興味を失ったようで、妙に大人ぶって私を説諭したりするようになってきた。

夏になって盆踊りが始まった。この娯楽の少い海辺の田舎では、年中行事の盆踊りがありこちで始まる。無形文化財の踊りの本場に近いことは、幼い頃から誰でも踊りを覚える。腹の中に響く太鼓の音は、老若男女の踊り手を集めずにはいない。踊り場は又、田舎の若い男女の社交場でもある。そして若い人達は、互に異性のゆかたを着て踊ることを公認された一夜なのである。

私が十六才の夏の盆踊も、こうして始まった。ある晩、太鼓の音にせかれるように夕飯を終え、姉は私に云った。

「昇ちゃん、今夜あんたのゆかた借りるわ」

「厭だよ」

私はあっさり拒んだ。私のゆかたは今年新調したばかりだ。背丈も姉と変らぬ私なので姉が着てもおかしくはないだろう。だが私の肚は、この際姉にねだる交換条件を持っていたのだ。

「ねえ貸してよ」

私はわざと気軽に

「じゃあ、僕は姉さんのゆかたを着るぜ」

「まあっ、ませてるわ」

姉は驚いた顔をしたが、すぐ

「いいわよ。交換ね」

姉はすぐ私の肚を読んだ様だ。私はその次に口に出す言葉に胸をはずませながら

「お化粧もして呉れるね。昨年までのように鼻の頭を白く塗るだけじゃあ厭だぜ」

姉は日頃から、私が鏡台をつつき廻してゐるのを厭がっているくらいだから、さして驚きもせず

「昇ちゃん平気で踊れるの？ 友達に恥ずかしいくないなら、お化粧するくらい手間はいいけど」

「別に何ともないよ。夜だものな」

私は姉に食いついて先ず念願を達した嬉しさに、気が浮き浮きした。

姉は早速私のゆかたに着換えた。真白いさうして胸をぎりぎり締めつけておいてゆかたを着る。帯を腰の上の辺に巻くと

「どう、おかしいかしら？」

と問う。

だが手拭を頭からかぶって肩を張った姉は私より男姿が似合うと思った私は、無言で頭を横に振るばかりだった。

姉は自分の仕度が済むと、約束通り私を鏡

台の前に坐らせた。姉の手で、見る見る白く仕上ってゆく自分の顔を覗き込みながら、私は嬉しさに胸がはずんだ。眉を描き、口紅を塗られると、私はもう女の子になってしまった気になる。

「ゆかた、着せて呉れよ」

「やれやれ、手間のかかる昇ちゃん」

と、それでも姉は、馴れた手つきで自分のゆかたを着せてくれ、胸高に帯をきつく結んでくれた。手拭をかぶって鏡の前に立つと、どうやら夜目には女の子に見違えられる自信の様なものが湧いてきて、思わず手拭を噛みしめる。

「昇ちゃん、そんなに手拭を口にくわえてはダメよ。口紅が一ぱいつくじゃあないの」

と姉は自分の手拭が汚されるので厭な顔をした。私は成程と思った。姉は手本に、手拭の端を歯で軽く噛んで見せてくれた。だが、お茶を呑んでも、めったにコップの縁に口紅の跡など残さぬ姉の真似は、急造娘の私に出来るわけではない。

「何て不器用なの」

姉は溜息をついて遂にあきらめたらしい。

又、太鼓の音が一際高くなった。私は姉の後から踊り場の方へ急いだ。既に踊りの輪は

広場に広がっていた。

姉を呼止めた友人達は、いぶかしそうに私の方をちらちら見ていたが

「弟よ」と姉に笑いながら云われて

「まあほんと、昇ちゃんなの。おどかさわねえ」

と交々に私の顔を覗き込む。そして口々に「あんがい可愛いいわね」「よく似合ってるわ」などと、声高くからかうのだった。

私は嬉しいやら恥ずかしいやらで、会場の人の皆がこちらを覗いている気がして、もう踊る勇氣はなくなり、暗い隅の方へ寄って、姉が戻るのを心待ちするばかりだった。しかし私は、うるさい蚊に攻められながらも充分満足していたのだ。

家に戻ると、風呂で汗と白粉を落して蚊帳に入いったが、私は未だ最前までの興奮より醒め切れなかった。体が燃えるようにほてっていた。私は又もや姉のゆかたを着ると、床の上に寝ころんだ。遅れて風呂から上った姉は蚊帳を覗き込むと

「また着てるの、昇ちゃん。もう脱いでよ」

と私を覗みつけた

「厭だよ」

「脱いでよ。嫌になるわよ」

姉はたまらず中にはいつて来た。二言三言争った後、私も面倒になり脱ぐや否や、丸めて姉の顔へ投げつけた。

「まあ、やったわね」

姉は真向から私を押さえにかかった。

昔と違い、当時の私の腕力では姉の力など問題になるはずがない。好いかげんに相手にしていたが、姉があまり真剣なので、私は急に抵抗を止す気になった。私がふいに力を抜いたので姉はちよつとためらったが、小声で「縛るわ」

と云うと、私を後手にして寝巻の紐で括った。平然と縛られる私。むしろ姉の方が呆然としていたが、すつと蚊帳を出て行った。

しばらく私は縛られたままじつと坐っていた。後手を動かして見ると難なく緩んだ。姉は何故、前のように固く縛らなかったのか？不満にも感じたが私は自分で解く気にはなれなかった。

戻って来た姉は、まだ最前のままの私に照れくさそうに

「痛かった？ 御免なさい。こんなはしたないことをして」

と紐を解いた

「平気だよ」

私は何か物足りなくて

「姉さんも変ったね」

と笑って云うと、姉は哀しそうな顔をした。

「昇ちゃん、もうあんな遊びは止めましょうね。昇ちゃんも、もう高校生ですもの」

姉は、私の誘いに最後まで乗って来なかった。

思えば、愛する人と共に若くして逝った姉は、私以上に狂った異常性格の苦しみを抱いて天国へ逝ったことだろう。姉は懸命にそれに堪えていたのだ。だが当時の私には、そんな姉の心など知るはずもなかった。それどころかその夜の私の空想は大きく飛躍した。女装したことで、久しぶりに姉に括られた刺激は強過ぎた。私は空想の中で美しく粧った娘になり、細帯で姉に責められていたのだ。私は安らかに眠る姉がうらやましかった。幾度か姉を起して告白しようと思って見たが、さすがにそこまでの勇氣は出なかった。

その後も私の化粧品いじりは相変らず止まなかった。私は又、紐で輪を作って後手に締める幼稚な遊戯を憶えて、ひとり悦に入っていたが、結果は満足からほど遠い空しさを味わうだけだった。私は次第に、空想時間に長く没入するようになっていた。

二年生の春頃、私は中学の先輩で三年生の

Aと偶然のことから急速に近ずきになった。

Aと云う男は優形に似合わず田舎では名前が売れていた。大人達の眼には完全なる不良少年だが、英雄を崇拜する年頃の私達には、いわゆる「いかす」男であったのだ。だから、Aに同輩の前で心易くされる度に、私は内心得意でもあった。しかしAは私の姉にも嫌われていたので、家へはあまり近ずかなかった。かわりに、学校帰りの私を、途中で待っていてそのまま誘い出すことが多かった。

Aは、私を決って塩田の方へ連れて行った。塩田には濃塩水を溜めた槽や、浜子達の休憩に使うおそまつな小屋が幾つも建並んでいる。そこが、浜作業の時を除けばいつも空屋であることは子供でも皆知っている。Aと私はその一小屋を占有していた。昼でも薄暗い、塩の匂いの込み込んだ小屋のむしろの上で、Aは大人達の面白い話をいくつも教えて呉れた。Aが得意になって喋べる女の話は、めずらしい事が多かった割によく解らなかった。むしろ私には、Aがそんな知識を持っていることの方が驚きだった。

それからAは、決まって私を縛ったり、馬乗りに押さえつけて喜んだ。姉の優しい力と

違つて、男の力で、しかも荒縄で後手にぎりぎり締め上げられるとさすがに痛さが身に沁みた。しかし私は妙におとなしかったし、Aが止めるのを恐れていたのか、随分我慢していたと思う。

私は今でもあのAを憎いとは思えない。やがて私は縛られるために、出来るだけAの欲しそうな物を私の持物の中から持出すようになっていた。ある日、Aはいつものように私と遊んだ後で、私と同輩のSの名を云つて

「あいつも遊んでやると仲々可愛いぜ」

と驚くべきことを放言した。そして、その内に三人で遊ぼうと云う。私はSに、Aと私のことを知られていると想うと、恥ずかしさに居たたまれない気持だった。

厭がって取りすがる私に、Aは初めて不良らしい怖い眼を見せた。私はもう学校も止めてどっか遠くへ逃げ出したいと思った。

ゆううつな二、三日が過ぎて、今日こそと



と父は云った。私は一瞬ぎくつと身震いがした。

「僕は」

と云いかけるのを、派出所の人は

「いや、君にちょっと参考までに聞きたくてね」

と、父の手前が柔らかく云うと、Sがこそ泥をやり、Aの名を喋べったことから、かねてから要注意生とされていたAが呼ばれ、ついでのことに私の素行も洗われたのであった。

涙の顔で私を見つめる姉の前で、私は懸命にうつむき続けた。刑事は始終無言で私を見下していたが、話しが済むのを機会に「では、君達の現場へ案内してくれ」

と私をうながした。

姉と義母の見送る前を、私は罪人の様に、父と警官二人に挟まれて例の小屋へ連れて行かれた。大人達の眼には、私達の花園も薄汚れた不潔なバラックにしか写らなかったことであろう。刑事達

恐々帰る途中も何事もなく戻った家の玄関には、顔見知の派出所の巡査と私の知らない年輩の男が待受けていた。その男は刑事さんだ

は一通り私からAの言動を聞き出すと、むしろをはねたり、土を掘って見たりして何か探していた様だ。私には解らない。帰る途中で刑事は、父とAの余罪について話していたようだった。そして言っていた。

「充分気をつけて下さいよ。Aの様な者に近ずけては、子供さんは悪くなりますよ」

そうします、と父は何度も何度も頭を下げていた。

家に戻ると、先ず姉が「バカな子」と私を睨みつけた。

「まあ別に罪になることでもなし、お前も自分、家で謹慎するか」

おとなしい父は、それ以上くどくは云わなかった。

その後、Aは退校になった。大阪に行ったと噂されたが、私はその後一度も会わない。その内に私も、試験勉強などで頭の方もいそがしくなった。自然、退屈を忘れてガリ勉家になっていった。

平凡な学生生活を卒えると、私は現在のK市の製糸工場に就職した。寄宿舎にも入って私の生活はサラリーマンのレールの上を脱線もなく走った。そして数年。同じ会社のB子

と、三年の交際の後に新家庭をもった。

B子はクリスチャンであることを除けば、平凡な女であった。B子も例外なく私に信仰を求めていたが、私はいつも一笑するだけだった。熱心なクリスチャンであった姉は、先年、新聞の三面記事に載った心中事件を遂げて天国へ逝った。私が、敬愛して止まなかった姉の死から受けた打撃は、神を憎悪することではなく、むしろ私自身の将来への希望も夢も粉碎することだった。空しい心の私がB子を知り結婚までするとは、私も満たされぬ欲求を、人一倍抱いていたのかも知れない。

主言ひ給う、汝等の罪許されたり

唯信じるだけで、神の御名に於て私の心の罪は消えるのか？ よし消えても、私は一こう変らない私ではないか。気休めに思うだけなのだ。私は主に救って貰う前に、姉の後を追うだろう。私は姉を見捨てた神に今も背を向けるのだ。

「父よ彼等を許し給え、そのなすべき事を知らざればなり」

私は結婚式の前日、ひそかに持っていたバイブルを焼いた。B子は今でもそれを知らない。

新家庭は間借生活から始まった。半年もす

ると共稼ぎにも馴れてきた。私は勤務の関係から夜勤が多い。夜勤、夜十二時—朝八時迄をやる。と体は疲労するが、昼間は一日家に居れて、割合時間の余裕があった。

妻は朝出勤すると夕方でないとは帰らない。

私はそろそろ退屈し出した。時間のあるままに、妻にも云えない自縛に、その退屈をまぎらしていた。だが、やはりわびしい「孤独」を感じないわけにはいかなかった。その「孤独」をかこつ期間は相当に長かった。いく度か妻に告白しようとしては、その都度勇気をくじかれて果せなかった。やりきれない気持ちで、自然に現われる気うつを妻にいぶかしがられたことも一再ではなかった。そんな私がK誌を発見した時の驚きと喜びは、本誌の読者ならわかって貰えることだろう。私は一頁一頁を生唾を呑んで読みふけた。数々の体験告白。私は事実であることを信じたかった。私の「孤独」はその形をいちじるしく変えて来た。気うつに代って生色が私を包んだ。私は新刊が待遠しく、古本屋を探がしてとうとう二、三冊の月遅れを発見した。そしてどの本も現実私に他の同好者の多いことを証明していた。私は繰返し繰返し読んだ。K誌はもう私の生活の一部分になくはならぬもの

になっていた。

ある晩のこと、妻は私を軽蔑したような顔で云った。

「貴方、あの本なあに？」

「見たか？」

「机の中に隠したりして……嫌らしい人」

別に隠す気ではないと、妻に説明するのがおっくうだった。私はそれより此の際が彼女の気持を打診する機会だと思った。

「お前、あの本に興味ないかい？」

「全然ないわ。だって、皆創作でしょう」

「冗談ではないよ。皆真実だよ」

私に妻を試す意図がなかったとは云い切れない。彼女の素質に私は万一を期待したのだが、それは総て失敗したようだった。だが、私の果せなかった妻への告白が、こういう形で実現した。その時は話題が別の方に移って済んだが、折を見て嫌がる妻を細引で後手に縛って見たが、「痛い痛い」の連発に一寸興味も湧かず、終いには

「何か悪いことしたみたいよ。どうしてこんなことするの？」

と悲しそうな声を出すしまった。

仕方なく私は、妻に縛り方を説明して私を後手に縛らせて見たが、彼女にクリスチャン

の自負がある限り、私の趣味には絶対迎合しないつもりなので、うまくゆくはずはなかった。私は又も「孤独」を覚えた。満足に話してもせずに、一気に目的に突き進もうとする私に無理があることは解っているつもりでも、私が敢えて玉砕戦法に出たのは、結局、相手がおかしいと希いながら、ひたかくしていた孤独感が、私を狂わせたのだったろう。

たいていの事なら私の自由になる相手が側に居るために、この度ぶっかった新たな孤独の壁は、あまりにも冷たく淋しかった。

間もなく、私は自分自身では押さえ切れぬ誘惑に負けて、再び独りひそかに女装自縛で孤独をまぎらせるようになっていった。女装に必要なものは妻の物で最少限度間にあう。日中からカーテンを引き鍵を掛けた部屋の中で、私は「女」に没入してゆく。妻が身につけるものは、大半私の体には合いくい。それを無理を承知で着るために、衣類は総べてびったりと窄衣のように締めつけ、痺れるような感じは何とも云えない。

私は軽装が好きなので、多くは上はセーター類で通し、下はスカートか又はスラックスを穿く。ストッキングだけはデパートで割合平気で買った。靴は妻のはとても合わないが

主に座敷のことで必要もないので買わない。同好諸氏は多く和服を召されているようである。時折私も、和服を着て外出出来たら……と思うのだが、ひとりでは着物はとも着れない。故に私の女装は、現在のところ軽装に限定されたようで、少々淋しい気もする。化粧品は妻のを借用する他はない。

彼女は結婚前はクリスチャンであるだけに化粧はあまりしなかったようだ。しかし私は人前があるからと云う口実で、強引に命じて妻に化粧させているくらいだから、私達の生活水準に似合わぬ高価な品も多いので、先ず不足はなかった。私は妻に、私の趣味は知られているだけに、眼をかすめる事など夢にも考えていないので、若し咎められても平気でいられるだろう。それを知られる以前からも私は婦人雑誌などに載った化粧法について、妻と意見を交し合っていた程だから……。

随分、本などで自分なりに研究したつもりでも、実地には思うようには出来ないものだと知った。私の好みはS社のハイカラーである。これなら手軽に出来る。白粉の濃いのは嫌いだから、自分でも濃くはしないが、口元をはっきり見せるために口紅は濃い目に描く。同じS社のD系統の色が、最近私の愛

用するところとなっている。生々しい原色が私を虜にすることもある。私は時間をかけて着衣化粧に気をくばり、独り女装をととのえてゆくのである。

鏡の前で入念に自分の姿を覗き込んで満足した私は、それより自縛にかかる用意をする。最初の頃は自縛出来る範囲内をいろいろ考えた。体をぐるぐる巻にする幼稚な方法から、数も変化して現在まで来たが、自縛で一番難かしいのは後手首を自分で緊縛することだと知った。最後には自分で解かねばならない負目故に、つい緊縛になるのをためらってしまふ。私は、此の文の最初の方に簡単に書いた方法で、今のところ充分満足しているが、私

とて井の中の蛙、他に方法はいくらでもあろうと思うのだが、鈍才ばかりに思考力が廻らない。より完全なものを求めて探求するのも人情であろうが、私も一つの方法にはすぐ物足りなさを感じる。あきやすい性質かも知れない。愚鈍な私が考え出した方法が、名称をつけて呼べるものなのか、理に叶って居るのかは解らない。全く私自身説明も出来かねる。一つ例を上げると吊りがある。後手首だけで吊下げられては手首がもたなくて、胴と腕と手首の三カ所ぐらいを、細い丈夫な紐で縛る。それを一本に纏めてから吊下げて見た。充分吊れるが、足場を離れると体が空中でぐるぐる廻って止まらないことも知った。吊り

責めの緊縛感は味わえるが、長時間はとても保たぬことも知った。又場所を動けぬことを承知なら、逆海老も可能であるとも思えるが、私はあいにく部屋の中を歩き廻りたい方なので、私の趣向には向かないので、あまりやらない。考えれば自縛など寂しい限りであるが、人間、追いつめられると考えも通ずるものがあることを味わった。とにかく自分で種々やって見て、可、不可があることが解った。ここで具体的に公開したいが、長くなりそうだし、名称も解らないでは、私の拙劣な筆力ではとてもその勇気がない。

最近になって、私も長い間の間借生活をさようならして、団地へ入った。おかげで家の中は増々密室状態になり、好都合になったと云える。勤務の関係で、私の団地一帯は昼間眠る人が多いので、鍵をして閉じこもっていても、誰もあやしまない。日中、私は女装し、自縛した体を悶えさせていると、御用聞や近所の奥さん達が用事で戸を叩くことがある。

だが、私はあわてず、緊縛の身でそのまま戸口まで行き、落着いて談笑する。扉一枚へだてた内側の、この異様な私を人は知らない。「お休みのところを」と誰もそう云って帰ってゆくと、私はたまらぬスリルと刺激を受け

映画 最近の映画 通信 残酷シーン

東山映史

正月映画に縛り場面が少なくなつた。これは時代劇の映画の数が少なくなり、日活のアクションものも、その描き方が変わってきたためだろう。

東映では、わずかに市川右太衛門主演の

「旗本退屈男、謎の珊瑚屋敷」で、北条喜久の菊路がさらわれ、最後に縄で二巻ほどしばられ、千代之介の扮する浪人に連れ出される。途中で彼女が逃げようともがくが、そのもがく姿がなかなかよかった。だが、

ご多聞に洩れず、千代介の刀で縄は切られてあつけなく助けられてしまう。

今後のものには、五味康裕作「きさらぎ無双剣」で、大川恵子が縛られ折檻される場面が観られそう。彼女は、愛する市川右太衛門の龍胆月之助のために、危険を覚悟の上で悪の巣、備前屋へ住み込み、秘密文書をさぐるところを発見され、縛り上げられた上に、背後の者の名を白状せよと責めつけられる。拷問の魔手に加えて色慾の手まで迫ってくるのだが、月之助に救われるところは定石だ。

高田浩吉の「八幡鳩九郎」で、桜町弘子扮する料理屋の娘お久が、悪人ばらに拐かされ、縛られて猿ぐつわされた上に、棺桶に入れられるシーンがある。天下の美女も大変な役柄でお気の毒である。もっとも、それが重大な山場作威のポイントになるのだろうか……。

圧巻はなんといっても、大島渚監督の初時代映画「天草四郎時貞」だろう。キリシタンの迫害史で、有名な天草四郎が島城にたてこもるまでを描くものだが、その迫害ぶりの残酷さが描かれる。教徒となれば

女まではだかにして縛り上げ、ミノを着せて、そのミノに火を点ける。熱さにもだえる「ミノ踊り」だとか、半裸縛りで池の中に沈めるとか、そして最後には大友柳太朗の新兵衛、丘さとみの女房桜が、他のキリスト教徒と共に「火アブリ」の刑に処せられる場面が出てくるそう。せいさんなこれらのシーンは、迫力をもって描き出されることだろう。

松竹作品では、田中絹代監督「お吟さま」の中の、岸恵子の引廻し場面がすごい。殺生関白の意に添えとゴウ問されたキリシタンの女岸恵子が、ゴウ問にも屈せず拒んだために、引廻しの上、火アブリに処せられることになる。寒中に、薄い木綿の着物一枚きりで、ヒシヒシと荒縄で縛られた上、さらに太縄で馬の背にくくりつけられる。カメラはゴウ問のムチあとが、着物の裂け目からのぞいているのをハッキリと観せてくれる。美女が連日の責苦につかれはてて馬の背にも坐っておれずに、くくりつけられているという悲惨な有様で観せるこの引廻しのシーンは、さぞや、この道マニヤの話題になることだろう。

た満足感で、又部屋に引返すのである。

私のお粗末な告白も、そろそろ終曲が近づいたようだ。まだ何か多く云い残した事があるような気持なのに、私は恥さらしを此れ以上続ける勇気がなくなった。私の性癖について、妻は今の所あきらめたのか、何も云わない。私も日常は平凡な社会人なのだ。酒は嫌いだし、今の楽しみだけで遊興もする気がしない。妻も

「あなたに、あの性癖がなかったら、いいのだけど」

と云う昨今だ。ある時も、私の手で使い古しになった腰紐を整理していた妻は、

「新しいのがいるわね」

と笑っていたが、本当に二、三本も一度に買って来て、私を驚ろかした。

妻が私のために働き、家事をやり、そして私のために化粧して、私を主人として立ててくれるのを思うと、私もつくづくもう止そうと思う。然しそんな自己嫌悪をしても、ある一時期になると、もう一人の私が別人の様に熱情をどっと湧き出させて、止めようがなくなるのだ。夏になると私にも子供が生まれる予定だが、そうなると、家の中で今の様にはもう出来ないだろう。私は誌上の同好諸兄と一度は胸きんを開いて語る日がほしいと思う。私はそれを希んでいる。(おわり)